2017年5月22日発行・発売（毎月1回22日発行・発売） 第29巻 第7号（通巻283号） 1998年6月11日第三種郵便物認可

FlyFisher
PISCATORIAL PURSUIT

フライフィッシャー
MONTHLY MAGAZINE
JULY 2017 No.282
7
1,240YEN

中禅寺湖の静謐と昂奮

洞爺湖で出た70オーバーのニジマス

安田龍司の本流フライライン考

ティペットが通りにくいという人へ

視力が落ちても、釣りはできる。

名手愛用老眼鏡図鑑　　これでアイに通せる！サポートグッズ
偏光レンズカラーの再考　　アイを大きくする細工
見えるインジケーター＆フライパターン　　老眼アングラーの簡単ノット

Fishing Magazine TSURIBITO
70th Anniversary

JULY 2017
NO.282
CONTENTS

[STAFF]
〈Editor in Chief〉
真野 秋綱 Toshitura MANO
〈Editors〉
松郷 龍亮 Ryusuke MATSUMURA
〈Contributing Writers〉
東 知憲 Tomonori HIGASHI
浦 壮一郎 Souichiro URA
〈Art Director/Designer〉
大川 進 Susumu OHKAWA
〈Designers〉
畠山 尚 Hisashi HATAKEYAMA
小澤 篤司 Tokuji OZAWA
長岡 学 Manabu NAGAOKA
小根山 孝一 Kouichi ONEYAMA
野口 紀子 Michiko NOGUCHI
植月 誠 Makoto UETSUKI
中根 淳一 Junichi NAKANE
〈Photographers〉
津留崎 健 Ken TSURUSAKI
刈田 敏三 Toshizo KARITA
〈Advertising Personnel〉
岡村 政宏 Masahiro OKAMURA
小谷中 純一 Junichi KOYANAKA
鶴谷 修輔 Shuusuke TSURUTANI
〈Editorial Supervisors〉
若杉 隆 Takashi WAKASUGI
〈Digital Contents Group〉
滝 大輔 Daisuke TAKI

ストラクチャーに付くレイクトラウトは、重いファイトでロッドを絞る。大きいものではメーター級にもなるが、ウエーディングで釣れるのは50㎝前後がアベレージ

山上湖にも、ようやく春。

栃木県/中禅寺湖

ちゅうぜんじ

昨年は50㎝を超えるホンマスが連発するなどの好調を見せた中禅寺湖。
続く今年もスタートは順調だ。
生命感の色濃くなった湖面では、一投一投が期待に包まれる。
遅い桜の時期を迎えた湖に、今年も仲間が集った。

山口 直哉=解説
Comments by Naoya Yamaguchi
津留崎 健=写真
Photography by Ken Tsurusaki
Text by FlyFisher

山上湖にも、ようやく春。

栃木県/中禅寺湖

投げ続けるぜいたく

東京では半袖で充分な陽気が続く5月初旬、いろは坂を登り終えると、意外なほどの冷え込みに驚く。標高1269m。奥日光の中禅寺湖はまだ夜明け前。空が白み始めるのを待って水辺に立つと、すでに隣の岬にはロッドにラインを通している人の姿が霧の中にうっすらと浮かぶ。

この日湖に集まったのは、中禅寺湖好きにもユーザーの多いロッドブランド「キャプチュード」を手掛ける山口直哉さんと、そのテスターを務める高橋雅人さん、柿沼健二さん。さらに今回はティムコ社でタックル開発に携わる嶋崎了さんと中峰健児さんも合流した。皆この時期は中禅寺湖の釣りを風物詩として楽しんでおり、メーカーの枠を超えて釣行を重ねている。

さっそく湖に立ち込み、適度に間隔を空けてロッドを振り始める。ダブルハンド・ロッドの開発を担当する中峰さん以外は、皆シングルハンドにシューティングヘッドを合わせていた。風の影響こそあるものの、20〜30mほど投げれば充分釣りは成立する。この日も、時おり目の前の湖面で背中を見せつけるようにライズするホンマスの姿が。ユスリカを食っているようだ。

まだ山の端から日が昇らないうちに、高橋さんがまず1尾を手にした。アベレージでもある40㎝強のホンマス。ツルッとコーティングされたようなシルバーの輝きが美しい。その後明るくなってきたところで、山口さん、嶋崎さんもホンマスを追加した。

単調に見える湖の釣りだが、リトリーブ中の期待感は他の釣りに劣らない。湖流の抵抗を感じたり、目の前(時には足もとでも!)に魚の姿を見つけたり、さらには横で思い切りサオが曲がったり……。そして次の瞬間には自分のラインも引き込まれるかもしれないのだ。

午後になって嶋崎さん、中峰さんが今度はレイクトラウトをランディング。前夜からの雨で水温が下がり、朝方こそ不安がよぎったが、1日をとおしてみればコンスタントに誰かしらのロッドが曲がっている。

中禅寺湖通いでシェイプされた山口さんのストリーマー。濃淡のオリーブ系、ブラックカラーが中心。タイイングのポイントは、テイルのマラブーを取り付けすぎないこと。この他、ユスリカパターンも効果的

最初のホンマスを取り込む嶋崎さん。この日は、まだ日の低い朝方からロッドが曲がった

《Profile》
やまぐち・なおや

東京都西東京市在住。中禅寺湖ファンから支持の厚いロッドメーカー「キャプチュード」を手掛ける。シーズン中の釣りはひたすら中禅寺湖で、シングルハンド・ロッドを使ったシューティングヘッドの釣りを得意としている。

30年以上も中禅寺湖に通っているという山口さん。毎年季節の進行ぐあいを読みながら、釣行を繰り返す。中禅寺湖ならではの美しい魚体に、今年も顔がほころんだ

山上湖にも、ようやく春。

栃木県/中禅寺湖

「レイクトラウトはある程度付いている地形で反応の有無を予想できますが、ホンマスはいつ来るか読めません。そのため、やはり"投げ続ける"ことが魚を手にする近道になるのですが、中禅寺湖ではそれもまた楽しいんですよ」

　そう話す山口さん。嶋崎さんも昨年中禅寺湖に通って開発の参考としたニューモデルを黙々と振り続けている。その後湖畔にタープを張れば散らばっていた仲間が集合し、コーヒーを飲みつつ、だらだらと釣り談義が始まる。そして再び立ち上がってサオを振って、また休憩。そんな繰り返しで、魚のことだけ考えていればよい1日が過ぎていく。

　中禅寺湖はこれからが盛期といえる。ワカサギが接岸し、6月に入れば湖畔のセミも水面に落ち、すぐ目の前で刺激的な光景が展開されるようになる。そんな季節はフローティングラインの出番。昨年よりもワカサギが少ないという今年は、セミにブラウンたちが集中するかもしれない。今年もしばらくのあいだ"奥"日光詣でが続きそうである。

ダブルハンド・ロッド、スイッチロッドで参戦した中峰さん。風が強い時などは、こんなタックルが快適になる

キャスティング・トーナメントの世界でも活躍する柿沼さん。今年のシーズン初期はサクラマスねらいを続けていたが、もうそろそろ中禅寺湖にシフトチェンジ。安定したキャストは「魚が食うリトリーブ」につながる

中禅寺湖展望・2017
（山口直哉）

　昨シーズンはワカサギが多く、中禅寺湖のトラウトはコンディションのよい魚ばかりだった。数は少ないものの成魚のホンマスは50㎝を超え、太いブラウンはすこぶる強くて"硬い"ファイトで我々を楽しませてくれた。

　またホンマスは25～35㎝の2年魚が数多く釣れ、キャッチ&リリースが設定されているということもあり、今シーズンの期待も高まった。実際に秋から春にかけてメインのエサとなるワカサギが多ければ、ホンマスは50㎝前後に育つことは間違いなく、そんな魚は決して夢や過度な希望ではないのだ。

　5月に入り、2017シーズンもひと月半ほど経った。これまでを振り返ってみると、今期は解禁当初から好調で、連日レイク、ブラウンの画像がSNSを賑わせた。特に昨年やや不調だったルアーでのレイクねらいは絶好調で、過去にない程多くのルアーアングラーを目にした。ルアーとフライでは、隣の釣り人との距離など意識・常識の違いが多く存在し、トラブルに発展するケースも聞く。今後意識の摺り合わせなどで、中禅寺湖フリーク同志ともに楽しんでいきたいものである。

　例年であれば4月1日の解禁から3日もすると魚の反応はぐっと少なくなりがちだ。山上湖の春はまだ先で、寒く釣れない厳しい状況が続くのだが、なぜか今年は好調のまま季節が進んだ。例年解禁当初は天候に左右され、単純に言えば「暖かい穏やかな日はそこそこ釣れ、寒い日は得てして釣れない」ことが多い。それが今年に限っては、「暖かい日はかなりよく、寒い日でもそこそこ釣れる」といった状況なのである。

　季節の進みぐあいが早まったのか？といえばそうではなく、むしろ遅れ気味だ。こうして原稿を綴っている現在、ようやく桜が見頃になった。これは例年より1週間から10日ほど遅い。一方水温的にはいわゆる「平年並み」で、浅

この日最初のホンマスを手にした高橋さん。日の出から間もない時間帯で手を浸す湖水は冷たいが、魚の活性は徐々に上がっているようだった

広々とした湖面を前にロッドを振り続ける。この日はタイプ1～2でカウントダウンは10～20秒。午後になると上層近くで反応してくるホンマスも多かった

今年よく釣れているのは38～42㎝。50㎝級には及ばないが、かなりの数がいるので、久し振りにホンマスの数釣りが楽しめるシーズンになりそうだとか。この号が発売される5月中旬～下旬にかけてユスリカのハッチはピークを迎え、ホンマスの最も釣りやすい季節を迎える

山上湖にも、ようやく春。
栃木県/中禅寺湖

シングルハンドの釣りは、湖面を荒らさず静かに探れるというメリットもある。ワカサギの数は魚体の生育やコンディションだけでなく、釣り方や釣果にも大きく影響する。今シーズンは、大量だった昨年に比べかなり少ないようだ

場の水温は天候しだいだが2～4℃の間で推移していた。
好調の理由を自分なりに考えてみたが、過去およそ30年を振り返ってみてもなかなか思い当たらない。ただ解禁当初に水辺に立ってひとつ気づいたことがある。常連者は気づいたことと思うが、それは湖水の透明度だ（ノロも少ない）。
中禅寺湖は降水量などの自然条件のほか、ダムの放水によって水位が調整される。ここ数年は、「秋に満水→3月に放水し一気に減水→放水を減らし雪代や降水で水位上昇→休日の放水以外はあまり流さず水を貯め続ける→夏に満水」というパターンが多い。
それが今年は1月下旬に満水から一気に減水し、86年の華厳の滝崩落事故による大減水以来の水位まで落とした。その後なぜか例年貯め続けるはずのダムを開放していたようで、流入した水をそのまま流していたと聞く。当然水位は上がらないが、湖水の循環はよく透明度が上がった。それにより水質向上はもちろんだが、いわゆる「水が動く」という状況で、もしかしたらそれが今年の好況をもたらした要因なのかもしれない。

左から/キャプチュード『CP908ボロン』、同『CP9278ボロン（プロトタイプ）』、同『CP908ボロン』、ティムコ『J-ディスタンス908-4』、同『J-スイッチN+1108』。シングルハンドには、いずれもSA『中禅寺湖スペシャル』（シューティングヘッド）のタイプ1.5～2を合わせた

Guide **中禅寺湖**
解禁期間：4月1日～9月19日
遊漁時間：午前4時～午後6時まで（5/15～8/15は午後7時まで）
遊漁料：日券2,160円、回数券（6回）1万800円
●中禅寺湖漁協
☎0288・55・0271

ティペットが通りにくいという人へ

視力が落ちても、釣りはできる。

四十代になるころ、釣り人にとってやっかいな問題が持ち上がる。
すでに長い付き合いだという読者もいるかもしれないが、老眼である。
かくいう記者も、イブニングのライズを前に、
フライを交換する時にイライラするようになってきた。
しかし、ちょっとくらい視力が低下したからといって、
この楽しみを諦めるという人はいないだろう。
ベテランたちが立ち向かってきた、内に潜むこの難敵と、
どう向き合っていくべきなのか……？

Photography by Ken Tsurusaki

CONTENTS

長い付き合いになるのだから……

老眼と向き合うために

フライフィッシングが一生モノの趣味だからこそ、
老眼との付き合いは覚悟しなくてはならない。
この特集ではさまざまなアイデアを紹介するが、
自分に合ったものを捜すには、試してみるしかない。
老眼くらい……と甘く見ないで、以下を読み進んでほしい。
文字のサイズも、いつもより大きくしているので……。

Edit by FlyFisher

イブニングの川面に響く悲しい舌打ち

　目の前に、ぽわんとライズリングが広がった。日は傾いて、そろそろ魚たちも夕餉の時間だろうか。お、またライズだ。ようやく訪れた好機に腰を上げ、ゆっくりと水に入り、ラインを伸ばす。そして……キャスト。プールを流れるフライに、しかし魚の反応はない。あれ？　フライが違ったか。そう思ってフライを結び替えようとすると、う〜ん……見えない。

　人によっては40代になると、そろそろ症状が始まるという老眼。特に暗い時、近くの物にピントが合いにくくなる人が多い。正式には老視というらしいが、これがフライフィッシャーにとって、けっして楽観できない問題になる。アイにティペットが通らないからだ。

　しかし記者だけかもしれないが、人間というのは薄情なものだ。自分に関係ないことには、基本的には無関心である。自分が40代になり、身を持って老眼の苦しみを知ってようやく、過去にさんざん目撃したベテランたちの苦労が理解できるようになった。

　そんなわけで、老眼になったばかりのひよっこである記者も、よちよちと傾向と対策について考えることになったのである。

　老眼の主な原因は、どうやら水晶体（目のレンズ）の柔軟性が失われるためらしい。遠くを見る時、レンズは筋肉によって引っ張られ、薄くなるという。普通に釣りをしている時には、だいたい遠くにあるフライやポイントなどを見ているので、この状態になっている。

　そしていざフライを交換するとなると、今度はレンズ周りの筋肉を緩め、レンズを厚くする必要がある。だが、薄くする時には無理矢理引っ張ればそうなるものの、厚くするとなるとレンズの復元力というか、やはり柔軟性が必要になるのだろう。筋肉というのは縮んで引っ張ることはできるが、伸びて押すことはできないのだ。

　というわけで、私たちはなかなかピントの合わないオノレの目にいらだち、ライズを前に罰当たり文句をつぶやくことになる。

最近では「貼る老眼鏡」も登場

　老眼になってから、それとなくベテランたちのふとした言葉や、細かい動作を気にするようになった。注意してみると、それぞれに工夫や対策をしているものだ。

　この後のページで紹介する内容もあるので細かくは解説しないが、さまざまなグッズを活用する人もいれば、眼を鍛えて（?）目を閉じてもイトを結べるようになったという努力の人もいた。しかし、なんといっても必要なのは、結局のところ老眼鏡である。

　別にここに紹介するまでもなく、老眼鏡なんか100円ショップでも売っているし、ホームセンターでもコンビニでも置いている。しかし、ちょっと気になったのが写真の製品である。

　これは自分のメガネや偏光グラスに貼って使うという小さなレンズで、名前は『ハイドロタック』。好きな形に切ることもできて、水滴を付けてメガネの裏側に貼るだけ。余分な水はもちろん拭き取る。水を付けて貼るだけなので、何度でも使えるという。もちろん、できれば眼科の病院に行って診てもらうのがベストだが、応急的にはこのような製品も使えるだろう。

　ちなみにこの製品が気になったのは、メガネレンズの好きな位置に貼れる点。というのも多くの遠近両用メガネは、下部に近くを見るレンズ、つまり老眼鏡のレンズが入っている。これだと釣り場を歩いている時、足もとだけゆがんで見えることになり、転倒の原因にもなる。そもそも遠近両用メガネ、あるいは偏光グラスは比較的高価で、庶民にはなかなか手を出しにくい。この製品を使えば、手軽に遠近両用メガネが作ることもできる。

放っておくと思わぬ弊害も

　いずれにせよ、フライフィッシングは何歳になっても楽しめる趣味で、老眼とは長い付き合いになるだろう。そこで注意したいのが、老眼は放っておいてはよくない、ということ。

　目がよく見えないと、肩が凝ったり、頭痛がするなどの原因になる。またある研究によると、視力が低下し、しかも適切な処置を受けないままでいると、認知症のリスクも高まるという。老眼というのは、あまり語感もよろしくないが、かといって無理をして老眼鏡を敬遠していると、思わぬ弊害も起きてくる。

　ちなみに目の老化には紫外線も関係しているようで、特に釣りなど野外ですごす時間が長い場合、紫外線をカットするサングラス、あるいは偏光グラスをかけていたほうがよい。

人類の永遠の問題ではあるが……

　今号では、老眼と付き合っていくためのさまざまなアイデアや道具を紹介する。といっても長年人類が悩んできた問題に、この号で解答を出せるわけではない。

　ただ、総合してみると大切なのは「無理をしない」ことのようだ。老眼鏡をかけるのはたしかに面倒だが、裸眼でアイにティペットを通そうとしても、時間の浪費なだけでなく、精神衛生上もよろしくない。いざという時に備えて、やはりベストのポケットにひとつくらい、老眼鏡をしのばせておくべきなのだ。

視力が落ちても、釣りはできる。

“ティペットが通らない”をサポートする

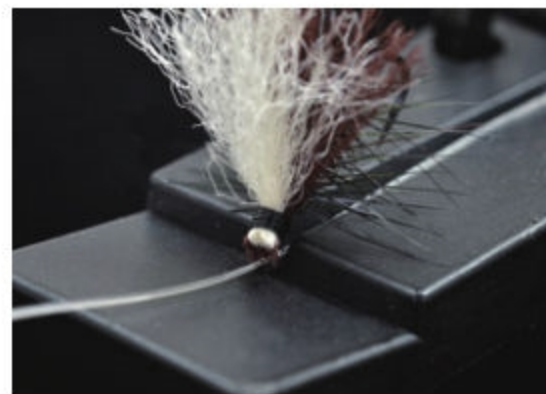
加齢による視力の衰えを最も顕著に感じるのが、ティペットをアイに通す時ではないだろうか。
日も山の陰に沈んだイブニングの時間帯ともなれば、
目の前のライズに気持ちがはやる一方で、ますます焦点は定まらない。
ここでは、そんな時のフライ交換をサポートしてくれるアイテムを紹介。
拡大鏡からスレッダーまで、快適に作業するための8点をピックアップ。

Edit by FlyFisher

正確にアイにティペットを誘導

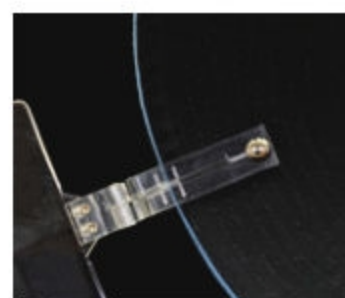
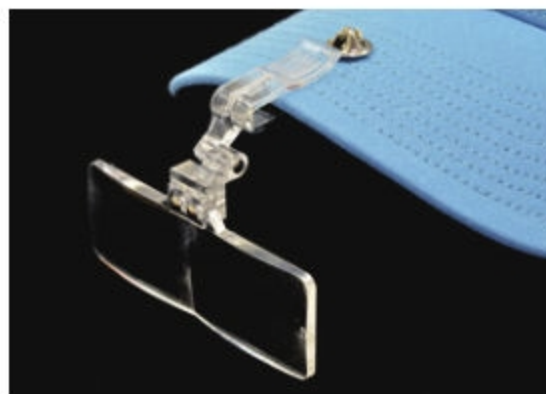
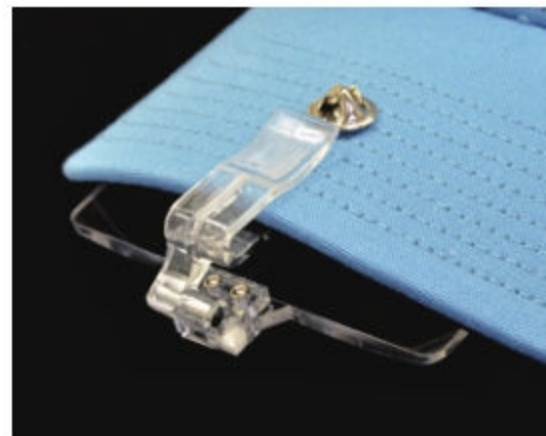
Tight Line Enterprises
マグネティック・ティペットスレッダー

上面の小さなくぼみにはマグネットが内蔵されており、フライのアイがカチッとはまる。その状態で中央に刻まれたスリットに沿ってティペットを滑らせるだけで、ぴったりアイの中にティペットを通すことができるというもの。フライを設置するだけのシンプルな本体構造だが、その精度は驚くほど。#20以上のミッジサイズには適さなないが、#18以上のパターンならかなりの確率でティペットを通してくれる。ただし、エルクヘア・カディスなどのように、アイがマテリアルでふさがりがちなフライパターンの場合は、あらかじめアイ回りをすっきりさせておきたい。また、ベストやバックに取り付けられるパーツも付いているので、イブニング時のすばやい対応にもおすすめのアイテム。
価格:1,800円+税
●サンスイ池袋店

フライをセットして、溝に沿ってスレッドを滑らせるだけ

フライのアイが溝と同じ高さになるように設定されている

ピンで確実に固定

TIEMCO
フリップ・フォーカル

フィッシングキャップのツバに装着して使用する拡大鏡。使わない時はツバの裏側に折りたたんでおくだけなので、メガネ使用時はもちろん、偏光グラス装着時にも外すことなくレンズを下ろすだけ。もちろんフライ交換のために開発されたアイテムで、2.25倍の拡大率を持つ。これにより、アイの位置に焦点が合わない……などの問題を解決。本体とツバへの装着はピンを刺して固定するタイプなので、ヤブ漕ぎや帽子をとった際に落としてしまう危険も少ない。重量は17gで、装着感も気にならない軽さ。
価格:3,300円+税

ツバへはピンでしっかり固定

キャップに固定して使用

使わない時はツバの裏に折りたたむ

鼻に挟む老眼鏡

Nannini
SOS(RSPストラップセット)

イタリア、ナンニーニ社製のユニークな形状をしたリーディンググラス。使用時は鼻にはめて使うタイプで、持ち運びに便利なカード式なので、ベストのポケットやポーチにもすっきり収まる。フライ交換時にだけサッと取り出して使えるようなデザインもうれしい。ストラップをセットすれば首から提げておくことも可能。鼻にはめてレンズを保持するので、偏光グラスによっては掛けた状態でも使用することができる。さらに重量は約4gと驚くほど軽量。度数は+1.00、+1.50、+2.00、+2.50、+3.00の5種類をラインナップ。
価格:3,000円+税(SOS単体は1,800円+税)
●リアルサイトプロジェクト

RSPストラップセットには、ストラップのほか、クロスと皮製ケースが付いてくる

メガネに直接セット

REAL SIGHT PROJECT
拡大鏡

手もとの細かい作業を見やすくする、メガネや偏光グラスに簡単に取り付けられる拡大鏡。クリップ式で取り付けも容易なうえ、レンズを跳ね上げておくこともできるので、釣行時は偏光グラスにずっとセットしておくという使い方もOK。メガネをかけている人であれば、室内のタイイング時にも活用できる。度数は+1.50、+2.00、+2.50、+3.00の4種類をラインナップ。
価格：2,000円+税
●リアルサイトプロジェクト

メガネや偏光グラスに装着できる

フリップ式を採用

キャップにも、偏光グラスにも

REAL SIGHT PROJECT
拡大ルーペ

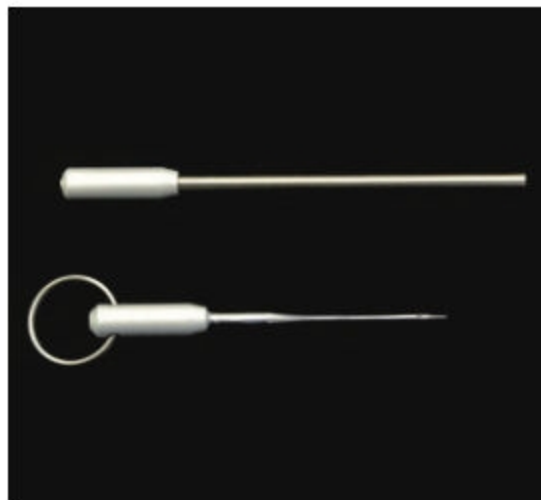
キャップのツバ部にクリップして使う拡大ルーペ。使用しない時は折りたたんでおけば視界の邪魔になることもない。さらに、メガネや偏光グラス本体にクリップして使うことも可能なデザイン。傷が付いてしまったりした時のために、交換レンズもラインナップされている。倍率は1.5、2.5、3.5倍の3タイプを用意。重さは装着するレンズによって多少異なるが、17～20gと軽量。
価格：2,500円+税（交換用レンズ1,500～1900円+税）
●リアルサイトプロジェクト

キャップのツバに固定した状態

偏光グラスへも装着可能

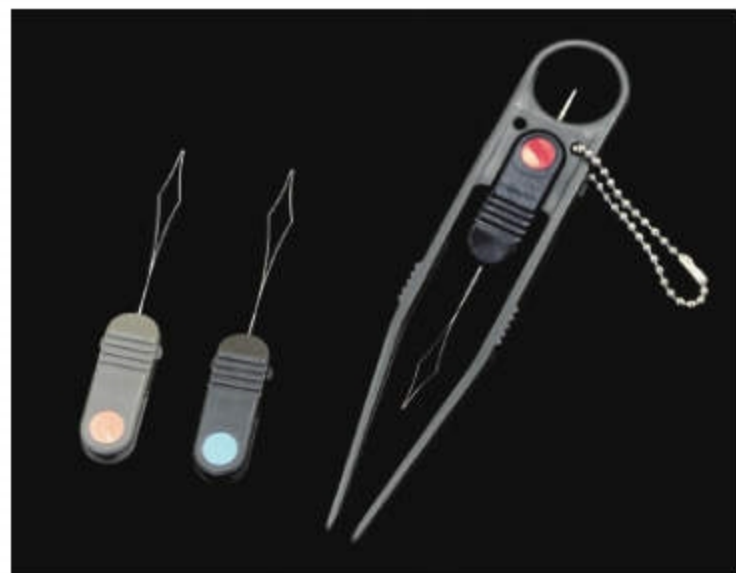
小さなフライを楽々ピックアップ

C&F DESIGN
3-in-1 ネイルノットパイプ

フライラインに穴を空け、リーダーを通すニードルと、ネイルノットパイプが一体化した便利ツール。こちらはアイにティペットを通すためのツールではないが、もう一つの機能として、先端の磁石でフライをボックスからピックアップすることができる。小さいフライパターンなど、特にイブニング時にはつまみにくかったりするもの。そんな時に磁石で簡単にピックアップしてくれる。拡大鏡やスレッダーと合わせて使うとフライ交換がより快適になるアイテム。
価格：1,300円+税
●シーアンドエフデザイン

スプライサー（下）とネイルノットパイプ（上）

先端の磁石でフライをピックアップ

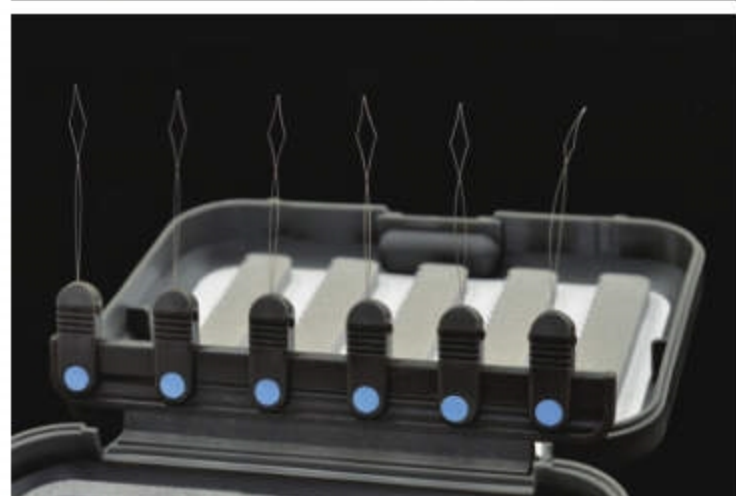
フライチョイスからノットまで一連の作業に

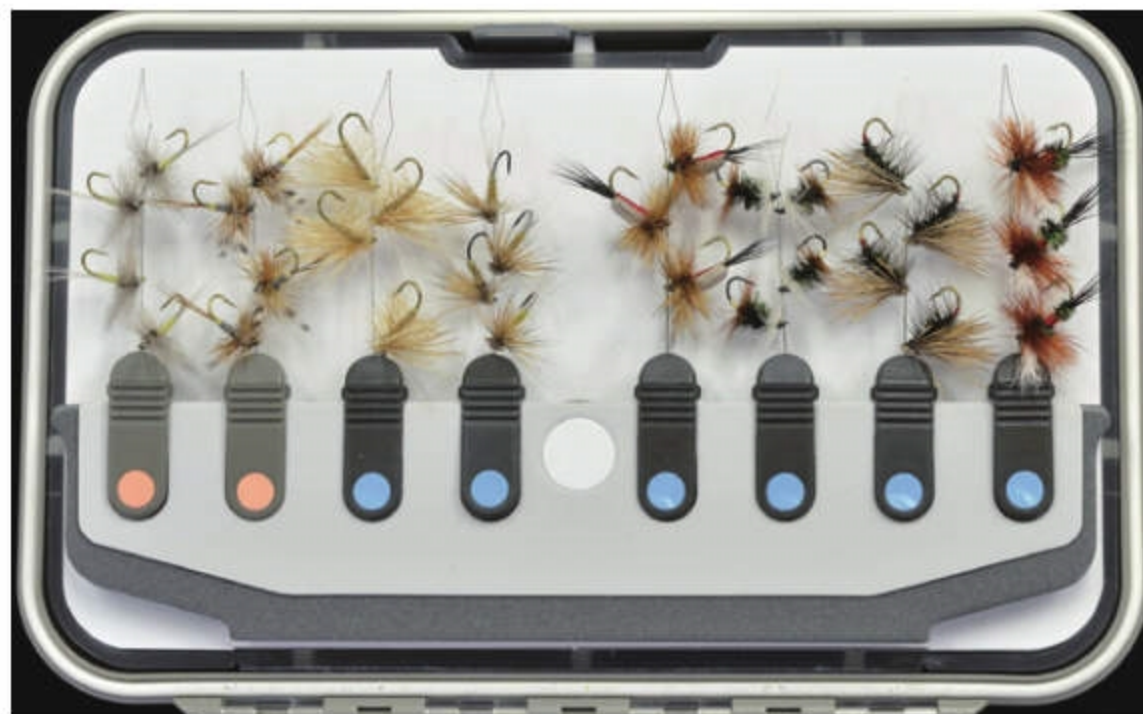
C&F DESIGN
3-in-1ツィーザー／スペアースレッダー

『3-in-1ツィーザー』は、フライのピックアップに便利なツールだが、ティペットをアイに通す時に、簡単便利なスレッダーが内蔵されているので、こちらと合わせて使えば、小さなフライの結びも楽になる。さらに、3in1の名のとおりアイクリーナーも付いているので、フックアイがマテリアルやヘッドセメントでふさがっているケースにも対応する。スレッダーは、スタンダード、ミッジ、ウルトラミッジの3タイプが各1本ずつ付属する。
このほか、『スペアースレッダー』も各サイズをラインナップ。スタンダード、ミッジ、ウルトラミッジの3サイズに加え、それぞれ針金の長短2タイプがある(ウルトラミッジはショートタイプのみ)。各スレッダーにはブルー(#16〜19)、ピンク(#20〜26)、レッド(#24〜32)のカラーシールが貼られており、対応サイズが一目で分かる。
価格:3-in-1ツィーザー/1,500円+税、スペアースレッダー/1,000円+税
●シーアンドエフデザイン

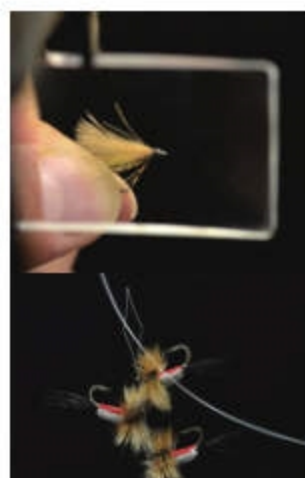
アイクリーナー部分

この状態でフライを引き抜けばティペットがアイに通る

もはやアイを見る必要もない

C&F DESIGN
Sサイズ MSF with スタンダードサイズ スレッダーズF.C.

ボックス内には立ち上がるスレッダーを設置
※製品はスレッダー6本を装備

スレッダーごとフライボックスの中に収納してしまおうという、ユニークなフライボックス。使い方は、内部のスレッダーにあらかじめいくつかのフライを通しておき、結ぶ時にスレッダーを外してティペットを通し、フライを抜き取るだけ。もはや釣り場でフックアイを見る必要すらない。ただし、スレッダーに通すフライは上(先端側)から順に使っていくことになるため、同じフライを多用するような場合におすすめ。もちろんスレッダーは複数本配置できるので、使用頻度の高いフライを選んでセットしておくと、フィールドのフライチェンジはかなり手早く行なえる。ボックスはほかにM、Lサイズ、さらに各フォームタイプがラインナップされている。
価格:3,800円+税(Sサイズ)
●シーアンドエフデザイン

あらかじめ使用頻度の高いフライをセットしておけば、釣り場でのフライチェンジに手間取らない
※写真はサンプル製品の使用イメージ

“ティペットが通らない”をサポートする

<問合せ先一覧>
●サンスイ池袋店
☎03・3980・7270 sansui1902.jp/
●シーアンドエフデザイン
☎045・949・2301 www.c-and-f.co.jp/
●ティムコ
☎03・5600・0120 www.tiemco.co.jp/
●リアルサイトプロジェクト
☎042・301・0872 www.real-sight.jp/

視力が落ちても、釣りはできる。

とあるフライフィッシャーと老眼の戦い。ミリメートル戦記

しっかり留まっていたはずのハックルが、フッと緩んでしまった。
フィニッシュしたはずなのに、スレッドを切ったらバラバラっと……。
タイイングをしていて、そんな経験はないだろうか？
ボヤけているのに見えていると思い込んで、
フライタイイングするほどストレスが溜まる老眼初期。
僕が体験してきた小さな世界との戦いの記録をまとめてみた。

中根 淳一＝文・写真
Text & Photography by Junichi Nakane

タイイングには検眼して作った自分専用眼鏡を使い、汎用として安価な物をあちこちに用意している。また、釣り用は小さなフライを結ぶ時にしか使わないため、落としても悔やまないよう、安い製品をベストやバッグに入れて対応

老眼鏡と拡大鏡は別物

老眼鏡を必要としてない人は勘違いしがちなのだが、老眼鏡を掛けても対象物が大きく見えるわけではない。

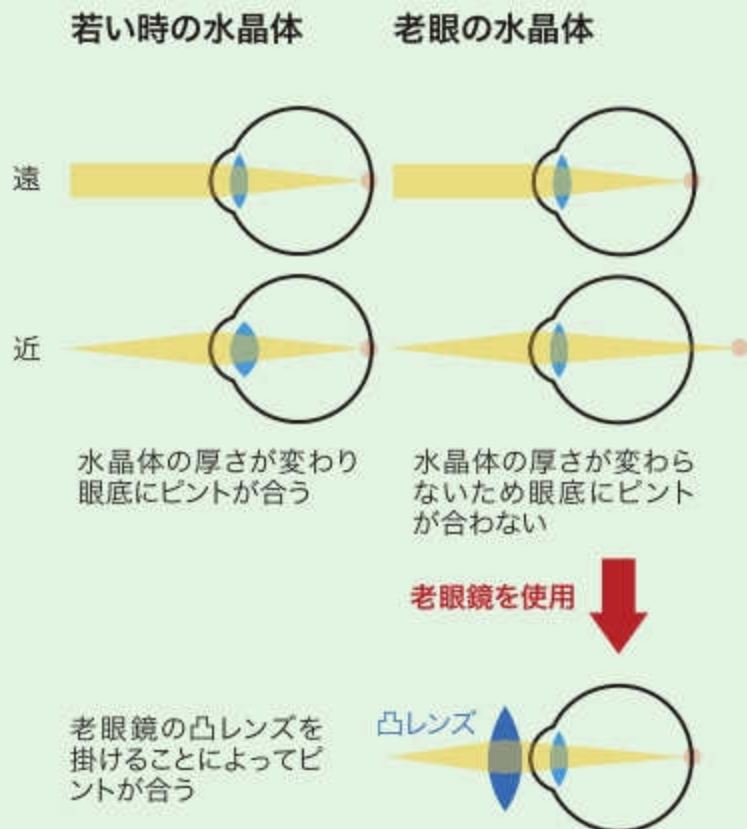
目の焦点は水晶体の厚さを変えることによって合わせるのだが、老化によって水晶体が硬くなり、ピントが合わせにくくなるという現象が老眼。簡単にいうと遠くに焦点が合っている水晶体の厚さが、近くでもそのままの状態ということ。凸レンズの老眼鏡にはこれを補う働きがある。

よっていくら度数を高くしても大きく見えるわけではなく、より近くでも焦点が合わせやすくなるだけだ（もちろん対象物が近くなるのだから必然的に大きくは見えるが）。

一方、拡大鏡（ルーペ）は同じ距離のまま対象物を大きく見せる働きがあるので、小さい対象物を大きく拡大できる。こちらは倍率表示で、倍率が高くなれば大きく見えるようになる。

老眼鏡は「本来の見え方を補う」、拡大鏡は「小さい物を大きく見せる」ものと覚えておくのがよいだろう。

どちらにも利点があるので使い分けると、手もとの作業がはかどるはずだ。

若い時の水晶体
老眼の水晶体
遠
近
水晶体の厚さが変わり眼底にピントが合う
水晶体の厚さが変わらないため眼底にピントが合わない
老眼鏡を使用
老眼鏡の凸レンズを掛けることによってピントが合う
凸レンズ

突然訪れた違和感

40歳を過ぎたある日、渓流用のドライフライを巻いていた時のこと。

「あれ？　なんだか見えにくい……」

フックサイズにして18番。それまでは苦もなく巻けていたサイズだったが、初めて違和感を覚えた。

この時はとりあえずの対処として、照度の高いデスクライトに変更するだけに留めた。これだけでもかなりよく見えるようになったので、ひとまずこの出来事は忘れていたのだが、さらに数年後には納得のいくフライが巻きにくくなった。

もちろん普通には巻けていたのだが、それでは満足できない。スレッドの1巻きにもこだわりたい僕としてはストレスが溜まっていく。それでも海用のフライは大きいので、まだ不自由はない。

次なる一手として、拡大鏡の付いたデスクライトを購入。小さなフライを巻く時だけは、要所の確認に拡大鏡を使うようになった。

40代も半ばを過ぎると「見えにくい現象」は加速した。ここでやっと「これが老眼なんだ」と自覚し始めたが「拡大鏡でどうにかなるでしょう」としばし放置。

老眼鏡と呼ばないで

老眼を感じ始めた人も、どうやら老眼鏡には抵抗があるようだ。字面からすると「老いた目専用眼鏡」である。響きが悪い……。なかには「僕のはリーディンググラスです」と言う友人もいる。「老眼鏡でしょ？」と聞いても頑に否定するのである。

僕の場合は子どものころから目がよくて、メガネに憧れているところもあり、普通のメガネにはまったく抵抗感はない。むしろ「ちょっと賢く見える？」くらいに思っている（そこが賢くないのだが）。

単純に面倒だったので、老眼が進んだにもかかわらず放置していた僕も「そろそろ老眼鏡が必要かな？」と思うようになった。

老眼になると薄暗い環境では特に見えにくい。
老眼初期であれば、まずは環境光も含めてバイス周りを明るくするだけでも、かなりよく見えるようになるはずだ

使い始めて分かったのだが、デスク上など少し遠くを見る時には眼鏡の上部から覗き込むため、立て幅が薄い形状のフレームのほうが使いやすい。ただし老眼のイメージは強くなる

実は老眼を放置するのはよくないらしい。見えないのに我慢し続けていると、眼精疲労が重なって、頭痛や肩こりの原因にもなり、症状が悪化すると食欲までなくなってしまうとのこと。

目を酷使するコンピュータを使った、グラフィックデザインを仕事にする僕も、目の疲れからくる頭痛には覚えがある。そんなわけで、ついに老眼鏡を選んでみることにした。

さて、どうしよう……。現在は100円でも買える老眼鏡だが、なにしろタイイングなどで長時間使用することになる。そう考えると、安価なものを使ってさらに目が悪くなるのでは?と不安だった。なにしろ1日10時間以上フライを巻くこともあるので……。

そこで奮発して、自分に合ったものを作ろうと、フレームからあつらえることにした。

長時間常用するなら自分専用

念願?の初メガネなので見た目も重視して、フレームはスミスオプティクス社製品No.5をチョイスした。モデルによってはフレームのみの販売もあるが、僕は気に入ったサングラスのレンズを変えることにした。

次にレンズを入れてくれるメガネ店捜しだが、これが少し難儀した。多くの店はレンズ&フレームのセット販売がほとんどで、断られる可能性が高い。これは商売上の都合もあるのかもしれないが、おそらく預かったフレームの破損を危惧してのことだろう。

数店目にやっと引き受けてくれる店が見つかったが、もちろんここでもフレーム破損時の注意を受けた。

検眼の前に、老眼鏡を常用する時の、目と対象物の距離を聞かれる。タイイング時のことを思い出しながら「このくらい」と身振りで伝える。この距離が度数を決めるうえで重要になる。

その後検眼すると、右1・50、左1・75と差があることが分かった。この時の記録は店に保管されている。

数日後、仕上がった老眼鏡をかけて、さっそくタイイングをしてみると、すこぶる快適。出費はかさんだが、度数変更ほか各種保証もあるし、何より正しい度数のレンズは長時間の使用でも安心だ。

快適さを実感したことで、ついでに安価な物も数個購入。部屋別やフィッシングベスト&バッグごとに分けておくと、ちょっとした時に便利。これらの度数はさまざまだが、短時間の使用であれば問題ないだろう。

まだ老眼鏡を使用することに二の足を踏んでいる「貴方」。この快適さを一度味わったら、もう裸眼でタイイングはできなくなりますよ!

少しでも明るい偏光レンズは?

TALEX
EASE GREEN
曇天や雨天時、早朝やイブニングなどのローライト時に適したカラー。そういった状況でも暗く感じることなく、水面のギラつきをカットする。
可視光線透過率　40%
雑光カット率　90%

POLAR X
X-LIGHT GREEN 40
40%の可視光線透過率を持ちながら、偏光度99%を達成。曇りがちな日中から薄暗くなるマヅメ時まで、ローライトな条件で威力を発揮する。
可視光線透過率　40%
偏光度　99%

POLAR X
X-LIGHT BROWN 40
ブラウンのレンズは可視光線透過率を高めると偏光度を上げるのが難しいというが、このカラーは99%の偏光度を誇る。コントラストが高く、オレンジや赤などのインジケーターも見やすい。
可視光線透過率　40%
偏光度　99%

老眼鏡の必要性を切実に感じるのは、やはりイブニングなど暗い状況。だが日本の渓流は谷が深く、日中でもツライ時がある。

フライ交換の時に偏光グラスを外せばよいのだが、いちいちそんなことをするのも面倒だ。少しでも明るい偏光レンズを選べば、多少はフライ交換もラクになる。

ここで紹介するタレックスと、スミスオプティクス(POLAR X)のレンズは、可視光線透過率40%。真っ昼間の海や湖、本流ではまぶしく感じるケースがあるかもしれないが、渓流なら老眼ではなくても普段から使える。わずらわしさの解消という意味では、最初からこのような明るいレンズを使うのも手だ。

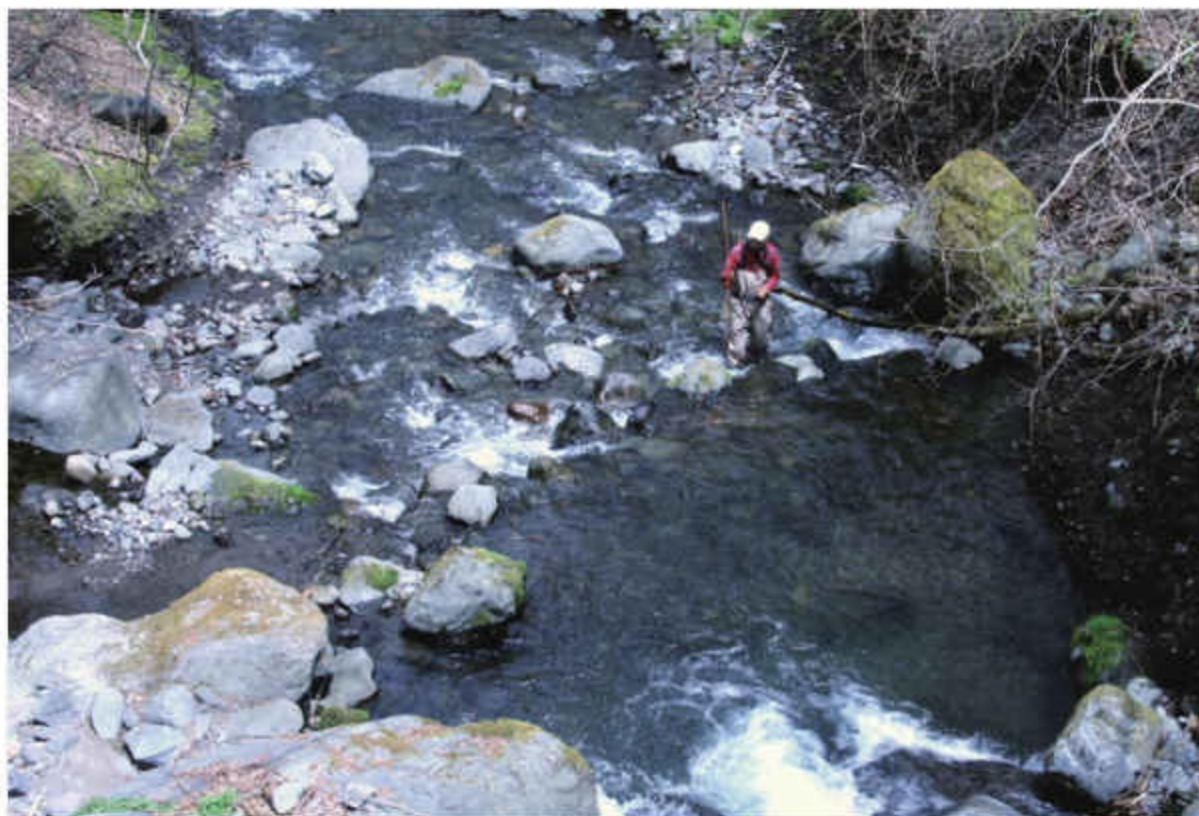
Edit by FlyFisher

老眼世代かく戦えり <その1> 群馬県／神流川(かんな)、長野県／千曲川(ちくま)水系

その辞書に、イブニングの文字はなし

里見 栄正＝文・写真
Text & Photography by Yoshimasa Satomi

〈Profile〉
さとみ・よしまさ
1955年生まれ。群馬県太田市在住。シーズン中は北関東から信州、そして東北地方を釣り巡る日々。各地でスクールの講師としても忙しいが、その合間にプライベートでも積極的に渓に足を運ぶ。シマノ社のフライロッドの監修も務める。

**5月連休、同世代の友人と巡る千曲川水系。
こんな時期は移ろう季節とともに変わる状況を、のんびりと釣り遊ぶのが面白い。
仲間たちもフライを結ぶ時には目を細め、陽が傾いてきたら川から上がる。
以前よりも、皆のペースが少し緩やかになったのかもしれない。**

中ノ沢特設区は一定区間を占有できるので、他の釣り人を気にすることなく釣りに集中できるのが大きな魅力

5月は上州から信州へ

　すっかり恒例となった毎年のゴールデンウイーク釣行は、交通事情を最優先するようになったせいか遠征を避け、ここ数年はどちらかといえば近場中心という形が定着した感がある。いずれにしても豪雪地帯は時期尚早ではあるし、春先に実績のある関東圏の流れはではやや遅いケースもあるので、たいていは千曲川水系の支流筋を回るというものだ。

　千曲川流域はおおむねそれなりの標高はあるのだが、たとえば1本の支流をピックアップしてみても、下流域は里川の様相を呈していて、サクラも終わり、状況はすっかり盛期のそれだ。しかし上流へ遡ればいまだサクラは満開で、周囲の樹々もやっと芽吹きが始まったばかり。それにシンクロするように渓魚の動きもまた違ったものとなるのだが、こういった変化を短時間の移動で感じながらの釣りができることが、釣果はまちまちでも釣り場選択に同行者たちの異論の出ない理由でもあるようだ。

　スタートは県境をまたげば千曲川水系にも近い、群馬県上野村の神流川。今年は初日に神流川の中ノ沢毛ばり専用区をスケジュールに入れてみることにした。どこの流れも混雑が予想されるだけに、少なくとも予約制をとっている釣り場なら、他の釣り人に煩わされることもないだろうというのが一番の理由ではあった。なんといっても5人の大所帯であるから、まずは万遍なく釣果を得て盛り上がった気分でのスタートが肝要との配慮……といえば大袈裟かもしれないが、ここ、大事です。

老眼は来たけれど……

　今年はいくらか遅れていると思われるサクラだったが、さすがに上野村の源流部といえどもすでに終わりかけ、ハッチはストーンフライからメイフライやカディスに移っていて、午前の入渓時から川面が騒がしい。ただ水温が低いせいか、放流された魚だけなく居付きのヤマメでさえ流心からフライを追うものが非常に少なく、フライがゆっくりと流れるレーンや巻きの緩流帯からの鈍い返事に終始した。

　しかし、そこはさすがにキャッチ&リリースの釣り場だけのことはあって、釣果に関して不満の声は聞こえない。ただ、流れを覆う枝葉が作り出す影とそこを通り抜ける光のコントラストのせいか、とにかく水面のフライが見えにくい。さらにアイにティペットを通す際にもこういった環境は意外に難儀を極めるものだ。もちろん暗いというのが最もいやな条件ではあるのだが、目を向ける方向によっては光量のギャップが極端なのも老眼の身にはよろしくない。

新たにかなりの新規放流があったはずだが、イワナ、ヤマメともに美しい中ノ沢育ちがほとんどだった

himasa Satomi

今回の５人のうち１人を除けば50代と60代であり、老眼はほぼ同じような進行度合いなので、フライを結ぶ、ティペットをつなぐといった一連の動作が皆同じになるということを、改めて気づいて笑ってしまった。若かりし日々を想うわけではないのに、遠いところを見つめているようで……。

これって老眼？　と初めて感じたのは40代中ごろだったと思う。どちらかと言えば、釣りをしている時よりもタイイング時に如実にそれを感じたのだった。きちんと巻けていると思ってよくよく見てみれば、リブの間隔が均等でなかったり、ハックルが暴れていたりで、「ああ、来るべきものが来たな」という程度の認識はあったが、これに関しては躊躇なく老眼鏡のお世話になることで解決した。

ところが釣りの現場となると、その都度老眼鏡というのも面倒（使ってみれば快適なのかもしれないが）で、いまだに手を出してはいないのだ。もちろん悪戦苦闘することがあるにはあっても、長年の慣れというか勘というか、一発で小さなアイにティペットが通ってしまうことも珍しくないので、これまで特に対策を施すことなく今日に至っている。

また、今回のメンバーとは別に田舎の同級生とも毎年ツアーと称して５～６人でのＦＦ旅を恒例としているのだが、ほとんどが僕以上に老眼が進んでいたりする。帽子に取り付けるタイプのルーペや跳ね上げ式のレンズをポラロイドグラスにセットする仲間も多く、重宝しているからと薦められたこともあったが、どうも自分のスタイルに合っていないようで……。もっとも老眼の不便さもさることながら、それ以上に視力そのものも年齢とともに低下しているのもたしかで、フライが見えにくいということのほうが、釣りをするうえでのハンディになっていると感じことが増えている。これも適切なメガネ使用で解決するのだろうが、サイズアップや視認性優先のフライパターンで誤魔化して、なんとかしのいでいる。

受け入れて、のんびりと

２日目以降は千曲川水系に場所を移動し、上小漁協管内の鹿曲川や依田川支流といった、ここ数年ほぼお決まりとなっている流れで遊んだ。枯れアシに覆われた下流部は日中のハッチがほとんど見られず、この時はちょうどハッチの狭間にあるという感じだ。それでもヤマメ中心に水面に対する反応はよく、先行者の影響はあったもののの全員が型を見ることができてひとまず安心。いったん流れから上がり、年に一度ながら決まったお店で昼食をとる。注文するメニューも毎年同じだが、これも楽しみのひとつである。

午後は源流に近い区間に移動する。こちらはさまざまな水生昆虫のハッチが見られ期待は高まるが、イワナはまったくといっていいほど流れに出ていないようだった。こんな時は極力「流さない」という釣りでしか反応は見られない。イワナが身を潜めていると思われるポイントに近い、静かで安定した水面に長時間フライを漂わせておくしかない。

1:腕がどんどん伸びて、それも限界になると偏光グラスを外すことになる
2:とにかく視認性を優先。アイの目詰まりもイライラの原因。それもあってヘッドセメントは使わなくなった
3:移動の途中には毎年決まって昼食をとるお気に入りの場所もある
4:こんなパンパンの美形イワナなら1尾で充分満足
5:皆同じポーズになってしまう。それを待つ時間も長くなるぶん、前進ははかどらない

老眼世代かく戦えり ＜その1＞ 群馬県／神流川、長野県／千曲川水系

その辞書に、イブニングの文字はなし

いわゆる盛期の好ポイントをいくらナチュラルにフライを流そうとも、そんな水面を流れるエサには興味を示さないのだから仕方がない。ある程度季節が進んでもこんな釣りを強いられる流れは少なくないのだが、食おうか食うまいかと躊躇しているイワナとの根比べにも似たこんな状況での釣りが、僕は好きだ。

それでもさらにハッチが増える夕方近くになると、緩い流れの瀬尻や流れがぶつかり合うY字帯で流下スピードが急激に落ちるようなメリハリの利いた流れからも反応が出始めた。しかし渓全体が夕闇を先取りするように薄暗く感じられる時間帯になると、フライは見えても、とかく張り出した枝や流れに沈んだ障害物にフライをとられたら最後、結び直すといった気力が維持できるとは思えない。それだけに、早々の切り上げが賢明と考えたのだろう、全員が約束の退渓時間を待たずの集合である。少なくとも今回のメンバーの辞書にイブニングライズという文字はないようである。

それにしても今年のゴールデンウイークはこの水系の人気は高く、ジャンルを問わず釣り人の数が半端ではなかった。車がないのを確認しての入渓も、裏切られるのが当たり前のような状態だ。無理もない。僕たちだって車に分乗して転々と距離をおいて入渓するという感じなのだから、やっていることは他の釣り人も同じようなものだろう。

こんな日は先行者に怯え、疑心暗鬼の心理状態に拍車が掛かり、釣りそのものも悪いサイクルにハマりやすいのかもしれない。勢い誰も入渓しそうもない細流に足を延ばしたりするのだが、キャスティングスペースは限られ当然トラブルも多くなる。フライの消耗は致し方ないとしても、フライやティペットを結び直してのリスタートまでがとにかく長いのだ。内心イライラしているはずだが、それでも悪態をつくわけでもなく、空を見上げる遠い目。枯れてきたとは思いたくないが、そんな時間を甘んじて受け入れられるところが老眼世代のフライフィッシングだといえるのかもしれない。

障害物の多さに比例してトラブルも増えるのだが、先行者を逃れての移動を続けるうちに、気がつけばいつの間にか最源流

まだまだ上流部の活性は低く、浅くて尚かつスローな流速を持つ水面以外はほとんどイワナからの反応がない

枯れアシの密生する下流部は、すでにイブニングタイムがベストという感じだったが、老眼組ともなると「それはなしネ」で衆議一決

神流川（上流部）
遊漁期間：3月1日～9月20日
遊漁料：日券2,000円、年券1万500円
（本谷/中ノ沢毛ばり専用区：1人3,500円※事前予約制）
●上野村漁協（上野村ふれあい館内）
☎0274・59・3155

千曲川（中流部）
遊漁期間：2月16日～9月30日
遊漁料：日券1,300円、年券6,400円
●上小漁協
☎0268・22・0813

モノフィラで作るビッグアイ

**アイが見えなければ、通しやすい形に自分で工夫する。
タイイング時の一手間で、釣り場での快適度は大きく変わってくる。
柔軟な考え方で“ティペットが通らない”を乗り切るためのアイデアをレポート。**

タイイング時にモノフィラで自作するループアイ。ヘッドと合わせて蛍光カラーにすると、イブニングでも明確に見やすい

<ループアイ・マーチブラウン>
- ●フック……パリバス2400V #8
- ●スレッド……ヴィーバスG.S.P.スレッド50Dホワイト
- ●テイル……ゴールデンフェザントクレスト・ダイドオレンジ
- ●ボディー……アンダーファー（モモンガ）
- ●ウイング……ピーコッククイル、グースクイル
- ●スロート……パートリッジ

<ループアイ・ビートル>
- ●フック……がまかつB10S #8
- ●スレッド……ヴィーバスG.S.P.スレッド50Dホワイト
- ●ボディー……クイルファイバー各種
- ●ウイング……CDC、ピーコックソード
- ●ハックル……コック・デ・レオン、インドコック・ブラックなど

国見 浩文=解説
Comments by Hirohumi Kunimi
Edit by FlyFisher

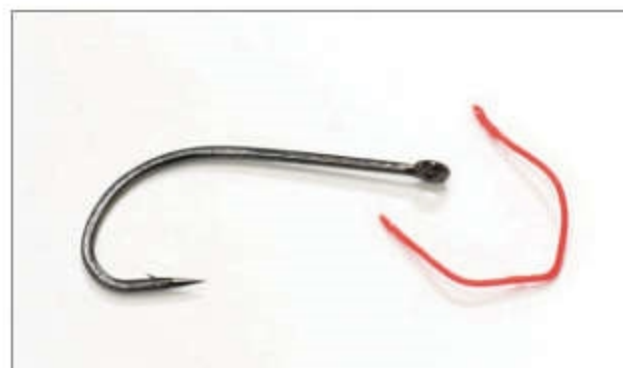
〈Profile〉
くにみ・ひろふみ
1963年生まれ。埼玉県鶴ヶ島市在住。自身の工夫を凝らしたドライフライやニンフ、ウエットフライを使い、渓流釣りだけでなく、海や湖沼のフライフィッシングも幅広く楽しむオールラウンドなフライフィッシャー。フライ歴は35年。

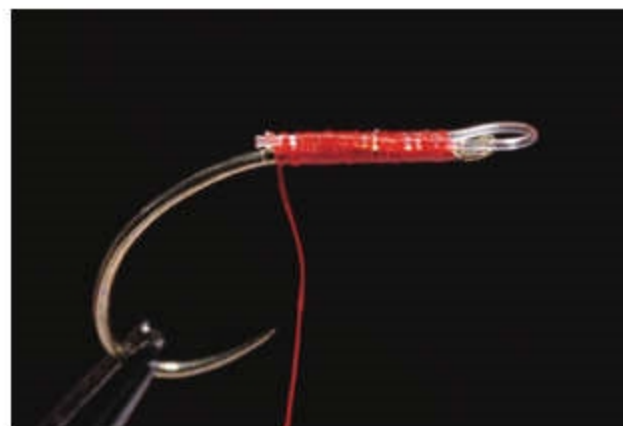
見えなければ、自らサイズアップ

フライのアイにティペットを通しやすくしてくれるアイテムについては、24ページの記事でも紹介してきたが、逆の発想として、フックアイを大きくしてしまうという選択肢もある。そうすれば、アイの穴をしっかりと捉えたうえでイトを結べる。そんな方法を採用しているのが国見浩文さん。具体的にどうしているかというと、ナイロンのモノフィラメント・ラインで適度な大きさのアイを自作するというもの。煩雑な作業に思われるかもしれないが、実際にはタイイングの行程がひとつ増えるだけなので、それほど手間もかからない。そして、老眼が辛くなるのはたいていがイブニングの時間帯。そんな時にアイのカラーを変えてみるのも有効だという。

ループアイ・フライを作る（国見 浩文）

光量も乏しくなる夕暮れ時、それまでの内容に満足できるものであれば帰路に就くところだが、大抵そうはいかない。季節が進むにつれ水生昆虫や渓魚たちも山に日が沈むころにその活動がピーク

<ループアイ・カディス>
●フック……TMC113BLH #10
●スレッド……16/0ホワイト
●ボディー……ダビング材各種
●ウイング……CDC、レモンウッドダック
●ハックル……コック・デ・レオン

蛍光カラーのナイロン・モノフィラメントを使用したことで、イブニング時もよりループアイがくっきりと見えるようになったという。フライフックの場合はアイ部分をカットして使う。どんなパターンにも応用できるが、まずはイブニングのパターンで試してほしい

<ループアイ・ヒゲナガ>
●フック……がまかつB10S 各サイズ
●スレッド……ヴィーバスG.S.Pスレッド50Dホワイト
●ボディ……各種獣毛アンダーファー
●ウイング……CDC、レモンウッドダック
●ハックル……コック・デ・レオン

こちらは以前、ヘラや渓流釣り用の管のないハリを用いて作っていたループアイ。モノフィラは写真のように下巻き後にスレッドで固定する

になる。そんな状況下では、アイにティペットを通す時間も惜しい。

私自身、同年代の仲間に比べ視力は恵まれているほうだと思うが、薄暗いなかで小さな穴にイトを通すのは皆一緒でやりづらいものだ。そこで考えたのが蛍光オレンジのヘッド&ループアイ。ループの自作アイは以前より、アユやヘラ用のバーブレス・フックを使用する際に用いていた。管付きではないので、ナイロンモノフィラやPEラインでアイを自作していた。副産物として、ファイトやアワセ時のショックを和らげたりする効果も目論んでいるが、径を小さく作ったつもりでも意外にアイに通しやすいことに気づいた。

それは、老眼対策にもちょうどよく、パラシュートポストやビーズでも使われている目立つ色味に統一してみた。フライデザインを破たんさせることのないよう、ヘッド周りはほどよいサイズでまとめたが、視認性のよい色にしただけで格段とティペットを通しやすくなった。

今回紹介しているのは、どれもイブニングの時間帯に使うパターンたち。そうしたフライはドライとしてだけでなく、ダイビングさせたりウエットとしても使えたりするように、汎用性を持たせている。

ループアイを用いる場合は、フライフックのアイをカットし、好みの大きさにしたループを下巻き後のスレッドで固定するだけ。フライサイズが小さくなれば、ループ径を小さくし、モノフィラも細いものが必要になるが、まずは魚がおおらかになる一方で見にくさが増すイブニング時のフライで試してほしい。

ティペットを通しやすくするフックデザインも

がまかつ社のフライフックには、いくつかのモデルにアイにティペットを通しやすく工夫が盛り込まれている。

そのひとつが『C14-BV』のように、横向きに配置されたアイ。特にパラシュートやエルクヘア・カディスのようなフライパターンでは、ウイングやハックルがアイを邪魔し、ティペットが通しにくくなってしまいがち。横向きであれば、そんなケースはある程度解消されそうだ。そしてマテリアルに隠されないアイは、より見えやすいはず。ただし『C14-BV』のフック形状はボディーを水中に沈めるようなパターンに最適なフック形状にデザインされている。

一方『C12-3HBV』のように、アイのサイズ自体を大きくしたフックもラインナップされている。こちらは太軸仕様で管理釣り場での使用をメインにデザインされており、ティペットの通しやすさはもちろん、リリースに時にはアイをつまんで魚を外せるという面もある。ほかにも、#26〜30というミッジ用フック『C12-BM Large Eye』も、通常の同サイズのフックよりもややアイを大きくデザインしている。

使いたいフライにこれらのフック形状が合致すれば、こうした選択でストレスフリーを目指してみるという手もある。

『C14-BV』
サイズ：#12〜20（20本入り）
価格：500円+税

『C12−3HBV』
サイズ：#11〜16（#11は10本入り、#12、14は13本入り、#16は14本入り）
価格：500円+税

『C12-BM Large Eye』
サイズ：#26〜30（20本入り）
価格：500円+税

-○-○- 視力が落ちても、釣りはできる。

老眼世代かく戦えり <その2> 静岡県/狩野(かの)川支流

僕らを救うモンカゲとヒゲナガ

遠藤 岳雄=文・写真
Text & Photography by Takao Endo

《Profile》
えんどう・たかお

1969年生まれ。静岡県裾野市在住。ライズをねらったマッチング・ザ・ハッチの釣りを得意としており、狩野川をホームに毎年尺ヤマメ、アマゴねらいの釣行を続ける。老眼は最近実感し始めた。本誌で「尺まで届け!」を連載中。

4Xのティペットに直結する#8のドライフライ。
手もとの細かい作業にストレスを感じるようになってきたが、
そんな症状も気にせずに満喫できるのが、ビッグ・ドライフライの釣り。
大きな水生昆虫が出る季節になると、イブニングこそが老眼世代にはおすすめ?

Takao Endo

4X・12フィートのリーダーと、今回用意したフライたち。もちろん直結で、老眼なんて気にせず、バシバシ釣り上がっていくのだ

着実に進行中

まだまだ気持ちは若いつもりでいても、40代も後半に差し掛かってくると、確実に老化の足音がひたひたと迫ってくるのを実感するようになる。「なにを……まだまだ若いクセに……」と、この世界の大先輩方には怒られそうだが、どうにもこうにも若いころとは勝手が違ってきていることは事実。そろそろ「自分はまだ若い」という手前味噌な心のベールを脱ぐ時期に来ているのかもしれない……と、最近つくづく感じるようになった。

そう思わざるを得ない理由のひとつが、やはり「老眼」である。老眼とは、言うまでもなく近くのものが見えにくくなるといった症状で、細かい文字などが以前に比べて読みづらくなったり、手先を使うような細かい作業がしにくくなったり、あるいは暗くなってくると本が読みづらくなる……などのケースがある。かく言うワタシも数年前から、老眼に悩まされ続けている輩のひとりなのである。

こんなことをグダグダと書き綴っていると、若いフライフィッシャー諸氏は、なーんだこのコラム……と思うかもしれない。しかし、そう思った君は甘い。いつかきっと、君たちにもこういった時期が来るのだから（来ない人もいるようだが）、ぜひとも後学のためにも読み進めていただくことを、おすすめするのである。フライフィッシングにおいて、この「老眼」はなかなか侮れ

狩野川支流のイブニング。太イト&ビッグフライの釣りでは、このくらいの光量までは、特にストレスを感じなかった

ない敵であるのだから。

ワタシの場合、最初はイブニングの時にフライが結びづらくなってきた。そして徐々に、明るい時間帯であっても小さなサイズのフライに細いティペットを結ぶことに難儀するようになってきた。そしていよいよ、晴天時以外の曇天の日や、山岳渓流の鬱蒼とした渓のなかでは、空を仰ぐようにしてフライを結ばなければならなくなってしまった。

要するに、光量が足りない場面ではそうでもしないと、アイにティペットを通すことが困難になってきたのだ。さらにその症状は屋外だけに留まらず、タイイングデスクの上でも困難を極めることとなり、ライティングの角度や背景板の色など、できうる限りにさまざまな工夫をこなし、フックと格闘しながらフライを巻くはめになっている。

ここで初めて、各メーカーから発売されているルーペの類や、アイにティペットを通すためのツールの必要性を実感する。それだけ需要があるのだということに改めて気づかされるのだが、面倒くさがりのワタシの場合、とりあえずは100円ショップの扉を叩いて、デスクの引き出しとベストのポケットに老眼鏡を忍ばせることと相成ったのである。

タイミングさえ合えば、ストレスフリーな展開に

私事で恐縮ながら、最近転居したついでに、車で7~8分の近所の川へ釣りに出掛けることが多くなった。いつもは引っ越しの整理などもあって、川へ行くのは決まって夕方の5時くらいから、というお手軽な釣りだった。しかしその時は、川辺に立っていつものシステムを準備していると、予想もしなかったモンカゲロウのスピナーフォールに遭遇した。

そして目の前のプールのヒラキで、ボコンッと大きな波紋がひとつ広がった。すぐさまベストからフライボックスを取り出し、モンカゲロウのスピナーに対応するパターンを捜したが、今シーズンは忙しさにかまけてフライを巻いていなかったこともあり、せいぜいコカゲロウに対応するサイズのフライしかない。仕方なく手持ちのなかで一番大きな#15のスペントを6Xのティペットに結び、ライズめがけて投じてみた。

次の瞬間、フライサイズに似つかわしくないほどの大きな波紋が広がり、そしてフライが消えた。ブンッと軽くロッドを立てた刹那、40cmほどの魚体が水面に躍り出て、そのままティペットをブッちぎって消えていった。

さらに下流側でもうひとつの波紋が広がるのが見えたので、再びフライを結び替え、ティペットも5Xに結び直してライズに対峙した。

今度も一発でフライが吸い込まれ、相手は激しいジャンプを繰り返す。激流の中へ疾走する魚をなんとか食い止めようと必死に踏ん張ってみたも

狩野川水系のレインボー。湧水河川ならではのコンディションのよい魚が多かった

老眼世代かく戦えり <その2> 静岡県/狩野川支流

僕らを救うモンカゲとヒゲナガ

のの、今度はフライの結び目から切られてしまった。この川にはアマゴもいるが、どうやらそれ以上にニジマスが多いようだ。しかし、それもまた楽しい。

なんたって自宅から数分の川でこんな釣りが成立するのだから……なんて考えていると、まだ光量がたっぷりとある時間にもかかわらず、今度はヒゲナガが下流からまとまって飛来してきた。そして、バブルラインのなかでスプラッシュライズ……！　サイズ感のマッチしないエルクヘア・カディスでなんとかキャッチしたのは、40㎝ほどのヒレピンのレインボーだった。

味をしめて翌日、再び同じポイントへ入ると、今回は準備万端に用意してきたシステムに変更した。

フライは昨夜巻いた、#10のモンカゲロウのスピナーと、#8のフックに巻いたヒゲナガパターン。そしてそれらを4Xのリーダーに直接結ぶ。今日は前日よりも少し早い時間に川に来ていたので、件のプールの上流にある瀬を釣り上ってみることにした。

4Xに#10のドライフライ。まるで北海道の川を釣っているかのような感覚で釣り上っていく。するといきなり大きな魚がフライをひったくるように出て、前日同様激しいジャンプを何度も見せ激しく抵抗した。しかし今日は4Xのリーダー直結。軍配はこちらに上がった。

まずは作戦どおりに1尾をキャッチし、その後も気分よく釣り上っていくと、同様の反応でグッドコンディションのレインボーが短い区間ながら5尾も出てくれた。そしてまた、夕刻のヒゲナガへのライズもスリリングで楽しい釣りになったのは言うまでもない。

もちろん、モンカゲロウやヒゲナガといったドラスティックな釣りが成立する季節であったことや、川の規模に似合わず魚が多くいることなどの要因はあるが、この時は久しぶりにストレスのない釣りができたことに気がついた。何よりも太いティペットで、かつ大きなフライを使用する釣りでは、「老眼」がまったく気にならなかったのだ。それはタイイングの時も同様で、#10や#8のフライを巻くのであれば、視力低下のストレスから解放されて、フライを巻くことができる。

逆転の発想ではないが、見えないのであれば見えるものを使う……そんな釣りも、まだまだ捜せばあるのではないか？　そうした意味では、大きなフライが使えるチャンスも多いイブニングの釣りも再び魅力的に感じてしまったりする。今シーズンの残りは、大きなフライを巻いて川へ出掛けてみよう。

こんな感じで#8フックに巻いたヒゲナガパターンにリーダーを直結

狩野川水系
遊漁期間：3月1日〜9月30日
（フライフィッシングは5月19日まで。山田川合流より下流の本流は7月31日まで。一部支流は9月30日まで）
遊漁料：日券1,150円、現場売り500円増、年券6,300円
●狩野川漁協
☎0558・72・5945

破損や紛失、携行するのを忘れた時のために、ベスト内と車中には常に予備を入れている

両岸には樹林が迫っているが、場所によっては河原もある。ロッドを振る空間は充分にあり、6〜7フィートのものが使いやすい

視力が落ちても、釣りはできる。

老眼世代かく戦えり <その3> 静岡県／狩野（かの）川水系上流部

いくつになっても歩きたい伊豆の秀渓

森村 義博＝文レポート
Reported by Yoshihiro Morimura

〈Profile〉
もりむら・よしひろ
1956年生まれ。静岡県三島市在住。地元狩野川水系の釣り場に詳しいが、シーズン中は九州から北海道まで全国を釣り歩く。

伊豆の狩野川は、本流は尺を超すアマゴもねらえ、春先からフライフィッシャーでにぎわう。一方で支流に入ると、「日本昔話」にでも出てきそうなのんびりとした雰囲気の里川から、落差のある渓流までさまざまな表情を見せる。地元に住む森村義博さんが、そんな狩野川水系を巡る。

Yoshihiro Morimura

気ままな単独釣行

自営業で個人事業主という仕事柄、急ぎの仕事が入れば、土日はもちろんゴールデンウイークや夏休みなど、長期の休みでも仕事を優先させなければならない。たとえば事前に友人たちと釣行の約束をしていても、急な仕事でキャンセルせざるを得ないこともある。いくら仕事上のこととはいえ、友人たちに迷惑を掛けるのは心苦しい。

そんな事情もあり、ここ7、8年は日帰り釣行、九州、東北、北海道釣行なども含め、ほぼ単独で出掛けることが多くなった。幸い車の運転はけっして嫌いじゃない。どちらかといえば好きなほうだ。片道６７００kmの長距離運転も苦にならない。

何よりひとりは気楽でいい。出発時刻も釣り場の変更も気の向くまま。疲れたら車中や木陰で昼寝をしたり、早めに釣りを切り上げて温泉に浸かり、周辺の美味しいものを食することもできる。何もかもが自由だ。還暦を過ぎて体力、川を歩くバランス感覚、視力の衰えは感じるものの、危険を伴う釣り場は避け、無理なスケジュールさえ組まなければ、自由気ままな楽しい釣りができるものだ。

伊豆半島の狩野川は僕のホームグラウンドだが、ここ数年不調が続いている。まったく釣れないわけではないが、今年も厳しい状況が続いていた。それでも、幅広アマゴに出会いたい一心で本流通いを続けてきたなか、ゴールデ

放流されていない上流部は、小型ながら美しいアマゴが釣れる

首から提げた老眼鏡をオーバーグラス様に使っている。片手でサッと装着でき、フライ交換に手間取ることもない

シウイーク直前に運よく尺上が釣れた。その1尾で気持ちに余裕ができたこともあり、ゴールデンウイークはいくつかの支流をやってみようと思った。

支流といっても下流域の里川の様相をした流れではなく、落差がありポイントのはっきりした上流域に入るつもりでいた。この時期の本流や支流の下流部は、目立つハッチが少なく日中のライズの釣りは期待できないが、支流の上流域なら、メイフライなど何らかのハッチが見られる。ゴールデンウイークの真っただ中、そうした釣り場に詳しい友人の案内で釣行することになった。

早めに就寝したのに……

彼は40代後半、僕とはひと回りも違う。体力と川を歩くバランス感覚の差は歴然だ。7時半に迎えに来てくれるということだったので、6時半に目覚ましをセットし、前夜はいつもより2時間も早い10時半には布団に入った。ひと回りという年齢差を感じさせない釣行に寝不足は禁物だ。しっかり睡眠をとれば、若い人たちと同等に川歩きができる。また、友人に「老いを感じ取られたくない」というプライドもあった。

しかし早めに寝たことが裏目に出て、5時前には目が覚めてしまった。まだ時間があるからと思って目を閉じても頭が冴えて眠れないまま迎えの来る時間になってしまった。

今日のプランは、狩野川支流の最上流域を巡り、夕方は本流に下り、一発大ものをねらおうというもの（本誌発売のころは本流は釣り不可）。

寝不足気味の身体を案じ、出発直前にこっそり栄養ドリンクを飲んだ。これで1日元気で川歩きができる（はずだ）と思った。

前述したように、シーズン中は単独釣行が多いから、最近は他人のペースというものがよく分らなくなっている。たとえば車を停めて釣り支度をするペース、急斜面の踏み跡をたどって流れに降りるペース、釣りをしながら遡行するペースなどなど……。今回は、当然のことながら案内役である友人のペースに合わせなければならない。本格的山岳渓流へ行くわけではないものの、いろいろな場面で遅れをとってはならない。それはプライドが許さない。

行きの車中で川を眺めると、落差のある階段状の流れのようすや堰堤の高巻きも必要だと知った。高巻きと聞いて少しプレッシャーを感じたが、栄養ドリンクを飲んできたから問題ないだろう。

視力は1・2

しかし体力的な問題はさておき、年齢を重ねていくなかで視力の衰えも感じる。つまり老眼だ。僕の場合50代半ばごろから急に進み、フライやティペットの交換時に老眼鏡なくしては結べなくなってしまった。

それでも救われているのは、この年になっても視力は1・2を保っていることだ。およそフライフィッシングで釣るキャスティングレンジであれば、フライにインジケーター的要素も兼ねたマテリアルを取り付けなくとも、フライの確認ができるのはありがたい。それに老眼といっても、晴れた日の日中であれば、フックサイズ12番程度ならメガネなしでも結ぶことができるから、老眼をそんなに深刻に捉えているわけではない。また、釣りの最中に、必要に応じてメガネを掛ける動作が日常化していくうち、老眼をさほど面倒だとは思わなくなった。要は慣れの問題である。

老眼がはじまったころは、帽子（キャップ）のつばに取り付け、必要時にフリップダウンさせるものを使っていた。しかし友人に撮ってもらった自身の写真を見て幻滅。今では１００均の老眼鏡を、ナイロンの組み糸を使ったメ

明るく開けた区間を遡行するのは楽しい。これからの季節は、陸生昆虫の流下がさらに増えていくだろう

好ポイントが連続する区間を釣り上がる。新緑がまぶしい

ガネチェーンやメガネホルダーとかいわれているものを使用して首から提げ、必要時に偏向グラスの上にそのまま掛けている。長年この方式を使ってきたが、今のところ偏光グラスに傷は見当たらない。壊れたり、なくした時のために、ベストにはもちろん車中にも予備のメガネを入れてある。

さて、その日の釣りである。林道からちょっとした急斜面を下りて流れに立ち、交互に釣り上がった。清冽な流れが気持ちよかった。クモの巣にメイフライのスピナーが掛かっていた。ブラックカディスが飛び、たまにハッチするダンにオドリバエの集団がまとわり付く光景や、釣り上がりの途中、ライズも目にした。

釣れたアマゴは小型だったが、放流されていない最上流域とあって、とてもきれいな魚体が印象に残った。水生昆虫の生息数は多く、流れは樹林帯に囲まれているから、多くの陸生昆虫が流下することは容易に想像できる。この先は、日を追うごとにサイズアップしていき、秋には良型が釣れるとのことだった。

液晶よりファインダー

この日は、伊豆の渓の素晴らしさを再確認した。それと同時に、久し振りの支流釣行と美渓に写真もたくさん撮った。そういえば、老眼になってから持ち出すカメラは、それまで多用していたコンパクトデジカメから、ファインダー付きのミラーレス一眼にとって代わった。メガネを掛けて液晶モニターで確認しながら撮影するより、裸眼でファインダーをのぞいて撮るほうが好きだし、手ブレ防止にもなると思っている。低価格帯カメラの電子ビューファインダーだから、一眼レフのようなクリアーな見え方にはほど遠いが、視度調整もできるので僕のような素人には充分だ。

本流のイブニングライズは不発に終わった。

この日は、一日中よく歩いた。友人は余裕（たぶん）。僕はいっぱいいっぱいだった。正直にいうと、僕の釣りは明らかにスムーズさに欠けていた。釣り上がる途中、1度だけだが大きくバランスを崩した。フライを周囲の木々に引っ掛けては時間をロスしたり、ポイントを潰したりもして、ひと回りの違いを痛感した。

この先の体力は、努力しだいで現状維持、あるいは下降線も緩やかなカーブを保つことは可能だろう。その一方で目の衰えだけはどうにもならないが、釣欲が勝っている限り、そんなことは気にもならないだろう。僕はフライフィッシングを一生続けていくつもりだ。いや、「釣りは鮒にはじまり鮒に終わる」というから、もしかしたら晩年はそんな釣りをしているかもしれない。

老眼世代かく戦えり <その3> 静岡県／狩野川水系上流部

いくつになっても歩きたい伊豆の秀渓

狩野川（支流）
遊漁期間：3月1日～9月30日（フライフィッシングは5月19日まで。山田川合流より下流の本流は7月31日まで。一部支流は9月30日まで）
遊漁料：日券1,150円、現場売り500円増、年券6,300円
●狩野川漁協
☎0558・72・5945

水量豊富な本流には、素晴らしい姿態のアマゴが生息している

“見える”フライを作る。

Edit by FlyFisher

近くが見づらい老眼ではなくとも、視力が衰えてくれば、流れるフライも目で追いにくい。イブニングの時間帯などであれば、それはなおさら。しかしフライのスタイルを大きく変えず、なおかつ魚にも警戒心を抱かせない範囲で、見やすいフライを作る方法は意外と多い。

ここでは、そんな〝見やすいドライフライ〟の作例をピックアップ。ここで紹介している方法としては、基本的に目立つマテリアルを取り付けるというものだが、そのアプローチはさまざま。インジケーターに渓流ミャク釣り用の目印を使うほか、ウイングのカラーを素材はそのままに明るい色に変えるという手もある。さらにフライをぽっかりと浮かすために、マシュマロ状にしたファイバーをウイングに使うという方法も、フライを見やすくするひとつの工夫。

もちろんその応用は無限大。タイイングにおいてもオリジナルに比べてそれほど複雑な工程はないので、いざという時のために、ボックスに忍ばせておいてみては？

〈Profile〉

飯塚 亨 Tooru Iizuka
栃木県栃木市在住。那珂川、鬼怒川水系をホームに上流域のイワナ、ヤマメをねらう。視認性アップにはエサ釣りの目印も多用。

板谷 和彦 Kazuhiko Itaya
石川県金沢市在住。北陸や岐阜の渓に詳しく、マッチング・ザ・ハッチの里川から山岳渓流まで幅広く楽しむ。本流の大きなドライフライを使った釣りも得意。

遠藤 早都治 Satoshi Endo
東京都世田谷区在住。「フライフィッシングショップなごみ」を経営。川、海、湖とさまざまなフィールドに通うが、繊細なマッチング・ザ・ハッチの釣りも得意。

佐藤 渉 Wataru Sato
青森県黒石市在住。北東北の渓をメインに、ニンフからドライまでを効果的に活用しながら大ものをねらう。

里見 栄正 Yoshimasa Satomi
群馬県太田市在住。29ページでも釣行記を掲載。ドライフライでは、浮力と見やすさを重視することが多くなったとか。

嶋崎 了 Ryo Shimazaki
東京都江戸川区在住。ティムコ社に勤務し、ドライフライの釣りに関わるタックル全般の開発に携わる。日々フライパターンは研究中。

ミャク釣り用の目印を活用

エサ釣りの仕掛けに使う目印は、不透過性の蛍光カラーを採用しているものが多く、毛糸状にスプールに巻かれているので、マテリアルとしても扱いやすい。ナチュラルカラーのフライの視認性を、少しでも高めたい時におすすめの方法。

<コンドルクイル・パラシュート>

Tied by Tooru Iizuka

●フック……TMC531　#12〜16　●スレッド……各サイズ・ブラック
●ポスト……アルファ目印　●アブドメン……コンドルクイル
●ハックル……コックネック・各色　●ソラックス……ピーコック

通常のコンドルクイルを用いたパラシュートのポストを渓流用目印にチェンジ。折り返してループ状にした目印をポストとして取り付けており、多少薄暗いなかでも、くっきりと浮き出るように見えるのが特徴。

<ヘンハックルダン・スペント>

Tied by Kazuhiko Itaya

●フック……バリバス2200 #18　●スレッド……8/0クリーム
●ハックル……ヘンハックル　●ボディー……ダビング材・クリームなど
●インジケーター……アルファ目印

解禁直後の蒲田川などで使用。バブルラインのライズにも対応できるように、アルファ目印で視認性を確保している。タイイング時は多めに取り付けて、現場でカットするなどして量を調整する。

“マシュマロ”でぽっかりと

テレストリアルのボディーやカディスのウイングなどに活用できる、シンセティック素材を折り返して中空にしたパーツは、視認性に加えて、浮力も高い。ほとんどの場合カラーはホワイトやタンカラーがメインだが、水面に高く浮き、ボリュームもあるので夕方の渓でも使いやすい。

<マシュマロスパイダー>

Tied by Tooru Iizuka

●フック……TMC212Y　#15〜17　●スレッド……各サイズ・ブラウン系
●ボディースーパーファインダブ・各色　●レッグ……ラバーレッグ
●ウイング……ムートン、アルファ目印でマシュマロ・ウイングを形成

こちらも渓流用の目印を用いているが、マシュマロボディーに組み込む形で使用。浮力アップに貢献しつつ、白泡の中でもよく見えるフライに。主にイワナねらいで使いたい1本。

<CDCマシュマロ>

Tied by Tooru Iizuka

●フック……TMC112Y #15〜17　●スレッド……各サイズ・タン
●ボディー……コンドルクイル　●レッグ……ラバーレッグ
●ハックル……コックネック・ブラウン　●ウイング……マシュマロ・ウイング（マシュマロファイバーなどで製作したマシュマロ）、CDC

イブニングの場面などで、視認性に加えて浮力、そして少しのリアルさが必要な場合におすすめのマシュマロ&CDCウイングパターン。

染色系ナチュラル素材もあり

ホワイトやイエローに染色したヘアマテリアルは、透過性がないため、水面に浮かべて見れば、想像以上にくっきりと映える。カディスのウイングや、パラシュートポストにおすすめだが、繊細なパターンには目立つカラーのCDCを加えるという手もある。フライを目立たせるためのパーツを加えているわけではなく、使うマテリアルの色を変えるという意味では、もとのスタイルを変えずに実践できる方法でもある。

<エルクヘア・カディス>

Tied by Shouichi Onoda

●フック……TMC100SP BL #12〜14　●スレッド……8/0ブラック
●ハックル……コックネック・バジャー　●ボディー……ピーコックハール
●ウイング……エルクヘア・ブリーチドイエロー

白泡の中に放り込んでも目立つようにウイングにはイエローカラーを採用。テレストリアルとして使用しているパターンで、特にイワナねらいの場面では、ウイングカラーに警戒されたことはないという。ほかにオレンジ、ブラックカラーのウイングを使うことも。

<アダムズ・パラシュート>

Tied by Shouichi Onoda

●フック……TMC100SP-BL #10〜16　●スレッド……8/0グレー
●テイル……コックネック・ブラウン、グリズリー　●ポスト……カーフテイル・ホワイト
●ボディー……ニンフ系ダビング材・グレー
●ハックル……コックネック・ブラウン・グリズリー

ホワイトカラーのカーフテイルは水面でくっきりと見えやすい。エアロドライウィングなどのシンセティック素材に比べて若干質量があるのも特徴で、キャスト時にはフライを放り込むような感覚でターンしてくれる。

<CDCカディス>

Tied by Satoshi Endo

●フック……AXISCOフライフックAFB-1130 #16　●スレッド……12/0各色
●ボディー……ダビング材・チョコレートブラウン　●ハックル……コックネック・ブラック
●ウイング……CDC（マルク・プティジャン）
●インジケーター……CDCレッドフロー（マルク・プティジャン）

ウイングに使うCDCの配色を変えてインジケーターとすれば、マテリアルを新たに取り付けるよりも魚に警戒心を与えずに視認性を高められる。この方法は繊細なパターンに最適で、インジケーターをブラックカラーにすれば、逆光時にも活用できる。

<CDCカディス>

Tied by Wataru Sato

●フック……バリバス2200 CURVED SHANKなど各サイズ
●スレッド……8/0各色　●ボディー……ピーコックアイ・ブリーチなど
●ウイング……CDCナチュラル、上にイエローカラーを少量乗せる

こちらもイエローカラーのCDCをウイング状にトッピング。この部分は魚から見えないように、少量、幅を広げすぎないように取り付けている。ナチュラルカラーのフライパターンの視認性を高めたい時に。

インジケーター（ADW）の有効活用

パラシュートポストをはじめ、フライの浮力を高めつつ視認性を確保できるマテリアルとして定番の『エアロドライウィング』。そんな素材を柔軟に活用することで、さまざまなフライの見やすさを高めることができる。

<ビッグウイング>

Tied by Ryo Shimazaki

●フック……TMC212Y #11　●スレッド……8/0各色
●テイル（シャック）……ズィーロン
●ポスト……エアロドライウィング・ホワイト
●ボディー……スーパーファインダブ・各色
●ハックル……コックネック・クリー

大きなポストが帆のような役割を果たし、水中に入ったボディーがゆらゆらと揺れて魚を誘うことを目的としたパラシュート。エアロドライウィングを2本分（1本を折り返して使用）使い、根元部分を瞬間接着剤でフラットに固めて、先端部が軽くなるように刈り込む。視認性に関しては副産物だが、結果的にほとんどの流れで、かなり目立つフライに仕上がった。

<ホッパー>

Tied by Yoshimasa Satomi

●フック……バリバス2110 #12～18　●スレッド……8/0各色
●ハックル……コックネック・グリズリーダイドグリーン
●ボディー……ダビング材・グリーン系カラー
●ウイング……エルクヘア・オリーブ、ナチュラル
●インジケーター……エアロドライウィング・FLピンク

視認性を高めるためにオリーブのエルクヘアの上にナチュラルを乗せ、さらに少量のエアロドライウィングを加えている。これだけでも、フライが沈みがちな流れなどで、その見やすさは大きく変わってくる。

“見える”フライを作る。

水辺の写生帳

Stream Side Sketch Book

Vol. 33

心豊かに老眼

柴野邦彦

「フライを失くしたから、もう止めようか！」

と言ったら、眼の前で大きいのが跳ねた。跳ねるというより、魚雷のように太い銀色の物体が垂直に飛び出した。一瞬、空中に止まったように見えたが、次の瞬間それは垂直の姿勢を保ったまま落下し、豪快な水しぶきを上げて消えた。

陽はもう背後の山陰に回って、その最後の名残も水面から立ち去ろうとしていた。

「あれはまだあそこに居ますよ、もう一回やってみれば？」

「フライを失くしたから、もういいよ」

「わたしはまだ見えますよ、結んで

あげるから、もう一回やってみて！」
スギちゃんがそう言って、よく見えるように大きな白いフライを結んでくれた。高く伸びた後ろのヤブが闇をさらに濃くした気がする。そうして、スギちゃんの監視の下に放水口からの強い流れが、うねって次から次へと押し寄せる筋にフライを投げた。その魚は瀬脇でも、巻き返しでもなく強い流れの真ん中にいた。大きくて力の強い魚だ。あんなのを釣ってみたかった。それからしばらくの間、黙ってフライを投げ続けた。スギちゃんは大きなネットを持って後ろの草の上に座っている。彼はそこに大きなやつがいるのを知っていて、私を連れてきてくれた。

もう水面が空の白みを照り返しているだけで、景色は夜の底に呑みこまれた。天地の境があいまいになり、強い流れで重力の方向が乱され、水の中に立っているのが不安になった。

その後、魚はもう姿を見せなかった。

「もうお仕舞いだね」

「あれからはライズしませんでした？」

「あの一回だけだったね」

「そう、いい時はあんなのがいくつも姿を見せるんですけどね。今日は残念でした」

「でも、大きいのが見れたからいいよ」

「いるのが分かってもらえただけでも良かったです」

それで、ぼくたちはサオを担いで、急な斜面につけられたヤブの中の踏み跡を上がっていった。

イブニングに小さなフライを使わなければならない繊細な釣りをしなくなってだいぶ経つ。老眼のせいで小さなアイにイトが通らなくなったからだ。釣りを始めたころはなにがなんでもロッドを振っていたくて、それに、それは若いころだから体力もあったし、朝からずっと釣りをしていて、気がつくとイブニングの時間になっていた、という風だった。

釣りをしたくてしかたのない時代、サオも振らずに草の中にじっと座ってライズを待つなんてことはできなかった。それは時間の無駄で、なにがなんでもサオを振り続けていれば魚を釣る確率が増えると思っていた。だから釣り続けていて、気がつくととつぜんイブニングライズの時間になっている。あわただしく仕掛けを換える。ティペットを太くして、大きな見やすいフライをつける。そうして、イブニングライズが起きるに違いないと思っていた場所に戻る。すると、そこにはすでにフライフィッシャーがひとり陣取っている。

　そんな失敗を何度も重ねれば、いくら鈍感な小生でもしまいには、イブニングは早めに目星をつけた場所へ行き、草の間に座ってヤブ蚊に食われながら、夜の裾が静かに拡がってくるのを待つことを覚える。しかし、待っている時こそ夜はなかなかやってこない。

　今日もそうだ。草の間に寝転がると、山の峰の後ろから雲が湧き上がってくるのが見える。頂上近くはまだ陽が高くて、白い雪が光っている。山並みを離れた雲が流れてゆくのを見ていると、朝が早かったせいで眠気が押し寄せてくる。

　騒がしい声が至福の眠りを破った。対岸の林にあるアオサギの団地で悶着が起きたらしい。粗忽者が部屋番号を間違えたか、子育て中だというのに浮気な旦那が隣の若い嫁さんにちょっかいを出したか、あるいは雛をねらったタカが通り過ぎたのかもしれない。

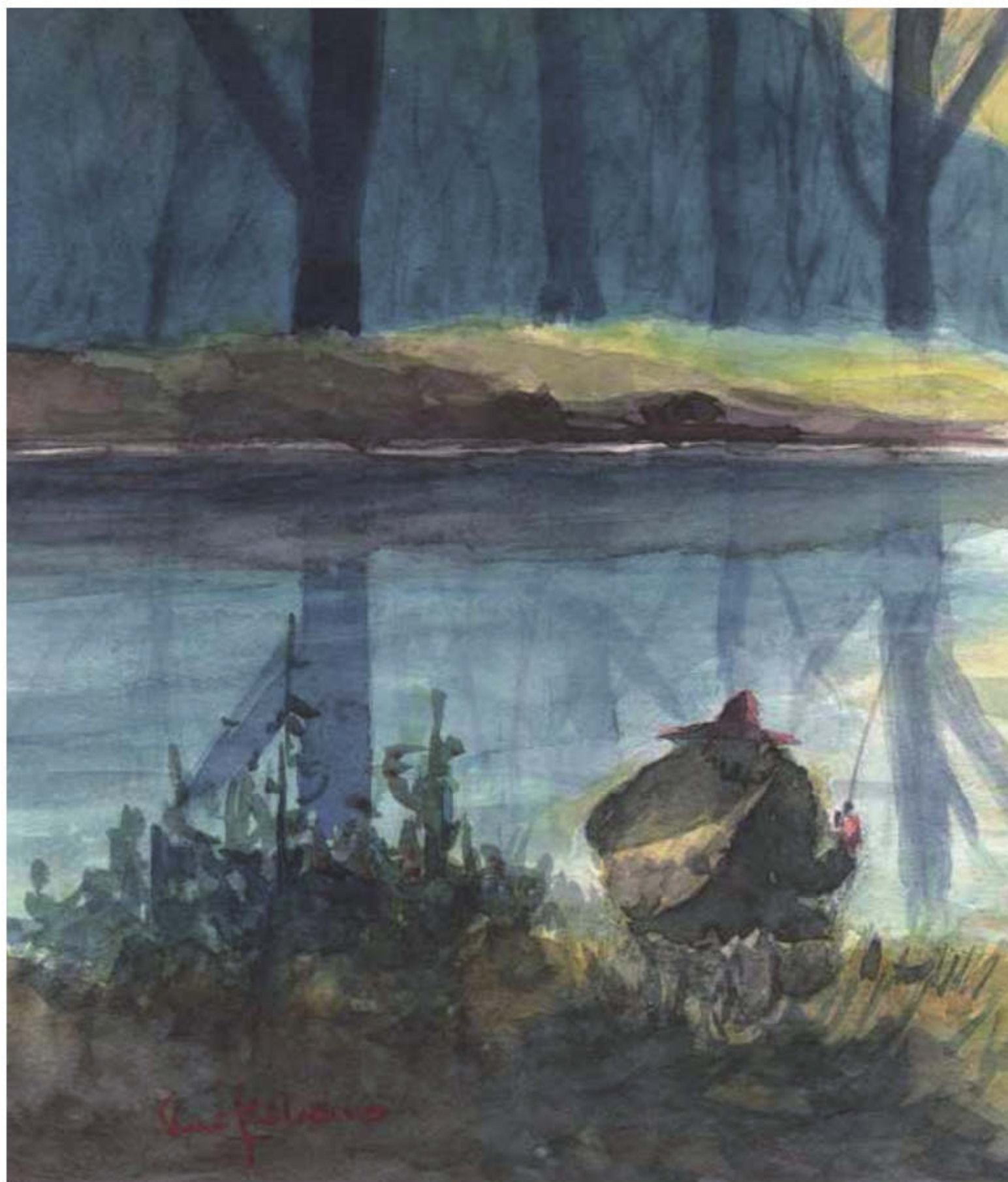
　陽はとっくに山の陰に姿を消して、空がピンク色に染まり、林は色を失って黒々としてきた。頭の上でピーッと声がする。柳の大木にできた大きな巣にトビの雛が二羽いて、時々白い産毛の頭を出す。腹が減って親を呼んでいるのだろうか。そうして、コウモリが飛び始めた。そろそろ魚が動き出す時間だ。上半身を起こして水面を見つめる。昨日は雨が降って、寒くて、結局ライズは一度も起きなかった。サオも振らないで夜が一つ過ぎていった。今日は昼間暑いくらいだったから、きっと虫もたくさん出るだろう。

　トビの夫婦が巣に戻ってきた。古いギリシャの壺のような黒い塊が二つ、巣の上を飾った。そうして、下流の岸ぎりぎりのところでライズが起きた。さっそく、2Xの先につけた、トビケラ用のマドラーミノー風フライを投げてみる。それは何事もなく魚の頭の上を流れていった。もう一度投げてみる。やはり、出てこない。同じことをもう二度やった。反応なし。魚がスレているのだろうか。毎日誰かがこの魚をつついているのか。

　それでしばらく休ませると、またライズが始まった。同じフライを投げる。反応なし。いったい何をどうやって食っているのだろう。水面に反応しているのにピューパなのだろうか。最近ではそんなフライは持ってきていない。より好みをする鱒にはお手上げだ。

　もちろん、若くて眼が良かったころには、うす暗い中でヤマメ相手の二十番などというフライを結んだが、そのうち老眼が始まって、小さなアイにティペットが通らなくなり、一本のフライを結ぶのにひどく時間がかかった。結び終わったころにはライズはもう間遠になっている。それで、老眼対策としてはあらかじめフライを結んだ予備のティペットを用意しておくことにした。これはシャルル・リッツ先生ご推薦の方法で、フライと反対側の端はチチワにしておく。リーダーの先もチチワにしておいて、ループ・トゥー・ループでつなぐのだ。これなら暗い中でもなんとかなる。ヘッドライトの輪の中、切り取られた夜に閉じ込められて、ハリの穴を捜す、あのなんとも孤独に満ちた作業をしないで済むのだ。

それに、ライズの最中に、いくら後ろを向いてでも、ヘッドライトは点けたくない。このフライを結んだスペアーのティペットは帽子のつばの上にぐるりと巻いておく。いざという時にはそれを外して、ティペットごと換えてしまうのだ。この方法も万能ではない。たしかに、戦術を絞り込んで必殺のフライを一つ決めて、それを失くした時に、同じものを付け替える場合や、あるいは本命のほかに代打を一種類だけ持って行くなどという場合には有効だが、帽子のまわりに何本ものフライ付きティペットを巻くのはいただけない。外す時に　まちがいなくイト同士がからみあって使用不能となる。

　小生はかなり若いころから老眼が始まっていて、それ以来ずっと遠近両用のメガネを使っていたので、それに慣れてしまって、メガネを二つも三つも持って歩かずに済んでいる。そうでなければ、便利そうな道具を身体中のポケットに詰め込んでいる釣り人にまた一つ厄介のタネが増えるというものだ。自分は横着者だと分かってはいるが、かといってそれを止める気もないので、釣り道具もフライも、釣り方も汎用性ということを考えていた。つまり、少ないものでいろいろに応用しようという考え方だ。肩が凝るほど重いベストを着るのが嫌だったせいもある。最小限の道具立てで川を歩いてみると、カバンも軽くなったが、気分も軽くなった。おかげで、釣れる魚の数が極端に減った。人間、どっかで折り合いをつけなければならない。小生の場合は魚の少ないほうで折り合いをつけた。あれもこれも面倒くさければこういう方法もあるけれど、ほとんど釣り人失格の方法だから、この方向への解決策は万人にすすめられるものではないだろう。

　それで、今日もライズはあるのに魚は釣れず、釣れれば六十は越していただろうという幻想と明日への期待のみを背負って、心豊かに帰ってきた。

〈Profile〉しばの・くにひこ

1943年東京生まれ。上智大学仏語科卒。フランス大使館勤務、イベントプロデュース業などをへて、現在はイラストレーションと文筆に専念。登山とフライフィッシングを愛好し、FFJ(フライフィッシングジャーナル)の設立メンバー。著書に『川からの手紙』(講談社)、『フィッシング・ダイアリー』(未知谷)、翻訳書に『ア・フライフィッシャーズ・ライフ』(未知谷)など。最新の画集『釣人たち』も発売中

群馬県／神流川（かんな）

カブリオレとすごす休日。

下仁田から神流川へ続く道も、この車なら快適このうえない

**予約制で貸し切りで釣ることもできる
上野村神流川の釣り場が、最近人気を集めている。
C&R区間で魚は多く、緑の濃い渓谷でのんびり釣りができるのだから、
休日ともなれば予約でいっぱいになるのもうなずける。
そんな神流川に向け、石井昇さんは『カブリオレ』を走らせた。
ドライブまでもが至福となる車と一緒に、貴重な休日をすごす。**

浦 壮一郎＝写真・文
Photography & Text by Souichiro Ura

フライフィッシングと車、どちらを選ぶ?

たとえば次のような問いかけがあったとする。

「フライフィッシングと車、あなたはどちらを選びますか?」

どちらかハッキリしている人にとっては素直に答えられるかもしれないが、双方が趣味だという人にとっては実に無意味な質問だと思える。フライフィッシングが好きな人にも車好きはいるはずだし、どちらかひとつに限定する必要はないからだ。

かつては数ある趣味のひとつに「ドライブ」というジャンルがあった。それはもちろん車を走らせることを指すわけだが、なぜドライブが趣味になり得たのか。ほかに楽しみがなく、車をただ走らせるだけで楽しく感じる時代だったのかもしれないが、操作するだけで楽しい車が溢れていたから、ともいえる。現在はどうか。何らかの目的があって車を必要とする場合がほとんど。ドライブというのは死語になって久しい。

たとえばの話になるが、釣りの専門誌で車の特集を組んだとする。そこに登場するのは編集部が考える釣りに最適な車であり、選択基準は荷物の積載量や乗車可能人数、悪路での走破性、広い車内といったところだろう。結果、現在の日本ならSUVかミニバンが有力となる。

他方、車好きの釣り人にもいろいろな人がいる。SUVやミニバンが好きな人もたしかにいるが、なかには旧車やスポーツカー、あるいはオープンカーを好む人だっている。後者の人たちにとってその特集は大きなお世話。2台、3台と所有するならいいが、なけなしの1台を釣りのために制限されるのは妥協でしかないからだ。

近年、自動車メーカーや車の専門誌などで「走り」を強調したフレーズが目立つようになった。そして車好きのなかには「走り」を優先する人たちが多いと思われるのだが、走りとはいったい何なのか。それはおそらく運動性能のことなのだと勝手に想像する。つまりは曲がる、止まる、といった基本動作が高い次元にあること。

一般に重心の低い車ほどロール量（車の傾き）も少なくなり運動性能（操縦安定性や俊敏性）は上がる。たとえば前方で何か不測の事態があり急なレーンチェンジが必要な時、重心が高い車はブレーキを思いっきり踏み、ぶつからないことを祈るほかない。ところが重心の低い車ならスムーズなレーンチェンジで危険を回避できるかもしれない。運動性能の高さは運転を楽しくするとともに、安全性も高まるというわけだ。

そのように考えると、近年の欧州車人気、高評価も納得がいく。欧州車の特徴としてよく語られるのは長距離の優位性と高い安全性。国境を越えることが当たり前とあって、長距離を安全に走りきることが重要視される。

そのために妥協できないのが運動性能であり重心の低さ。日本ではミニバンやハイトール軽自動車の人気が高いが、欧州での売れ筋モデルはコ

上野村漁協管内の神流川では、こちらの川の駅特設釣り場のほか、本谷毛ばり釣り専用区、中ノ沢毛ばり専用区が貸し切りで遊ぶことができる

ンパクトなハッチバックをはじめセダン、ステーションワゴンなどいずれも車高は低い。こうしてみると市街地走行を重視するか、長距離を重視するのか、日本と欧州における車選びの違いは用途の違いだといえそうだ。

そして釣り。必然的に長距離運転を強いられる。であれば車好き的発想で、あるいは欧州車的発想で車を選ぶ必要があるのではないか、と思うのである。

釣りをもっと楽しくする車選び

GWのさなか、『WELLSTONE』リールでおなじみの石井昇さんが群馬県は上野村の神流川を訪れ、ヤマメ釣りを楽しんだ。ポイントは川の駅特設釣り場。予約することで貸し切りになる区間である。9～13時は指定されたブロックが貸し切りとなり、それ以降は区間全体での釣り上がりが可能になる（予約者のみ）。GWでも他の入渓者を気にせず釣りに集中できるとともに、のんびりとその時間を堪能できるのがいい。

待ち合わせ時間になり、重厚ながら控えめな排気音とともに1台の大柄なオープンカーが『川の駅 上野』駐車場へと入ってきた。石井さんがステアリングを握るメルセデス・ベンツ『AMG S63 4マチック・カブリオレ』である。地方なら戸建てが買えるほどの高額な車であり、古い言葉を使うならスーパーカーといって差し

支えない。普段からメルセデス・ベンツに乗る石井さんにとっては並外れた存在ではないのだろうが、さすがに車好きだから、運動性能が高いからといった理由だけで釣り場に持ち込む人は少ない。そもそも、お目にかかれる機会はそう多くない。そんな特別な車である。

ただ、いざ乗車させてもらうと印象は大きく変わる。運転のしやすさはメルセデス・ベンツ共通のメリットといえるが、このモデルは太いトルクとAWDによって山道の上り坂も軽快に駆け上がってゆく。ロール量が少ないことからコーナーリングもスムーズ。同乗者に車酔いしやすいメンバーがいたとしても問題ない。

アウトバーンで鍛え上げられたドイツ車であるがゆえに高速道路は得意中の得意。都内から上野村までの距離は同モデルにとってあまりに近く、物足りないものだったようだ。日本では車で国境を越えることはできないが、近くても東北、あるいは海を越えて北海道にでも渡ることができたなら、この車の神髄がより明確になったのかもしれない。

石井さんは社内でひと仕事終わらせたのちに神流川に到着。早々に釣り支度を始め、運転の疲れなど微塵も見せぬまま釣り上がった。C&Rエリアとあって魚影は多く、時おり良型も姿を見せる。とはいえさすがにスプーキーなヤマメも多く、フライに鼻先まで近づいたのちにターンしてゆく個体も見られた。GWが終わっ

WELLSTONEのフライリールは堅牢かつ精密

魚の多い神流川では、良型が出る確率も高い。ドライフライをくわえた1尾

都心部からも決して遠くないエリアで、この風景を貸し切りで楽しめるのは魅力。休日の予約は早めにしておきたい

山間部のワインディングロードを走る。カーブの安定感に、メルセデス・ベンツの誇りを感じる

もはや死語かもしれないが、ハンドルを握るとスーパーカーという言葉が脳裏をよぎる

バックモニターは、エンブレムの下から出てきた。細部の作りにさりげないギミックがあり、それもまた乗り手を楽しませる

てしばらくすれば少しは警戒心が薄れるのだろうが、ライズはあるだけに釣れない魚ではないはず。そんな難しい状況がドライの釣りを面白くしている。

　ライズが散発的となった時間帯、石井さんはシンキングラインを用いウエットフライを流した。

「この川にシンキングラインを持ち込む人はいないだろうから、すぐ釣れると思うんだよね」

　そう話しながらキャストした直後に有言実行。ヤマメがフライをくわえた。ドライフライでねらう人が多いためか水面下のフライには警戒心が薄れる。水面に出ることを躊躇するC&Rの人気河川では、深く沈んだフライが魅惑の存在になり得るようだ。困った時の一手として脳裏に仕舞っておく必要がありそうだ。

　とはいえハッチが始まるとドライフライへの反応がよくなり、午後はドライに軍配が上がった。至福の時間は決して長くはなかったが、貴重な休日を堪能するには充分だったといえる。

　帰路、上野村から下仁田ICまでの山越えが待っている。そんな曲がりくねった山道も『S63カブリオレ』ならきっと楽しくて仕方がないはず。わざわざ遠回りしたくなるほどに……である。そんな車で釣りに行けたなら走り出した瞬間から自宅に到着するまで、そのすべてが至福の時になるに違いない。

　もし車の運転が苦痛だと感じている人がいるとすれば、その原因は車にあるのかもしれない。もちろん『S63カブリオレ』でなくとも運転が楽しいと感じる車は数多くある。釣り旅をより楽しくしたい、運転の苦痛から解放されたいと思ったなら、車選びにおいても発想の転換が必要なのではないだろうか。

Mercedes-Benz

Mercedes-AMG S63 4MATIC Cabriolet

走らせてみても、ただ眺めているだけでも、ため息しか出ないような車である。新緑の山道を、風を感じながら走っているだけで満足が得られる一台だ。このモデルはメルセデスAMG製5.5リッターV型8気筒直噴ツインターボエンジンを採用。パフォーマンス志向のAMG専用四輪駆動AMG 4MATICで、マフラー内のエグゾーストフラップによってエンジン音を切り替えるAMGスポーツエグゾーストシステムも搭載している。

●問合先　メルセデス・ベンツ（☎0120·190·610）
http://www.mercedes-benz.co.jp

#3「釣りは現場!」

やはり、釣りは川に立たないと始まらない。
そんな現場主義を改めて実践すべく、
尺アマゴの泳ぐ本流へ向かった。
恵みの雨に始まったライズだが、
それがなかなか届かない場所でばかり……。

遠藤 岳雄、喜久川 英仁=文・写真
Text & Photography by Takao Endo／Hidehito Kikukawa

【連載】

尺まで届け! season 4

SHAKUTORI Dreamers

シーズンをとおして30.3㎝以上の渓魚にねらいを絞る男たちの釣行記

相棒の快進撃に触発されて

「アンタ、今シーズン絶好調だな!」
「いや〜まいったねエンちゃん。ホントどうしちゃったんだろうねオレ!」

前回の尺ヤマメ3連発に続き、相棒の快進撃はまだまだ留まるところを知らず、今度は32㎝のヤマメを釣ったという電話が入った。

しかも、この日は雨で増水していたはずなのに、そこをすかさずニンフで釣ったというのだから、いやはやさすがと言うしかない。この連載をしていながら、こんなことを言うと語弊があるかもしれないが、尺ヤマメや尺アマゴは、そう簡単に釣れるものではない。川の選択から始まり、今までの経験から導き出せる状況に応じた釣り方のバリエーション、選択するフライ、トータルなシステムバランス、そして少しばかりの運……が必要となってくる。〝よく釣る人〟というのは、例外なくこれらの要素を兼ね備えているものだ。

さらにもうひとつ付け加えるならば、〝よく釣る人〟はよく釣りに行っている……のだ。やはり重要なのは現場。まずは川に立たないと釣りは成立しないし、魚も釣れない。この分野においても、フライフィッシングという釣り方を選択しているだけであって、「釣り」という行為は他と変わらない。だから当然のことながら、よく釣る人はよく釣り場にも行く。

かくいう僕もいっぱしの現場主義者。相棒の電話で楽しそうな話を聞いたり、SNSで友人や他の釣り人の近況を見ながら、うらめしそうにうなずいたり眺めているだけなんて精神的によろしくない。ましてや、忙しさにかまかけて、それを釣れない理由にはしたくない。そう思ったら急に現場に行きたくなるのは古今東西変わらない釣り人の性。さっそく相棒のキクちゃんに電話を入れ、急遽週末に2人で出掛けることになった。

射程範囲

この日は朝からよい天気で、お世辞にもライズ日和とは言い難いコンディション。実際のところ、午前中からハッチはスローで、キクちゃんと河原でぼんやりとライズ待ちをしていただけで終わってしまった。

このままでは埒があかないとの判断から、2人して別々のポイントで状況を見ることに決め、キクちゃんは今シーズン実績のある場所へ移動していった。僕の目の前には、仲間うちでは今シーズンまだ誰も釣っていない流れが広がっていた。

きっと、キクちゃんのポイントではライズがあるだろう。そんなことを考えると、自分も移動しようかと考えたが、目の前の流れをぼんやりと

ちらほらと出ていたモンカゲロウは、これからの季節に期待をもたせる大型種だ

突然の雨とともに数種類のコカゲロウが次々と流下してきた

眺めながら、これだけの流れで誰も釣っていない……ということが心の中で引っ掛かり、移動することがためらわれた。

（きっといるはずだ……）

しかし、そんな淡い希望的観測は時間の経過とともに徐々に萎えていき、時計に目をやると、この日のプライムタイムと確信していた午後1時をとうに過ぎ、すでに3時を回っていた。

（やはりここにはいないのかな）

キクちゃんに電話を掛け、あちらの状況を確認するも、やはりライズはないという。この日は全体的によくないようだ。唯一、自分の場所だけがライズがないわけじゃない……ということが分かったのを救いとして、もう少しこのポイントで待つことに決めた。

すると間もなく、急転直下の出来事が起こった。にわかに晴れていた空が急に曇り出し、ついにはポツポツと雨粒が頭上から落ちてきたのだ。予報では、夜半からの雨となっていたのだが、どうやらそれが早まったらしく、そうこうしているうちに、徐々に雨脚は強まり、カッパを着なければびしょ濡れのレベルまで降ってきた。

通常であれば、こんな時の雨はうっとおしいだけのはずでも、この場においてはまさに恵みの雨。おのずと期待が膨らみ、濡れることなどお構いなしとばかりに、目の前の流れを凝視する。すると、奇跡は起こった。

モコ～ン。

待ち焦がれていた波紋が、予測していた流れよりも下流側で広がったのだ。さらに目を凝らすと、続けて2度3度と上流へ移動しながらそれは起こった。もはや疑う余地はない。ライズだ。しかもデカい……。

が、いかんせんライズまでの距離が遠い。30mほどの川幅の対岸際でそれは起きている。しかも、見渡す限り対岸へ渡れそうな流れはなく、車で移動するにしても、かなり下流の橋を渡り、そのうえ市街地を抜けてひと山越えなければならず、急いでも30分以上は掛かってしまう。

（くっ……）

試しに目の前の流れに立ち込んでみるも、やはり遠すぎてライズまでは届かない。この時気がついたのだが、足もとの流れにはグレーのウイングを立てたヒメヒラタカゲロウが次々と流下してきていた。突然の雨がハッチを促し、それを捕食する魚が浮上してきたのだろう。対岸に目をやると、あいかわらずヤル気満々の魚がモクモクとヒメヒラタのダンを捕食しながら、上流へと移動しているのが見える。

（くっそー）

苦労の末にやっと手にした本流アマゴ34㎝。やはり現場ではいつ何が起こるか分からない

流下するヒメヒラタカゲロウに合わせて使った#16のスペントパターン

意を決し、唯一無理をすれば対岸へ渡れそうな下流の瀬を徒渉しようと試みる。しかし見た目以上に流れの押しが強く、すぐさま足もとをすくわれそうになる。それでも諦めきれず、さらに下流の瀬の中を渡ろうと川幅の途中まで強引に進むも、やはりそれ以上は厳しく、泣きそうになりながら戻ってきた。

（くっそー……ちっくしょーっ）

意を決して対岸へ!

雨脚はますます強く、ライズもますます頻度が増えている。かくなるうえは、車で対岸へ移動するしかない……! 急いで車に戻り、びしょ濡れのベストを脱ぐのももどかしく、速攻で対岸へと車を走らせる。

（頼む。ライズよ、止まないでくれ!）

焦る気持ちのなか、30分以上かかって対岸の土手へと車を滑り込ませた。すぐさま川面を見下ろすと、河岸から2mほどのレーンを上流へ移動してくる大きな波紋が見えた。

（よしっ!）

急いで河原に下り、できるだけ姿勢を低くしながらライズレーンの上流へと歩み寄る。

モコ～ン……モコ～ン……。

下流から目の前へ来ることを予測し、フライラインをリールから引き出し、その時を待つ。

モコ～ン。

（よしっ! 今だ!!）

ドンピシャのタイミングで投じたフライが、ゆっくりと目の前を流れてくる。

「……!?」

出ない……ゆっくりとフライをピックアップし、次の瞬間を待つが、どういうわけか二度とライズは起こらなくなってしまった。

（なんで……?）と思ってみたところで、後の祭り。やはり、急いては事を仕損じるのか。ハッチが終了したのか、僕の存在を察知されスプークしたのかは分からないが、それきり波紋が広がることはなかった。

ここまでの苦労が報われず、急に雨が冷たく感じられてきた。再び泣きそうになりながらも下流に目をやると、僕は自分の目を疑った。なんと、最下流のヒラキでひとつ波紋が広がっているのが見えたのだ。

それは、先程対岸から渡ろうと試みた瀬のほんの少し上の流れ。おそらく、その時はライズしていなかったのが、車でこちらに向かっている最中にライズを始めたに違いない。まだ運はこちらにある。

何も起こらない午前中、ウエットフライで深瀬を探ってみたが……これラインが絡んでません?（キク）

この後、キクちゃんは実績のあるポイントへ移動していったのだが……

過日キクちゃんがニンフで釣った32㎝。ちょっとアンタ釣りすぎじゃね？（エン）

急ぎ下流へ移動し、ライズを確認する。

モクン……モクン。

それはヒラキの最下流、目いっぱいウエーディングしても届くかどうかの距離で、半径3mほどの範囲を上下左右に移動しながら、ゆっくりと捕食を繰り返していた。

先程のこともあるので、今度は慎重に川へ分け入り、腰のあたりまで立ち込んだところで、再びポイントを確認すると、動きながらライズを繰り返すパターンのうち、何度かに1回は射程範囲に入ってくることが分かった。

ゆっくりと静かにリールからラインを引き出し、キャストの態勢を整えて、その時を待つ。

（こっちに来い……）

何度目かのライズの後、手前側で水面から頭が出たタイミングを見計らい、次のライズを予測したレーンにフライを投じる。

（出ろっ！）

モコン。

反射的にロッドを立てると、ドスンとした重みとともに、グラスロッドがひん曲がる。ギラギラギラ〜。

（デカイ!!）

距離があったぶんだけ急いでラインを引き戻し、すばやく魚との間合いを詰める。アマゴ特有のローリングが生命感となってロッドを通じて強烈に伝わってくる。何度かの抵抗の後、アマゴがついに浮いてきた。今シーズン初のアマゴ、銀色をまとった本流アマゴ。そして何よりも今日1日の苦労が報われるアマゴ……。

目いっぱいネットを持つ手を伸ばし、降りしきる雨粒とともにそいつをすくう。

「やった!!　キクちゃんやったぜ!!」

我に返ると、愛おしそうにアマゴを写真に収めるキクちゃんがいた。その姿をボーっと眺めながら、今日1日の出来事を振り返ると、本当に運がよかったと思うとともに、やはり釣りは現場だということを改めて思い知ることができた。

フライフィッシングは野遊びだ。であるならば、我々は現場へ行き、そこで笑い、そこで泣き、そしてそこで学ぶのだ。そんな思いに耽っていたら、急に耳障りな怒号が飛んできた。

「ねえねえ？　ちょっとアンタ？」

「……」

「ねぇーてば！　あんた何ひとりで浸ってんだよ！」

「な、なんだよ……今いいとこだったのに」

「はっ!?　アンタそれよりどこにライズがあるんだよ？」

「……ない」

「はぁー？　ライズあるっていうから急いでやってきたのに！」

「……」

「どういうことだよ？　なんで嘘ついて呼んだんだよ！」

「……カメラ忘れてきちゃったからさ……」

「はっ!?　だってさっき一緒に写真撮ってただろ！」

「ホントだって……」

「嘘言うなよ！　アンタ午前中にカメラ持ってたじゃんか！」

「ほらあそこ……（笑）」

僕は対岸を指さしてキクちゃんに告げた。降りしきる雨の中、2人の目線の向こう側、雨に濡れそぼる対岸の石の上に、そのカメラはポツンと寂しげに佇んでいた。

「なぁ、エンちゃん」

「なんだよ」

「アレ、防水でよかったな」

SHAKUにまつわるエトセトラ
情報、相談、お待ちしてます！

「A川で尺が釣れません、2人に釣ってみせてほしい」、「巨大魚の噂を聞いたことがある」、「一生に一度でいいから尺超えを釣ってみたい」、「年間30尾以上尺超えを釣ってます」など、尺にまつわることなら何でも募集。シャクトリドリーマーズの2人が、全力でサポートします。応募方法は129ページのアンケートにお答えのうえ、メールの件名に「尺まで届け募集企画」と明記して住所と名前と連絡先をお書きのうえご応募ください。採用させていただいた方には、FlyFisherオリジナルグッズをお送りいたします！

四万十川水系には数多くの沈下橋が架かる。夏になると子どもたちが飛び込む姿も見られる

高知県／四万十（しまんと）川水系

南国土佐旅情

浦 壮一郎＝写真 Photography by Souichiro Ura
全日本空輸(株)＝取材協力 Supported by ANA
Text by FlyFisher

魚が釣れるのはもちろん最高の癒しだが、
釣りを旅として考えた場合、
それ以外にも不可欠な要素はいくつか出てくる。
人によっては温泉かもしれないし、美しい風景という意見もあるだろう。
そしてやっぱり外せないのが、美味しい料理。
そういった視点で考えると四国というのは、
ぜいたくな旅を満喫できる土地なのである。

藤の花が咲くころは、フライフィッシングの盛期

沈下橋を眺めつつ

高知龍馬空港から1時間半ほど走っただろうか。ようやく蛇行する四万十川が現われた。四国には仁淀川や吉野川など清流が多い。なかでも四万十川の知名度は高く、清流といえばこの川を思い浮かべる人も多いのではないか。

四万十川の風景を特徴づけているひとつが沈下橋だ。欄干のない橋は増水時に沈んでしまうが、水流の抵抗が小さいので、押し流されにくい。水とともに生きてきた流域住民の知恵といえる。川沿いを走っていると、そんな沈下橋がいくつも見られ、旅情を感じさせてくれる。

それにしても……暑い。ゴールデンウイークの最終日に四国に入ったが、さすがに南国土佐である。四万十川本流の水温も高く、フライフィッシングには厳しそうな状況である。しかし上流部に向かえば、アマゴの姿は見られる。R４３９で梼原（ゆすはら）川の上流部を目指した。

水温高めの昼間に出てくれた梼原川のアマゴ

岡本さんの一風変わったリール。Ari 't HartのAstrid Reels

ちなみにこの国道436号線は、一部では「ヨサク」と呼ばれ、国道ならぬ「酷道」の異名を持つ。走ってみるとたしかに細く、くねくねとした山道である。これもまた旅の味わいと思えば、一度は走ってみてもよいだろう。

梼原川の流れに足を入れると、ひんやりした水が心地よい。これならアマゴも期待できそうだ。案内してくれたのは、地元で『岡末旅館』を営む岡本聖司さん。隣にある岡末商店も岡本さんがやっているそうで、その店番を抜け出して釣りに付き合っていただいた。

四万十川最上流域の魚

四万十川の最上流域であるこのあたりだが、それでもこの時期、日中の釣りよりは夕方のほうがよいという。イブニングにはライズで川が湧き立つようになることもあるそうだ。

「真昼間から出るかなあ……」

そうつぶやきながら流心を叩くと、いきなりきれいなアマゴが躍り出た。かわいいサイズではあるが、どうやら魚は多いようだ。

その後、同行者もアマゴを掛け、ともあれ朱点の散りばめられた魚を手にすることができた。これからの時期も、イブニングなどをねらうのなら、四万十川上流域の魚は釣り人の相手をしてくれるという。

ちなみに四国では、渓流で釣りをする人は思ったほど多くない印象を受ける。実際に地元の方に聞いても、解禁初期こそ渓流に入るものの、それよりは海、あるいはアユ釣りのほうに入れ込んでいる方が多いようだ。そのせいか、支流に入ってみるとアマゴの数は多いようで、しかも河原には釣りのゴミがほとんど見られない。もしかしたら単にマナーがよいだけかもしれないが、この日も休日というのに、川で釣り人を見かけることはなかった。

釣りだけでなく……

梼原川の上流部からしばらく北上すると、おそらく読者の方々も子どものころ、社会の教科書で目にしたであろう「カルスト台地」がある。ついでだと思って車を走らせると、想像以上に

美しい渓流を釣り上がっていく。この日の魚はどうやら日陰で体力を温存していたようだ

川漁師の姿もよく見られる四万十川。流域で獲れたウナギ、ナマズ、川エビなども、ここを訪れたら食べておきたい

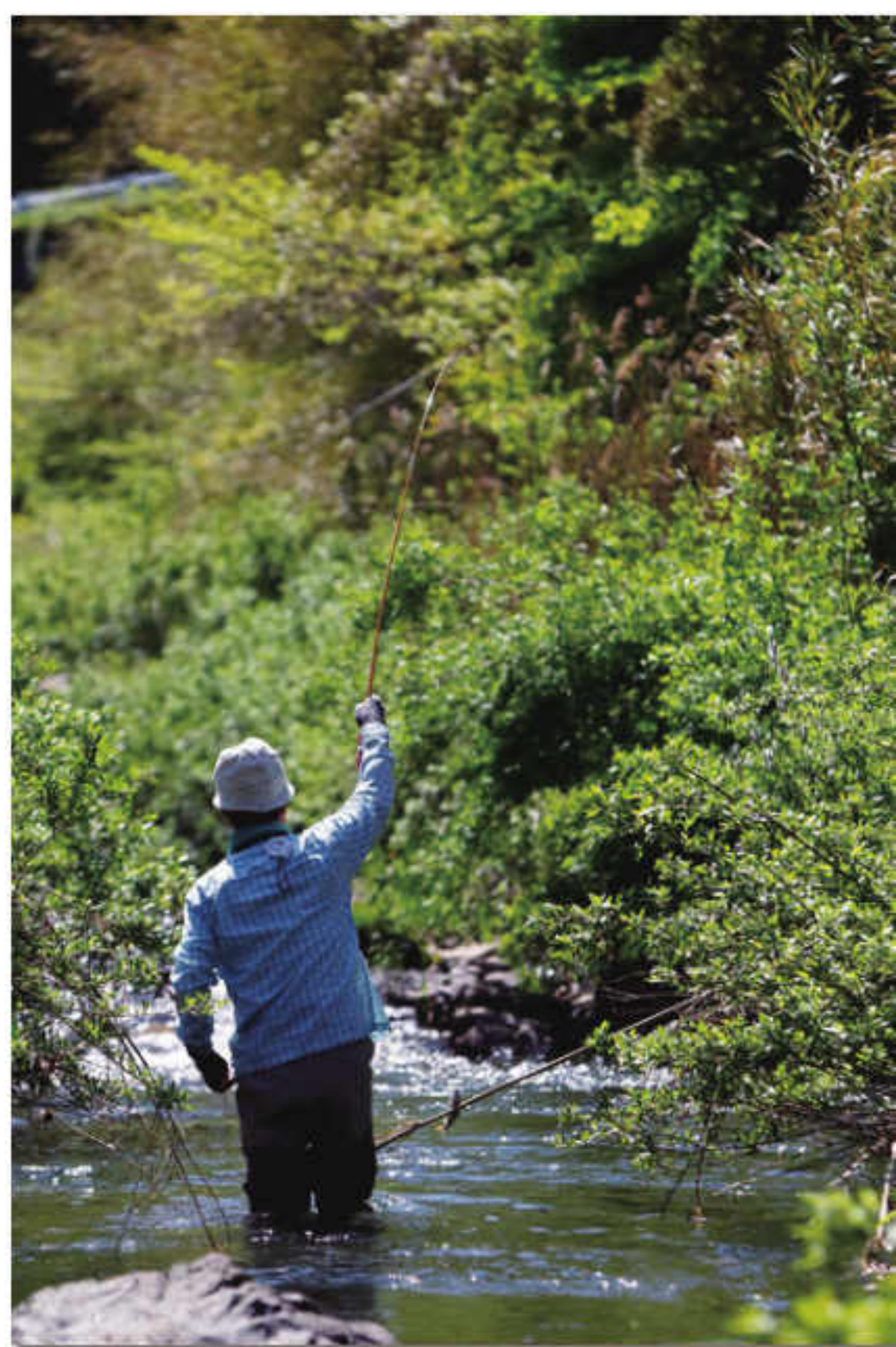
南国土佐旅情

高知県／四万十川水系

雄大な眺めであった。せっかく同地を訪れるのなら、足を運んで損はない。

そう、四国には釣り以外の楽しみもたくさんあり、特に海の幸は豊かである。なにしろ1世帯あたりの飲酒費用では、高知県が全国でもトップとのこと。日本酒が美味しいのはもちろん、それに合う食べ物も豊富なだけに、左党にはたまらない土地である。

居酒屋に入ると、シッタカ、チャンバラなど聞きなれない貝が出てきて、それをつまようじでほじくりながら待っていると、定番のカツオ、四万十川産のウナギや川エビ、さらにはウツボなどの珍味も登場する。かつて坂本龍馬や中岡慎太郎なども、こんな美味、珍味をつまみながら日本酒の杯を傾けたのだろうか……。そんなことを考えているうちに、いつの間にか夜は更けていくのである。

……結論からいってしまえば、今回の釣りで、それほどの良型を目にすることはできなかった。それでもまた、この地を再訪したいと思うのは、やはり「旅」として考えた時、あまりに充実しているからだろう。大人の休暇は、こんな場所でのんびりしたいものだ。

四万十川の各支流はもちろん、四国には多くの銘渓がある。のんびりと釣り旅を楽しむにはもってこいの地である

「こんなに暑くて出るかな……」と言っていた岡本さんだが、釣り始めるとすぐに魚を出していた

①カルスト台地は一見の価値あり

②鮎市場（高知県四万十市西土佐江川崎2410-3／☎0880・52・1148）は、ぜひ立ち寄ってほしいスポット。天然のウナギやモクズガニ、ナマズなどが購入できる。もちろん調理済みのものもあり。スッポンにはご注意！

③高知といえば……やっぱり一度は味わいたい

④羽田から高知龍馬空港までは、ANAの場合1時間半程度のフライト。四国まではまさにひとっ飛び

Guide **四万十川**（梼原川）
遊漁期間：3月1日～9月30日
遊漁料：年券5,000円（町民は3,000円）
●梼原町産業振興課
TEL0889・65・1250

盛期に頼れる水生昆虫&テレストリアルパターン

前号掲載の春から初夏のフライパターン集に引き続き、今号では初夏以降の盛期に結びたい39本をピックアップ。東北も雪代が落ち着き、ドライフライ・フィッシングの最もよい季節にこそ使いたいパターンをそれぞれ結ぶ季節、シーン、そして使用フロータントと合わせて紹介。

Edit by FlyFisher

《Profile》

飯塚 享(いいずか・とおる)
栃木県栃木市在住。鬼怒川水系、那珂川水系のフィールドをホームとし、シーズンを通じて北関東の谷を釣り巡っている。釣り場を開拓しながら、ブラインドの釣りをメインに楽しむ。

遠藤 岳雄(えんどう・たかお)
静岡県裾野市在住。マッチング・ザ・ハッチの釣りを得意としており、地元からも近い狩野川水系の釣りに詳しい。36ページでは狩野川水系の釣行レポートも掲載中。

加藤 俊寿(かとう・としずみ)
静岡県袋井市在住。南アルプス、中央アルプス周辺の渓に詳しく、解禁まもない時期からドライフライで各フィールドを探る。夏場は山岳渓流のヤマトイワナねらいが多くなる。

佐藤 渉(さとう・わたる)
青森県黒石市在住。北日本の小渓流や山岳渓流でドライフライの釣りを楽しむ。シーズン初期はニンフを使った釣りも得意としている。

ヒゲナガ(イブニング用)

使用時期:4~9月
使用シーン:イブニング時にウエットフライと組み合わせて、ドロッパーとして活用。
フロータント:リキッドタイプ+ドライシェイク・スプレー(全体をリキッドでドブ漬け後、ウイングのエアロドライウィングにのみスプレーを塗布)

フック●パートリッジYK12ST #8
スレッド●6/0各色
ボディー●フライライト・各色をブレンド
ハックル●コックネック・グリズリー
ウイング●CDC、ディアヘア、エアロドライウィング

Tied by
TAKAO ENDO

AQUATIC INSECTS
Fly Pattern

初夏からの時期に有効なメイフライ、カディスを中心とした水生昆虫のパターン23本をピックアップ。盛期でも繊細なパターンは厳選して持っておきたい。

CDCソラックスダン

使用時期：4～5月
使用シーン：マダラカゲロウやモンカゲロウといった大型のメイフライの時期、夕刻に結ぶ。
フロータント：リキッドタイプ（全体をドブ漬け）

フック●TMC100 #10～12
スレッド●8/0各色
テイル●ハックルファイバーなど
ウイング●CDCナチュラル　**ボディー**●スレッドなど
ハックル●コックネック・各色（下側をカット）

Tied by TAKAO ENDO

アンダーウイング・スペントカディス

使用時期：4～6月
使用シーン：ライズの釣り全般に。速い流れの中を水面に張り付くように使用すると効果的。
フロータント：リキッドタイプ（全体をドブ漬け）

フック●TMC112Y #11～15
スレッド●8/0各色
ボディー●フライライト・各色をブレンド
ハックル●コックネック・グリズリー
ウイング●CDCナチュラル、ホワイト

Tied by TAKAO ENDO

ディアヘア・カディス

使用時期：4～8月
使用シーン：里川や山岳渓流の釣り上りに使用。
フロータント：リキッドタイプ（全体をドブ漬け）

フック●TMC100 #10～14
スレッド●8/0各色
ボディー●コンドルクイル・レッド
ハックル●コックネック・各色
アンダーウイング●CDCナチュラル
オーバーウイング●ディアヘア

Tied by TAKAO ENDO

ディアヘア・カディス・ヒゲナガ

使用時期：5～7月
使用シーン：本流の強い流れを釣り上る時に使用。
フロータント：リキッドタイプ（全体をドブ漬け）

フック●パートリッジ YK12ST #8
スレッド●6/0各色
ボディー●フライライト・各色
アンダーウイング●CDCナチュラル
オーバーウイング●ディアヘア
ハックル●コックネック・グリズリー

Tied by TAKAO ENDO

コンドルクイル・パラシュート

使用時期：4～9月
使用シーン：一般的な渓流のヤマメねらい全般で使用するほか、少しだけスレたイワナにも使用。
フロータント：ペーストタイプ（全体に塗布）

フック●TMC531 #12～16
スレッド●各サイズ・タン
ポスト●エアロドライウィング・FLオレンジ
アブドメン●コンドルクイル
ハックル●コックネック・タン
ソラックス●スーパーファインダブ・各色

Tied by TOORU IIZUKA

カゲロウパラシュート

使用時期：4～7月
使用シーン：本流の荒瀬を釣り上る時に使用。
フロータント：ジェル＋ドライシェイク・スプレー（ポストの付け根にのみにジェルを塗布し、ハックルとポストにスプレーを塗布）

フック●TMC100 #10～12　**スレッド**●8/0各色
テイル●ハックルファイバー、バーサテイルなど
ポスト●エアロドライウィング・ホワイト
ボディー●フライライト・各色をブレンド
ハックル●コックネック・ジンジャー

Tied by TAKAO ENDO

ぱらっとCDC

使用時期：オールシーズン
使用シーン：かなり警戒していると思われるイワナ、ヤマメのライズに使用。
フロータント：リキッドタイプ（CDCウイングのみに塗布）

フック●TMC212Y #15～17
スレッド●各サイズ・ブラウン
ウイング●CDCナチュラル
アブドメン＆ソラックス●スーパーファインダブ・各色

Tied by TOORU IIZUKA

モンカゲスペント

使用時期：4～5月
使用シーン：モンカゲロウのスピナーフォール時に使用。
フロータント：リキッドタイプ（全体をドブ漬け）

フック●TMC100 #10～12
スレッド●8/0各色
テイル●ハックルファイバー、バーサテイルなど
インジケーター●CDCナチュラル
ボディー●フライライト・各色をブレンド
ウイング●フライライト・グレー

Tied by TAKAO ENDO

マダラ・ソラックス

使用時期：5～6月
使用シーン：主に山岳渓流で。アカマダラカゲロウなどのハッチに対応させるためのパターン。
フロータント：ドライシェイク・スプレー（全体に塗布）

フック●がまかつS12-1F #12
スレッド●8/0ブラウン
テイル●インドコック・ファイバー　**ウイング**●CDC
ボディー●スーパーファインダブ・オリーブブラウン
ハックル●コックネック・ゴールデンオリーブ

Tied by TOSHIZUMI KATO

ブレンドウイング・カディス

使用時期：5～9月
使用シーン：釣り上がりの場面で、スレ気味のヤマメにおすすめ。
フロータント：ペースト、もしくはリキッドタイプ（ウイング部分に塗布）

フック●TMC212Y #15～17
スレッド●各サイズ・タン
ボディー●スーパーファインダブ・各色
ハックル●コックネック・ブラウン系
ウイング●エアロドライウィング・タン、CDC（2つの素材をブレンド）

Tied by TOORU IIZUKA

ブルーダン・パラシュート

使用時期：5～7月
使用シーン：ダンをイミテートしたパイロットフライとして結ぶ頻度が高い1本。
フロータント：ジェルタイプ（ポスト、ハックルだけでなく全体に塗布）

フック●がまかつS12-1F #14
スレッド●8/0ラスティーダン　**ポスト**●フロートビズ・M.ダン
テイル●インドコック・ファイバー
ボディー●スーパーファインダブ・アダムスグレイ
ハックル●コックネック・ブルーダン

Tied by TOSHIZUMI KATO

EZカディス

使用時期：5～9月
使用シーン：水量が多く、フライの浮力が必要な渓でおすすめ。大量生産にも向き、汎用性も高い。
フロータント：ペーストタイプ（全体に塗布）

フック●TMC531 #12～16
スレッド●各サイズ・ブラック
ボディー●コンドルクイル
ハックル●コックネック・ブラック
ウイング●エアロドライウィング・タン、ブラウン

Tied by TOORU IIZUKA

CDCクイルダン

使用時期：6～9月
使用シーン：ライズを繰り返している魚に対して、何を投げても反応がない時の最終手段として活用。
フロータント：ドライシェイク・スプレー（全体に塗布）

フック●がまかつS12-1F #16
テイル●コックネック・ブラック（ファイバー）
ウイング●CDC　**ボディー**●ストリップド・ピーコックハール
ハックル●コックネック・ブラック

Tied by TOSHIZUMI KATO

エルクヘア・カディス

使用時期：5～9月
使用シーン：強い流れでも沈みにくく、視認性がよいので、特に山岳渓流などで、パイロットフライとして活用。
フロータント：ジェルタイプ（ウイング部分に塗布）

フック●がまかつS12-1F #14
スレッド●8/0ブラウン
ハックル●コックネック・ブラックなど
ボディー●ピーコックハール
ウイング●エルクヘア・ブリーチなど

Tied by TOSHIZUMI KATO

CDCカディス

使用時期：5～9月
使用シーン：ライズねらいに多用。特に小型のカディスに反応している時など。
フロータント：ドライシェイク・スプレー（全体に塗布）

フック●パリバスIWI S-2000 #16
ボディー●ストリップド・ピーコックハール
ウイング●CDC
ハックル●コックネック・ライトジンジャー

Tied by TOSHIZUMI KATO

ライトケイヒル

使用時期：5～9月
使用シーン：標高の低い山岳渓流で使用。釣り人が多く、パラシュートなどに反応が悪い河川で使用することが多い。ハックルの下側をカットしている。
フロータント：ドライシェイク・スプレー（視認性を高めるために全体に塗布）

フック●がまかつS12-1F #14
スレッド●8/0ジンジャー
テイル●インドコック・ファイバー
ウイング●レモンウッドダック
ボディー●スーパーファインダブ・レモンイエロー
ハックル●コックネック・ライトジンジャー

Tied by TOSHIZUMI KATO

CDCカディス

使用時期：6月下旬以降
使用シーン：淵やトロ瀬など緩い流れで使用する。
フロータント：リキッドタイプ（全体をドブ漬け）

フック●TMC212Yなど 各サイズ
スレッド●8/0ブラウン
ボディー●フェザントテイルなど
ウイング●CDC

Tied by WATARU SATO

CDCストーンフライ

使用時期：5〜6月
使用シーン：メイフライのハッチがなく、カワゲラを捕食していると考えられるような場合に結ぶ。
フロータント：ドライシェイク・スプレー（全体に塗布）

フック●がまかつS12-1F #16
リブ●コパーワイヤ
ボディー●フェザントテイル
ウイング●CDC
ハックル●コックネック・ブルーダン

Tied by TOSHIZUMI KATO

ディアヘア・カディス

使用時期：6月中旬以降
使用シーン：幅の広い渓流や、本流域の瀬で使用する。
フロータント：リキッドタイプ（全体をドブ漬け）

フック●バリバスIWI S-2000 各サイズ
スレッド●8/0ブラウン
ボディー●コンドルクイル
ハックル●コックネック・グリズリーダイドブラウン
アンダーウイング●CDC
オーバーウイング●ディアヘア・ナチュラル

Tied by WATARU SATO

フローティングピューパ

使用時期：5月
使用シーン：堰堤の下の溜まりや止水に近い流れで使用。
フロータント：ペーストタイプ（インジケーター、ハックルのみに塗布）

フック●がまかつC15-B 各サイズ
スレッド●8/0ブラウン
インジケーター●CDC
テイル●ハックル・ウエブなど
アブドメン●グースバイオット・イエローなど（ヘッドセメントなどでコーティング）
ハックル●コックネック・グリズリーダイドオリーブ
ソラックス●ピーコックアイ

Tied by WATARU SATO

TERRESTRIAL & OTHER *Fly Pattern*

6月以降の時期に各地での渓流で効果的にある陸生昆虫のイミテートパターン。ボリューミーなものから、半沈み系まで、実績の16本を紹介。

ブラックダン

使用時期：5月以降
使用シーン：堰堤の下の溜まりや止水に近い流れで使用。
フロータント：リキッドタイプ（全体をドブ漬け）

フック●がまかつC14-BV 各サイズ
スレッド●16/0ブラックなど
インジケーター●エアロドライウィング・FLオレンジ
テイル●ムースホックなど
ボディー●スレッド
ハックル●コックネック・ブラックやオリーブ（下側をカット）

Tied by WATARU SATO

コンドルクイル・パラシュート

使用時期：6〜9月
使用シーン：主に山岳渓流の釣り上りに使用。
フロータント：ドライシェイク・スプレー（ポストとハックルにのみ塗布）

フック●TMC212TR #9
スレッド●8/0各色
ポスト●エアロドライウィング・FLピンク
ボディー●コンドルクイル・グリーン
ハックル●コックネック・ブラック
ソラックス●ピーコックハール

Tied by TAKAO ENDO

ソラックスダン

使用時期：5月中旬以降
使用シーン：一般的な渓流全般。主に瀬や流れのあるポイントで使用。
フロータント：リキッドタイプ（全体をドブ漬け）

フック●がまかつR17-3FT 各サイズ
テイル●ムースホックなど
インジケーター●CDCイエロー
ボディー●スーパーファインダブ・ライトケイヒル
ハックル●コックネック・ゴールデンバジャー

Tied by WATARU SATO

グリフィスナット・インジケーター
使用時期：5～9月
使用シーン：主にプールのイワナねらいで使うが、視認性がよいので釣り上がりにもOK。
フロータント：ペーストタイプ（全体に塗布）
フック●TMC531 #12～16
スレッド●各サイズ・ブラック
インジケーター●エアロドライウィング・FLホワイト
ボディーハックル●グリズリー
ボディー●ピーコック
Tied by
TOORU IIZUKA

アントパラシュート
使用時期：6～9月
使用シーン：山岳渓流の釣り上りに使用。
フロータント：ドライシェイク・スプレー（ポストとハックルにのみ塗布）
フック●TMC100 #10～12
スレッド●8/0各色
ポスト●エアロドライウィング・FLピンク
ボディー●スレッドで成形後、EZフィニッシュ黒でコーティング
ハックル●コックネック・ブラック
ソラックス●ピーコックハール
Tied by
TAKAO ENDO

ラバーEZカディス
使用時期：5～9月
使用シーン：EZカディス同様、水量が多く、フライの浮力が必要な渓でおすすめ。対象魚はイワナがメイン。
フロータント：ペーストタイプ（全体に塗布）
フック●TMC531 #12～16
スレッド●各サイズ・ブラック
レッグ●ラバーレッグ
ボディー●ピーコック
ハックル●コックネック・ブラック
ウイング●エアロドライウィング・ブラック、ホワイト
Tied by
TOORU IIZUKA

ボテスペ
使用時期：4～9月
使用シーン：プールでのライズねらいに。特定のイミテートはないのだが、そのボリュームが意外にもスレたヤマメ、アマゴに効果的。
フロータント：リキッドタイプ（全体をドブ漬け）
フック●TMC112Y #15～#11
スレッド●8/0各色
ウイング●CDCナチュラル
ボディー●フライライト・各色をブレンド
Tied by
TAKAO ENDO

マシュマロスパイダー
使用時期：5～9月
使用シーン：フライの重量がありバックキャストがターンしやすいため、開けた渓での釣り上がりで重宝する。
フロータント：ペースト、もしくはリキッドタイプ（ウイング部分に塗布）
フック●TMC212Y #15～17　スレッド●各サイズ・レッド
ボディー●シールズファー・ブラック　レッグ●ラバーレッグ
ウイング●ホワイト、オリーブで作成したマシュマロウイング
Tied by
TOORU IIZUKA

ミラージュ・パラシュート
使用時期：5～9月
使用シーン：渇水や水量の少ない小渓流で、スレ気味の魚をねらうために結ぶ。
フロータント：ペーストタイプ（全体に塗布）
フック●TMC531　#12～16
スレッド●各サイズ・ブラック
ポスト●エアロドライウィング・FLオレンジ
アブドメン●ミラージュティンセル
ハックル●コックネック・ブラック
ソラックス●ピーコック
Tied by
TOORU IIZUKA

バグパラⅠ
使用時期：7～9月
使用シーン：標高の高い山岳渓流で、アントのイミテートとして結ぶパイロットフライ。
フロータント：ジェルタイプ（ハックルとウイングのみに塗布）
フック●TMC212Y #14
スレッド●8/0ブラック
ポスト●フロートビズ・レッド
アブドメン●コックハックル（ファイバー部をカットして使用）
ハックル●コックネック・ブラック
ソラックス●ピーコックハール
Tied by
TOSHIZUMI KATO

グリフィスナット
使用時期：5～9月
使用シーン：主にプールでライズしているイワナに効果的
フロータント：ペーストタイプ（全体に塗布）
フック●TMC531 #12～16
スレッド●各サイズ・ブラック
ボディーハックル●グリズリー
ボディー●ピーコック
Tied by
TOORU IIZUKA

左／木々が覆い被さった流れや雨後の渓では、こんな虫が捕食されていることも多い
右／夏場はビートル類も増えてくる。ボリュームのあるフライにこそ反応がある場面も少なくない

バグパラⅡ

使用時期：6〜8月
使用シーン：陸生昆虫が落下しやすい、上部が木々で覆われているような渓流で。インチワームなどをイミテート。
フロータント：ジェルタイプ（ハックルとウイングのみに塗布）

フック●TMC212Y #14
スレッド●8/0ブラウン
ポスト●フロートビズ・クリーム
リブ●コンドルクイル
ハックル●コックネック・オリーブブラウン
ボディー●ピーコックハール

Tied by
TOSHIZUMI KATO

ジャシッド

使用時期：6月上旬以降
使用シーン：初夏の時期から北東北の山岳渓流全般で使用する。
フロータント：リキッドタイプ（全体をドブ漬け）

フック●バリバスIWI S-2000 各サイズ
スレッド●8/0ブラウン
ボディー●ピーコックアイ
ウイング●ジャングルコック
ハックル●コックネック・クリーム など

Tied by
WATARU SATO

オドリバエ

使用時期：6〜8月
使用シーン：オドリバエを偏食している時に効果的な1本。
フロータント：ドライシェイク・スプレー（全体に塗布）

フック●TMC531 #16
ウイング●CDC
ボディー●スーパーファインダブ・ブラック、フロートビズ・ホワイト
ハックル●コックネック・ブラック

Tied by
TOSHIZUMI KATO

アント・スレッド

使用時期：6月中旬以降
使用シーン：ほとんどのポイントでオールラウンドに使用。
フロータント：リキッドタイプ（全体をドブ漬け）

フック●バリバスIWI T-2000 各サイズ
スレッド●8/0ブラック
インジケーター●エアロドライウィング・FLピンク
ボディー●スレッドなど（ヘッドセメントでコーティング）
ハックル●コックネック・ブラック（下側をV字にカット）

Tied by
WATARU SATO

ピーコックパラ

使用時期：5月中旬以降
使用シーン：魚がスレていない渓流であれば、ほとんどのポイントでオールラウンドに使用。
フロータント：ペーストタイプ（ポストとハックルのみに塗布）

フック●TMC212Y 各サイズ
スレッド●8/0ブラウン
ポスト●エアロドライウィング・FLピンク
テイル●ハックル・ウエブなど
リブ●グースバイオット・イエローなど
ボディー●ピーコックアイ
ハックル●コックネック・ブラウンやオリーブ

Tied by
WATARU SATO

アント・ピーコック

使用時期：6月中旬以降
使用シーン：ほとんどのポイントでオールラウンドに使える。
フロータント：リキッドタイプ（全体をドブ漬け）

フック●バリバスIWI T-2000 各サイズ
スレッド●8/0ブラック
インジケーター●エアロドライウィング・FLピンク
ボディー●ピーコックアイ、もしくはソード
ハックル●コックネック・ブラック（下側をV字にカット）

Tied by
WATARU SATO

ジャシッド・パラ

使用時期：6月上旬以降
使用シーン：初夏の時期から北東北の山岳渓流全般で使用する。
フロータント：リキッドタイプ（全体をドブ漬け）

フック●バリバスIWI S-2000 各サイズ
スレッド●8/0ブラウン
ポスト●エアロドライウィング・FLピンク
アブドメン●ピーコックアイ　ウイング●ジャングルコック
ソラックス●ピーコックソード　ハックル●コックネック・ブラック

Tied by
WATARU SATO

Epicの本拠地ワナカは、ニュージーランドの最高峰Mt.クックを擁するサザンアルプスに囲まれたロケーション。冬場はスノーバムたちで賑わうことからも分かるとおり、夏場でも水はジンクリアで豊富

アート感漂う風貌のこの男は、ロッドビルダーのトレヴァー。コーティング時の筆づかいは、絵描きのような繊細さ。プロダクションメーカーには真似のできない手間暇を常識とし、ギターも自作する職人気質の人

編集部=レポート
Reported by FlyFisher

南半球発、全世界へ「*Epic*」の名を冠する気概

カール・マクニールへのインタビュー

**epicを辞書で引いてみると、
「叙事詩」などというなにやら荘厳かつ壮大な意味が出てくる。
現存する叙事詩の多くは、かなりの大作ではあるが、
普遍的な人間の営みを描くという意味ではシンプルであり、
だからこそ年月を経ても色あせない。
NZで生まれたEpicのロッドとラインも、
やはり底流にあるのはごくシンプルな思想のようだ。
Epicの社長で、デザイナーでもあるカール・マクニールが言うように
「できるだけ魚を釣りたい」人のための道具を携えて、
魚との叙事詩をつむいでみたい。**

巨鱒相手の製品テストは、日常的かつ徹底的。弱点はただちに表面化され、そしてヤラれる

NZで生まれたロッド

編集部（以下**FF**）　マクニールさん、あなたが経営されているスイフト・フライフィッシングおよびエピックは、ものづくりと流通に関し、きわめてユニークなアプローチを採っていると思うのですが、まずは、なぜ、ニュージーランドでロッドメーカーを起業されようと思ったのか、そのあたりから教えてください。

カール・マクニール（以下**CM**）　そうか……うーん、じゃあシンプルバージョンでいきましょう。２つの要因が関係しています。私は、かつて大ロッドメーカーのプロスタッフとして働いていて、自分たちで作る映像やDVDでもフィーチャーしてきました。ムービーを見た人たちから一番多く寄せられる質問は「どのメーカーの、なんというモデルを使っているんですか？」。同じロッドを買うと、同じようなパフォーマンスができると思い込んでしまっている人が多いんです。カメラの世界とかもまったく同じ。

FF　そうですね。道具よりも技術なんですけどね。

CM　私たちは、外国のメーカーのためにとても多数のロッドを販売していたことになります。そこに起業チャンスがあった。

FF　フライキャスティング・インストラクターとしても、現代的なフライロッドのトレンドに関してなにか表現したいことがあったのでは？

CM　まさにそのとおりで、クラスを開催していると超スティッフでファーストアクションなロッドを持ってくる生徒さんが後を絶ちません。でも硬すぎてうまく投げられないケースが大部分なんです。

FF　普遍的な現象だと思いますよ。

CM　メジャーメーカーを見渡してみると、唯一の例外がウインストンかもしれませんね。いずれにせよ、硬すぎないロッドをちゃんと売りたいと思いました。そして第3の理由は、きわめてパーソナル。あたりまえのことだけれど、私はできるだけ魚を釣りたいと願っています。そして、少なくともフライフィッシングにおいてはプレゼンテーションこそすべてでしょう？　フライパターンよりも飛距離よりも、よい形でフライを魚に見せることが一番大事。

FF　トム・モーガンが生涯をかけて伝えてきたシンプルで変わらない事実ですね。

グラスのポテンシャル

CM　ニュージーランドは、9フィート6番というフライロッドが圧倒的に人気なんです。魚は大きいし、釣り場も概して広いから。でも、繊細なメイフライやミッジを吸い込んでいる魚を相手にする道具としては繊細さに欠けてしまいます。だから気難しい魚を釣り始めた時から、私はどんどんタックルのフィネス化を進めていき、4番をメインに使うようになってきました。ロッドのパワーは、ファイト中は問題ありません。しかしランディング寸前の、大きく負担がかかる瞬間に耐えられず、ロッドを折るようになってしまいました。カーボン

ロッドはもろいです。

FF　だったら、グラスかバンブーになりますね。

CM　ケーンロッドを使うお金の余裕はなかったんですよ！　だから、まずネットオークションで昔のグラスロッドを買い集めてみました。本当のことをいうと、初めて所有したのも日本製のグラスロッドでしたよ。オークションではビンテージ・フェンウィックを入手して使ってみたんですが、いっさい折れなかった。ただし軟らかいし、今の基準からいえばキャスティングが必ずしも簡単だとはいえません。そんな時に、米国キャメロン・モーテンセンのウエブサイト『ファイバーグラス・マニフェスト』が立ち上がり、全般的に注目度も上がってきたんです。

FF　グラスが現実的な選択肢になってきましたね。

CM　偶然、ニュージーランドのオークランドにロッド工場があることを知り、そこでSグラスを使ってブランクを作ってくれるということでした。試作品は7フィート6インチの4番にしたんですが、思っていたよりもはるかによくできました。ゆですぎたパスタみたいな感じはまったくなくて、でもきれいに曲がって、強度が高い。たぶん僕たちの会社こそ、高品質のグラスロッドをリバイバルさせたと思います。「どんな用途にも最高の素材」とは思いませんけど、ハマればすばらしいロッドができると考えています。12番のターポンロッドもありますよ。グラスのタフさが活きる用途です。

FF　ニュージーランドで4番からスタートというのが、とっても新世代だと思いますよ。でも今の釣りを考えれば納得できますね。

CM　4番ロッドのパワーがあれば、とても大きなマスを取り込むことができますからね。アクションに無理がないから細いティペットを使えますし。スパルタンなアクションではないですから、キャスターにもやさしいですよ。キングフィッシュ（ヒラマサ）を釣っているアングラーに話を聞くと、グラスロッドは絶対的なリフティングパワーはカーボンにかなわないんだけれど、

ロッド同様に、フライラインもEpicの「らしさ」が感じられる。その質感や浮き方は独特ながら、奇をてらうことのない適切なデザイン

Epicのグラスラインは WF が2機種、DT が4機種。時代に逆行しているようなラインナップだが、プレゼンテーションこそがすべてと言い切る思想を反映させれば必然

なぜか魚を浮かせやすい、疲れさせやすいっていいます。たぶんずっと曲がり続けていて、コンスタントなプレッシャーを掛け続けられるからかな？　この前も、カーボンとグラスを使い比べてみたけれど、やっぱりグラスのほうが早く浮かせられるということでしたよ。

FF　オン／オフではなく、常にオンになっていて魚のエネルギーを吸い取っていく感じですかね。竹ザオでも似たようなことはある気がします。グラスは魚のファイトだけでなく、いろんな外的要因にもよく耐えますよね。

美しい弧を描くEpicのロッド。適切にデザインされたグラスロッドはここからが本領発揮。つながりのよい、スムースなアクションを与えられたEpicのロッドは、マスが掛かった後のベンディングカーブが美しいのも特徴

CM　天井で回っている扇風機、踏みつける足、落ちてくる石、川で転ぶ……（笑）。たぶんカーボンファイバーであれば、製品のうち10％から15％は製品寿命中に修理で返ってくると思うんですが、私たちの体験ではグラスは5％以下。たぶん3％かな。ニュージーランド製にこだわりたかったので、チープなロッドは作れないです。それに、大メーカーと競争できる資金力も販売ネットワークもない。だけれど、最高のフライロッドを少しだけ作ることはできそうだったんです。

FF　なるほど。どのメーカーよりも原価が高いって宣言していますね。

CM　自慢にならないのかもしれないけど。

ロッドにマッチするライン

FF　フライラインを販売するっていうのも、オリジナルのロッドを製造するという理論の延長線上にあったわけですか？

CM　フライロッドを買ったあとは、当然「どのラインと組み合わせて使おうか？」と思いますからね。ブランクとロッドの発売を始めたら、膨大な数のその手の質問が入ってくるようになりました。でも、今市場にはとんでもない数のラインが出ていますから、「アレはだめ？」、「これはどうですか？」って聞かれるんです。結局、私たちがデザインしたとおりのパフォーマンスをロッドに発揮するフライラインを販売するのがいちばん手っ取り早いというわけです。

FF　そこで、サイエンティフィック・アングラーズに問い合わせたということですね。

CM　ずっと前からSA製品のファンですし、ブルース・リチャーズは師匠であり親友ですから。ブルースがSAから引退するって聞いた時、コンサルタントとして雇用するからフライラインを2種類デザインしてくれないかっていったんですよ。そしたら、お金はいらないからロッドをくれと。だから、エピックのフライラインはリチャーズのオリジナルデザインで、既存の定番ラインとは違いますし、彼も「自信作だ」と言ってくれています。

FF　他の製品とどう違うんですか？

CM　まず全長を短くしたこと。実際にキャストするのはせいぜい12mで、傷んだら先端からカットして使えるわけではないから、30mのフライラインはいらないでしょう。24mにしました。ダブルテーパーは定番品を調整したくらいですが、ウエイトフォワードはそうとうユニークです。

FF　どういう面で？

CM　私はついこの前まで、フライラインの設計はスケールアップやダウンが可能だと思っていました。5番ラインの基本設計があれば、それを全体的に軽くしてやれば4番になって、均等に重くすれば6番になるだろうと。でも実際はぜんぜん違うらしいんです。少なくとも、現場を想定するならばそうならざるを得ない。たとえば4番は繊細なプレゼンテーションをしたいですからフロントテーパーは長くなる。でも6番は、重いニンフなんかを投げたいこともあるでしょうから、フロントテーパーはアグレッシブにせざるを得ないのです。結果として、ヘッド全体はライトラインのほう

フライフィッシングのメッカでガイド業を営むプロフェッショナルなど、Epicの顧客にはコアな客層が多い。彼等は機能する道具がどのような物なのかをよく知っている

が長くなっています。ニュージーランドで使うオールパーパス・ラインとしては、当然の味付けだとは思いますね。

FF へえ！

CM AFTMA規格、つまり先端30フィートの重量規定をきっちりと守るようにしました。エピックのフライロッドは、ファーストすぎずぐにゃぐにゃでもない、良質な中庸を求めていますから、フライラインもど真ん中ストライクでいきたいんです。当社のフライラインを組み合わせない場合は、スタンダードな製品、つまり0・5番ぶん重くなっているようなラインは乗せないほうがよいです。あるメーカーの5番ロッドは、他のメーカーの表示では7番相当である、というのが実際に起っており、そんなことであればいっそのこと、かつての時代のフライロッドのようにライン番手表記などなくしてしまえばいい気もするのですが……少なくとも当社製品に関しては、ロッドとラインのマッチングで悩む必要がまったくありません。「あなたのところのロッドは、パワフルではないね」と言われることもあるのですが、私はそうは思いません。かつて打ち立てられた軸をちゃんと踏まえているから、その硬さ設定になっているのです。

FF ロッドメーカーもフライラインメーカーも、両方が基準の軸をずらし始めると、混乱が生じてしまいますからね（笑）。

CM エピックのフライライン、お客様からの反応はとてもよくて、「これはすばらしいデザインのフライラインだね！」と言っていただくことも多くなってきました。実際のところ、たしかにブルースがデザインを工夫してくれてはいますが、当社のラインは「適切なライン」と言っていただくほうが当たっています。

FF 表面処理はどうですか？

CM スムーズです。ディンプルやテクスチャーは入れていません。

FF ループはどうしていますか？

CM 興味深いディスカッションがありました。私個人としては、トラウト用ラインにループの入ってくる余地はまったくないと思っています。バッキングとつなぐところにはあったら便利かな？　ブログでもウエブサイトでも、私たちはキャンペーンをやりました。フライラインの設計において、いかにスムーズに質量を減らしていくかというのはデリケートさを達成する大テーマなのに、その先端にこんな不細工なオモリを付けるという発想はいったいなんだ？ということですね。本当に、フロントループの重さはバカにできません。

FF 本当にそうですね。

CM そうしたら、お客様から苦情の嵐でした（笑）。ですから、今では3番以外はフロントループを付けています。切って捨ててください！　でも、ループを付けるのに、原価で2ドルくらいかかるんですよ……。

FF ははは！

CM スペックは先端部にレーザー刻印されていますから、リールから抜いても何だか分からなくなるってことはないです。なぜすべてのラインメーカーがこれをやらないか、ナゾですね。

日本の3番ラインは日本カスタムも定番に

FF 3番ラインは日本カスタムなんですか？

CM はい、もともとはC&Fデザインのカスタムでしたが、今では定番商品にしました。同社とは、ロッドのカスタム仕様設定も共同で行なっています。よいセンスをお持ちですよ。

FF カラーチョイスは？　かなり派手ですが……。

CM ウエイトフォワードがオプティックグリーン、ダブルテーパーがペールイエロー。いずれもSAの伝統あるカラーですね。地味な色は大嫌いです。

FF ニュージーランドの人は、地味な色のラインしか使わないんじゃなかったです？

CM 一部のガイドだけですよ……カモフラージュカラーのラインなんて使えません。空中のループは見えないし、どこにフライがあるか手がかりにもならない。小さいフライを使う繊細な釣りには、もう全然ダメ。フライラインは、それ自体がいろんなもののインジケーターなんです。その性能をあえて放棄するなんて信じられません。

FF 魚をスプークさせるのは空中を横切るラインの影とか、頭上にモロに落ちるラインの衝撃とかですからね……カラーはまず関係ないし、魚がフライラインの影響でスプークするとしたら、釣り方が間違っているんです。

CM 長いリーダーを使っている意味も、ひとつにはラインとフライの距離をとることもありますからね。カラーに関してはブルースも誤解していて、「カーキグリーンかブラウンか、どっちがいい？」って聞かれましたよ。「いやいや、定番の派手なカラーで頼みます」って言ったら驚いていた。30年にもわたって明るい色のラインの優位性をずっと説き続けているんですけどね……。

彼らはグラファイトロッドも製作している。グラス至上主義ではなく、用途に合わせて最適な素材を選んでデザインする

6／1 洞爺湖（とうや） 解禁！

高まるモンスターレインボーの期待

**「70㎝オーバーが釣れている」
そんな情報を得て出掛け、
まさにそのヒットシーンに出会えた。
6月1日に解禁を迎える洞爺湖で、
大型ニジマスの期待が高まっている。**

西井堅二＝文・写真
Text & Photography by Kenji Nishii

左／解禁最終日の今年3月31日、洞爺湖でキャッチされたニジマス。70㎝を超えていた。同月には70㎝オーバーが4～5尾もあがっている

大ものラッシュの3月

6月1日、北海道、虻田郡洞爺湖町と有珠郡壮瞥町にまたがるカルデラ湖、洞爺湖が解禁日を迎える。近年、1尾に出会うのは容易ではないと語られることが多いが、洞爺湖フリークの間では今、大型魚の期待が高まっている。

解禁期間は、6月1日から8月31日の夏期3ヵ月間と、12月1日から3月31日の冬期4ヵ月間。6月の解禁を占う直近の冬期シーズン、数こそふるわなかったものの、終盤の3月、ちょっとした大ものラッシュに沸いた。3月に入り、70㎝オーバーのニジマスが3～4尾、たて続けにキャッチされたという。

ニジマスの70オーバーは、北海道でも間違いなくモンスタークラス。1尾でも充分刺激的な情報といえる。それが短期間に複数となれば、にわかには信じがたいほどのレベル。だが、「それもありうる」と思えてしまうのが、洞爺湖の魅力でもある。

この情報を得て、解禁最終日の3月31日、湖畔に向かった。すると、まさに情報が確かなものであることを証明してくれる、刺激的なシーンに出会えた。

洞爺湖全景。湖の中央付近に中島が浮かぶ

大型魚の夢を追う

洞爺湖は北海道南西部、支笏洞爺国立公園内にたたずむ。周辺には、2000年に噴火した有珠山、昭和新山、洞爺湖温泉などがあり、道内有数の観光地でもある。2008年には『G8北海道洞爺湖サミット』が開かれ、2009年、『洞爺湖有珠山ジオパーク』が世界ジオパークに登録されている。国内のカルデラ湖では、北海道弟子屈町の屈斜路湖、千歳市の支笏湖に次ぐ3番目の面積を誇る。周囲約50㎞で、ほぼ中央に中島が浮かぶ。

釣りのフィールドとしては、一般には古くからヒメマスの湖として知られている。ウエーディングでねらうフライフィッシングのメインターゲットは、湖沼型サクラマスとニジマス。漁業権が設定され、洞爺湖漁業協同組合が管理を担う。放流の主体はヒメマスとサクラマス。湖水の透明度が高く、数よりも大型魚の夢を追うフィールドと認識されている。

どちらかというと、釣り人の注目を集めるのは冬。厳寒期も結氷しない不凍湖として知られ、多くのフィールドが雪と氷に閉ざされてしまうなか、貴重なフィールドとして親しまれている。さわやかな新緑のなかで楽しめる夏期も大勢の釣り人を集めるが、水温上昇のため、冬期より好シーズンが短いのがネックとされている。

事前情報どおり!?

当日の天候は晴れ。北西の穏やかな風が湖面をほどよく波立たせていた。ルアーアングラーならもう少し風がほしい……と感じたかもしれないが、フライフィッシャーには適度といえる好条件だった。

人気ポイントの仲洞爺キャンプ場に、釣り人の姿は入れ替わりで4人ほど。結局、この日目にできたヒットシーンは1度だけだった。それがなんと、事前の情報にたがわぬ、迫力満点のモンスターだった。幸運を引き寄せたのは、室蘭市の吉岡英明さん。

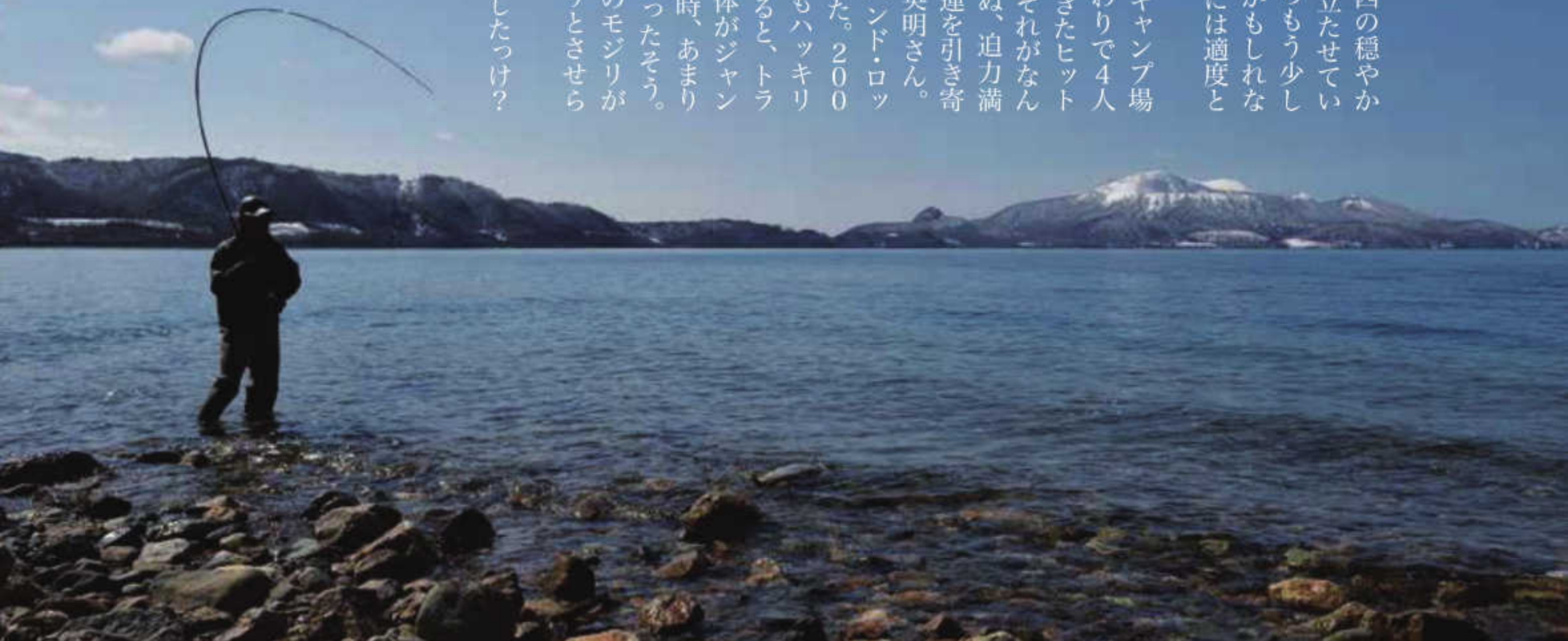
午前10時過ぎ、ダブルハンド・ロッドがバットから絞り込まれた。200mほど離れた場所からでもハッキリと分かった。すぐに駆け寄ると、トラウトらしからぬ極太の魚体がジャンプを2回。吉岡さんはこの時、あまりの太さに「コイか?」と思ったそう。たしかに洞爺湖ではコイのモジリが見られ、ライズかとドキリとさせられる。しかし……。

「コイってあんなジャンプしたっけ? 何だ何だ?」

そんな想像が、少し心に余裕をもたせてくれたのかもしれない。ファイトの中盤、その主はジリジリとラインを引き出し、一進一退の綱引き状態になった。しかし、吉岡さんはあせらなかった。この時、かつて釣った「80㎝のイトウより重い」と感じていたそう。

それでも、7分ほどのやり取りを経て、なんとかシャローに誘導。

「デカイ!」

釣り人なら誰もがそう声を上げるだろう魚体が、ゆっくり横たわり、早春の日差しを浴びて輝いた。素晴らしいコンディションでサイズ以上に見えた。ニジマス、72㎝。

約7分のファイトを経て、姿を現わしたニジマス。水深があるポイントで、最初に2回ジャンプした後、なかなか浮いてこなかった。吉岡さんは終始落ち着いていた

キーワードはカケアガリ

吉岡さんのタックルは、ロッドは15フィート、8/9番。ラインはスカンジナビアン系、インターミディエイトの585グレイン。10フィート、タイ

右/洞爺湖の定番ベイトはワカサギ。まずはこれを模したストリーマーが必携
左/6月はエゾハルゼミのシーズン。かつてはあまり意識されていなかったが、2〜3年前からセミパターンの釣りが語られている。要注目

洞爺湖のワカサギは年によってサイズに違いがある。それに合わせるため、ウイングをラビットスキンにしたパターン。長めにしておけば現地で調整できて便利

Variation
キールゾンカー

フック……ストリーマーフック各種 #4
スレッド……ブラック6/0
ウエイト……レッドワイヤ
ボディー……マイラーチューブ・シルバー、熱収縮チューブ
ウイング……ラビットスキン・オリーブ、マラブー・オリーブ&ブラック
アイ……ジャングルコックアイ

ワカサギを意識したストリーマー。洞爺湖はもちろん、道北のイトウねらいでも使用する。耐久性アップのため、マイラーチューブを熱収縮チューブで覆っている

Hit Fly
キールストリーマー

フック……ストリーマーフック各種 #4
スレッド……ブラック6/0
ウエイト……レッドワイヤ
ボディー……マイラーチューブ・シルバー、熱収縮チューブ
ウイング……ポーラーベア・ナチュラル、マラブー・ブラック&オリーブ
アイ……エポキシアイ5㎜

プ6クラスのティップを接続。シューティングラインはモノフィラ30ポンド、リーダーは1X、9フィート。重めのティップで速やかに沈め、カケアガリ付近を中心にねらう。キャスト位置は真っ直ぐ沖ではなく、可能な限りカケアガリに対して平行に近くなるように、岸に対して斜めに。カケアガリをトレースするイメージでキャスト&リトリーブを繰り返した。スタートは遅め。湖畔に立ち、キャストを始めたのは午前9時。ヒットは1時間後だった。

洞爺湖は20～30年前まで通っていたが、その後、しばらくご無沙汰していた。60歳を過ぎ、2～3年前にスペイキャストを始め、練習のため再び訪れるようになった。たまに小型魚が釣れたのみで、釣果はさほど期待していなかった。そんななかでの、本人も驚きのラッキーな1尾だった。

ちなみに、洞爺湖では近年まで長く、ニジマスの放流はほとんど行なわれていなかった。ところが2013年の漁業権免許切り替えのタイミングで、2012年から3年間だけ、放流が復活していた。今春釣れた70cm台は、成長したそれらだと考えられる。初年度の放流から5年を経て、70cm台にまで育っていた。6月の解禁時にも姿を見せてくれるか？　その期待が高まっている。

上／6月1日、解禁日の光景。新緑が鮮やかですがすがしい　下／一昨年の解禁日、#6のスティミュレーターにヒットしたニジマス。6月はドライという手もある

ドライフライも要注目

洞爺湖の釣りはワカサギがキーワードと考えられている。ニジマスは多くなく、サクラマスがメインのためか、ライズが見られることは少ないと語られてきた。ところが、前述のとおり短期間ながらニジマスが放流された影響か、近年、ライズに関する情報が増えている。エゾハルゼミやモンカゲロウの姿が見られる6月の解禁時は、そのパターンの釣りが楽しめる可能性がある。実際、昨シーズンはルアーアングラーの間で、シケーダの効果が語られていた。ドライフライの釣りをするフライフィッシャーは少なく、効果は未知数ながら、釣行の際にはその準備もしておくとよいだろう。

決して簡単ではないが、大型魚の夢は今も健在。支笏湖との二本立てで楽しむこともできる。70cmオーバーの期待が高まる今夏、どんな表情をみせてくれるだろう。

ズシリと重い手応え。
サイズ以上に大きく見えた

Guide

洞爺湖遊漁規則（陸釣）

● **遊漁期間**：6月1日～8月31日、12月1日～3月31日
● **遊漁時間**：4～19時
● **遊漁料**：日券1,200円、年券2万円
● **問合先**：洞爺湖漁業協同組合（☎0142･66･2312）、洞爺湖町産業課（☎0142･74･3005）

『アスキス』&『トリプルデンシティー』

名手が求めた、日本の本流スペック

本流フライフィッシャーである安田龍司さんは、
メーカー数社の商品開発に携わる。
近年具現化したダブルハンド・ロッド&ラインは、
日本の本流が求めるスペックにこだわった、
本流フリーク必見のアイテムといえる。
今回はそのコンセプトとマッチングについてうかがった。

西井堅二=文・写真
Text & Photography by Kenji Nishii

〝ジャパニーズスペック〟のダブルハンド

本流の名手で、福井県・九頭竜川のサクラマス保全のために活動する市民グループ『サクラマス レストレーション』代表という顔ももつ安田龍司さんは、数々のタックル開発に携わる。その成果である、このほどシマノ社がリリースしたダブルハンド・ロッド『アスキス』、ティムコ社のSA『STS-Rトリプルデンシティー』は、本流フリーク必見のアイテムとして注目され、すでに各地のフィールドで好評を博している。その開発コンセプトと、最新のシステム事情について、安田さんにうかがった。

アスキスは当初、まずは軽さが話題を呼んだ。それはきっと誰もが歓迎するところだろうが、安田さんはむしろ、それを成し得た最新技術がもたらす、そのほかのメリットを強調する。

『アスキス』のブランクには、多くの最新技術が盛り込まれている。縦繊維の内外層を斜めの繊維で巻く3層構造の『スパイラルX』。これにより、重量を増すことなく、ねじれやつぶれ剛性を向上。さらに、カーボン繊維の密度を高め、そのすき間を埋める樹脂を削減するなどの技術を投入し、軽さとパワーを両立する性能向上を追求している。

約2年のフィールドテストの最中、あえてパワーを落とすというリクエストをしている。これは、設定飛距離を大幅に上回る能力を備えていたため。かつてなら、飛距離を追求し、よく飛ぶロッドが注目された。そのころのことを思えば隔世の感がある。キャスタビリティーの余力を、ドリフト時の操作性、フッキング性能、ヒット後のファイトなどの快適さにふり、「より楽しいと感じられるトータルな性能」を重視したという。その結果、「思い切って曲がりやすくしました」とのこと。それでも遠投能力は大幅に向上している。

フィールドテストは本州各地のほか北海道でも行なった。昨夏、十勝でのヒットシーン

よく曲がること。かつてならそれは、反発力の低下を招き、飛ばなくなる、感度が落ちる……と考えられていた。しかし、それをクリアしているのがこのロッドの真骨頂。よく曲がる一方で、高い反発力を秘める。曲がりの大きさで飛距離が落ちることはなく、むしろ、多くのメリットを獲得している。さらに、高感度が求められるアユザオなどの技術を取り入れ、フライロッドとしては画期的な感度も備えた。

近年、オーバーヘッド、スペイ系とも、実釣用のラインは短くなってきている。スペイ系の場合、ラインが短くなると、アンカー切れが起こりやすくなる。これを防ぐ手段として、ロッドを短くするという手がある。しかしそれでは飛距離が落ちてしまう。その点曲がりやすい『アスキス』は、トップガイドが低い位置まで下りてくることで、短めのロッドを使っているのと似た状態になるとか。これにより、アンカー切れを起こすことなく、高い反発力で力強くラインを運ぶことができるのだ。

オーバーヘッドでは、ラインが短くなると、わずかなタイミングのズレがオーバーターンを招き、ラインが下がり、さまざまなトラブルが起こりやすくなってしまう。『アスキス』はこれを、〝よく曲がる高感度〟でクリア。ロッドを曲げやすく、バックキャストでラインが伸びきる時、ロッドが

約2年のフィールドテストを経て完成したシマノ『アスキス』。日本の本流のための4モデルをラインナップ

後ろに引かれる感覚がよく伝わる。これにより、フォワードキャストへの移行のタイミングが分かりやすい。オーバーヘッドでは、バックキャスト時の動作とラインスピードを遅くするのがコツ。

フィールドテストは、本州は九頭竜川、魚野川、犀川など、北海道は湧別川、渚滑川、忠類川、尻別川、十勝川などで行なった。そのうえで、12フィート6インチと13フィート6インチの6番、14フィートと15フィートの8番をラインナップ。乗せられるラインのキャパシティーの広さから、4モデルに絞った。このラインナップで、340〜550グレインをもれなくカバー。安田さんが考える、日本のフィールド事情に合わせた4本といえる。

イメージを広げるシューティングヘッド

安田さんが得意とするのは、主に短めのシューティングヘッド（SA『シューシングテーパーショート（STS）』）による、オーバーヘッドをメインとしたスタイル。以前のSTSはカットによる長さの微調整が必要だったが、現在はSA『シューティングテーパーショートRタイプ（STS-R）』にリニューアルされ、そのまま使えるようになった。同時に、やや後方重心に改良され、スペイ系のキャスティング性能も向上している。この『STS-R』に今期、画期的なニューモデルが加わった。

十勝川本流のニジマス。体高があるシルバーメタリックは抜群によく引く

昨夏、十勝川本流などを案内してくれた宮本修一さん（右）。フィッシングガイドも行なう『カルシの森』の代表。新得町在住。http://karus.jp

北海道のニジマスねらいでは、ピーコック系のパターンを多用した

『STS-Rトリプルデンシティー』は、その進化形。3種類のシンクレートを一体化し、ドリフト時の安定したライン形状を実現している。異なるシンクレートをつなげると、ループの展開に違和感が出やすい。この課題をテーパーデザインなどによりクリア。ボディー部を短くしつつ、重心は前寄りにおくことで、ナチュラルなドリフトやスローなスイングを可能にしている。そのコンセプトが理解され、すでに本流フリークの間で人気を集めている。

トリプルデンシティーの着想はさまざまな理由による。あえてひとつ、サブ的な要素を挙げておくと、次のような声への応えでもある。「フルシンクはどこを流れているのかイメージしづらく、慣れないと、自分がやっていることが正しいのかどうか、よく分からない……」。もしそう感じているなら、このラインはそ

上／手前側の2本がSA『STS-Rトリプルデンシティー』。3種のシンクレートを一体化したSTS-Rの進化形。STS-Rのシンクレートは4種。タイプ7はひとつ上のウエイトも持ち歩く
左／安田さんは、シューティングヘッドはすべて両端のループをカットし、スイベルを付けている。ヨレが軽減でき、ライン＆リーダーの交換が容易になる

のハードルを下げてくれるはず。

『STS-R』の場合、使用頻度は、フルシンクが6割、トリプルデンシティーが4割といったところ。これは、しっかり沈めるには、やはりフルシンクが有利と感じる場面があるため。しかし、「初心者にはまず、イメージがつかみやすいトリプルデンシティーがおすすめです」と安田さんは話す。タックルの進化により、本流ダブルハンド・ロッドの釣りは、かつてより入門しやすくなってきている。

経験に裏打ちされたラインシステム

参考に『アスキス』4モデルとラインのマッチングを別表のとおりに示してみた。なお、フルシンクの『STS-R』は、ヘッドの前後をひっくり返して使うのもアリ。オーバーヘッドとスペイ系の両方を行なうならノーマルのセッティング。オーバーヘッドがメインで、ナチュラルに近いドリフトで釣るなら、前後を入れ替えるリバースがおすすめ。スペイではやや投げづらくなるが、ヘッドの重心が前よりになり、流れに食いつき、横滑りが軽減され、ねらった筋をトレースしやすくなる。ニジマスねらいではリバースで使うことが多い。

ラインの両端にはループが付いているが、安田さんはあえて、独自に加工し、すべてのラインの両端にスイベルを付けている。これはヨレを軽減でき、リーダーやラインの交換が容易になるため。

●リーダーシステム

リーダーについては、SA『シューティングテーパー九頭竜スペシャル』

安定したキャスティングは、ていねいなライン処理ができていてこそ

『アスキス』4モデルとラインのマッチング

ロッド	ライン
J1266(12'6" #6)	STS-R(350〜400グレイン) STS-Rトリプルデンシティー(340グレイン) 九頭竜スペシャル(340グレイン)
J1366(13'6" #6)	STS-R(350〜450グレイン) STS-Rトリプルデンシティー(340〜400グレイン) 九頭竜スペシャル(340〜400グレイン)
J1408(14' #8)	STS-R(400〜500グレイン) STS-Rトリプルデンシティー(400〜460グレイン) 九頭竜スペシャル(400〜460グレイン)
J1508(15' #8)	STS-R(450〜550グレイン) STS-Rトリプルデンシティー(460グレイン) 九頭竜スペシャル(460グレイン)

1回のバックキャストから放たれたラインは、力強い直線を描く。構えたカメラの画角をあっさり超えていく

の場合、ティムコ『サーモンリーダー・シンキング』02～2Xの16フィート、またはフジノライン『本流サクラマススペシャル』02～2Xの15フィート。それぞれ、01～3Xのティペットを4～8フィート接続し、全長は18～24フィート。

『STS-R』の場合、ティムコ『フロロリーダーハイエナジーI』02～2Xの9フィート。必要に応じてティペットを足す、またはバット側を詰め、全長は7～15フィートに設定する。基本的には、シンクレートが高いほど短めにする。『トリプルデンシティー』の場合は、長くても12フィートまで。

●ランニングライン

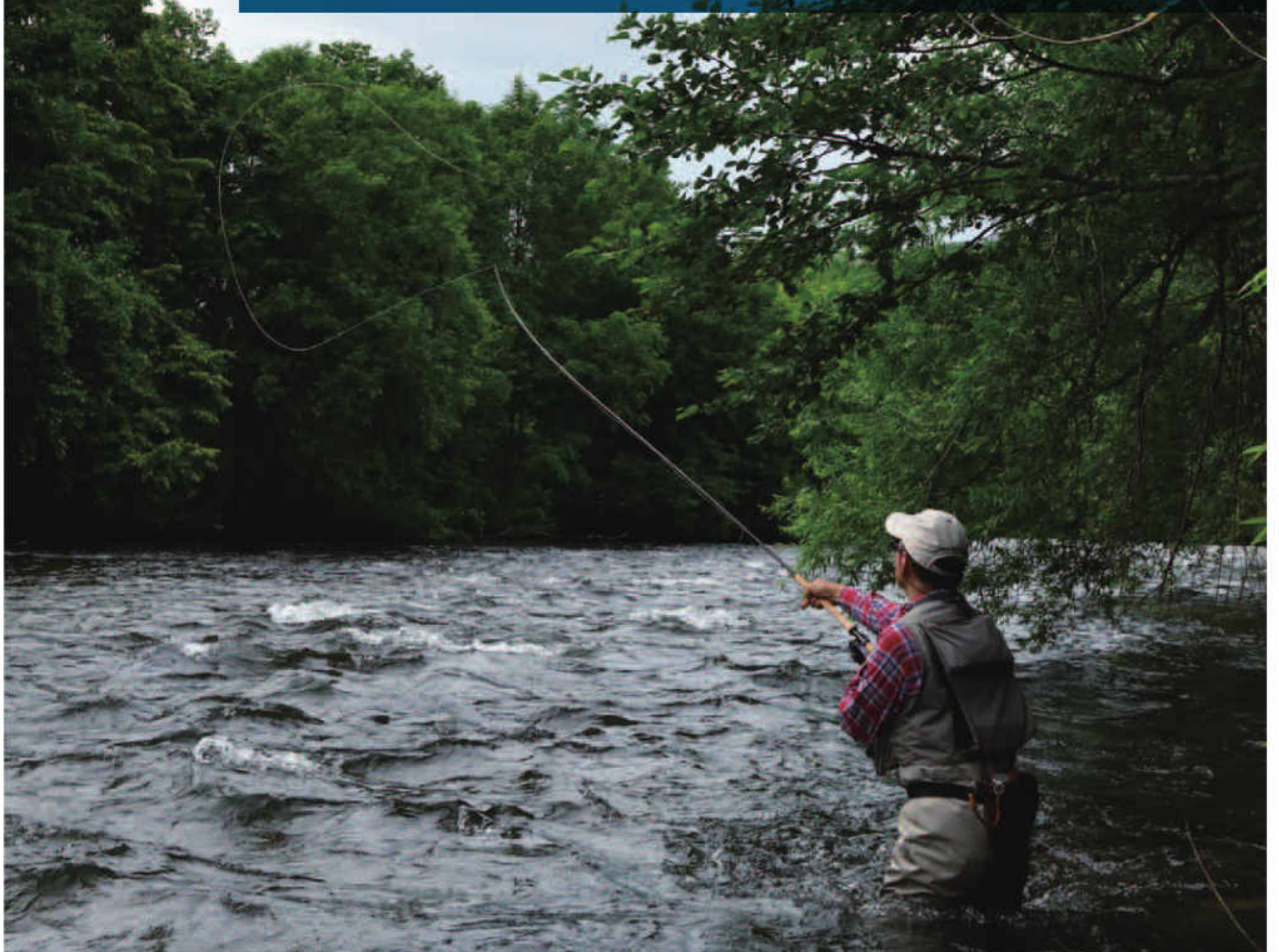
ランニングラインの使い分けも非常に重要。使用しているのは、磯釣り用ラインのシマノ『BB-Xハイパーリペルαナイロンフロート』の8号と10号、SA『フローティングモノコアシューティングライン25ポンド（025）』の3種。フルシンクで遠投する場合はナイロン。メンディングの必要性の有無で、あまりなければ8号、あれば10号。フローティングラインの場合はモノコアを選ぶことが多い。

現在のシステムは感度が非常に良好で、従来感知できなかったアタリも分かるようになった。すべてをヒットに持ち込めるわけではないが、たとえ掛けられなかったとしても、反応を感知していれば次の一手が打てる。アタリに気づかなければ、そのままスルーしてしまう可能性が高い。この差は大きい。

フックはすべてバーブレスにしているが、アスキスのテストに入って以降、バラシが大幅に減った。さらに、バーブレスと高感度の相乗効果なのか、ショートバイトをフッキングに持ち込める確率が上がった。

「投げるところからランディングまで、トータルにコーディネートしているので、楽しい釣りができると思います」

感度がよく柔軟な現在のシステムは、魚との出会いの可能性を広げてくれる。なおかつ、ファイト時に魚を暴れさせず、スムーズなランディングが可能で、魚にも優しいのも大きなメリットである。

オフショルダーのシューティングロールで。SA『STS-R』で、どんなポイントでもためらいなくキャストを繰り返す姿が印象的だった

ああでもない、
こうでもない……。

頼れる毛鉤が生まれるまで

Vol.08

《Profile》
しぶや・なおと
1971年生まれ。秋田県湯沢市在住。地元の伝統工芸である漆塗りの職人として生活しながら、自ら作り上げたバンブーロッドでヤマメを追い求めている。

CDCカディス

フック:TMC112Y　#11〜19
ボディー:スーパーファインダブ・グレー
ハックル:コックネック・ミディアムダン
ウイング:CDC・スポッテッドダン

羽虫のほとんどをカバーしてくれる万能パターン。巻きやすく投射性能にも優れる。きわどいポイントでも安心して投げられるフライだ。吸い込むような捕食が多いイワナがガバッと出てくれ、巻き返しやボサ下のポイントでも効果的

カディス

ドライフライで魚が釣れない時、釣り人の心には迷いが生じる。ドラッグが掛かっているのか、魚が上を見ていないのか、そもそもここには、魚がいないのか……？なかでも最も気になるのが、やはりフライがマッチしているのかどうかではないか？そんな時、信頼できるパイロットフライがあるかどうかは重要。シーズンを通じて渋谷直人さんがよく使うパターンを、それができるまでのエピソードを踏まえて解説してみたい。

渋谷直人＝文・写真
Text & Photography by Naoto Shibuya

ドライフライの定番

フライフィッシャーにとって、パラシュートパターンとともに絶大な信頼を得ているのがカディスだろう。逆にいえばパラシュートとカディスのアラカルトがあれば、水面の釣りがほぼ成立してしまうくらい強力なフライだ。

代表的なカディスパターンは、多数の方々が信頼しているエルクヘア・カディスである。これはカディスにも見えるし、テレストリアルやガの仲間のようにも見える。大雑把にいえば「虫らしい」万能フライである。

それにくわえ、カディスは水面に絡んで年中ハッチしているくらい種類が豊富で、しかも圧倒的に数が多い。ダムや洪水にも負けない生命力がある。まるで水辺からわいてくるように感じてしまう。

個別の種に限定すれば、それなりの増減があるにせよ、カディス類のいない川は見たことがない。そうなると幼虫の時期から魚たちが食わない理由はなく、常に主食になっているのだと思う。それらを模したフライで、釣れないはずがない。

僕が十代のころ、東北でフライを始めてからは、カディスパターンに依存していたシーズンもあった。現在でもその重要性に気づかされることは、しばしばである。今回は、そんなカディスについて解説したい。

エルクヘア・カディス

フック:TMC112Y　#7～13
ボディー:ピーコックハール・ブリーチ
ハックル:コックネック・スペックルドバジャー
ウイング:CDC・ダン、エルクヘア・ナチュラル

エルクヘアは、ブリーチは弱いので使わない。ナチュラルの白っぽいものが視認性がよく、耐久性も優れる。羽虫だけではなく、バッタ類などテレストリアルとして使っても効果があり、大型のパターンは夏以降の大ものねらいでの出番が多い

カディスに使うCDC

カディス類を模したパターンは、ダウンウイングなので、シャンクに対してフラットな形状にマテリアルを巻く。そのため投射性がよいのが特徴だ。このことを最大限に利用したのがCDCカディスである。

ボディーは何でもよくて、僕の場合はグレー系を多用している。キャスト時の回転を防ぐためパーマハックルにはせず、順巻きでハックルを巻き、上下をカットしてサイドのみファイバーを残す。その上にCDCを乗せるのだが、これは2～4枚を背中合わせにして、フラットに留める。ただそれだけのパターンだが、カディスのアダルトやその他の羽虫（メイフライのダンやガ、チョウなど）が食われている時には、サイズを合わせるだけで使える万能フライである。

CDCはエルクヘアよりも耐久性があり、数多くの魚を釣ることができる。雪代明けなどには頼りになるパターンだと思う。しかしCDCで魚を釣った後、復活させるのが難しいと考える方も多くいるようだ。だがヌメリを水で洗い流したうえで、吸水タオルやティッシュなどで水分を完全に拭き取ってあげてから、ドライシェイクスプレーなどのフロータントを付けるだけで簡単に復活する。CDCは折ったり揉み込んだりしても、切れたりしにくい。その耐久性の高さがCDCの魅力で、実は復活させるのもそんなに難しくはない。この素材なくしては、現在のドライフライフィッシングが成立しないのではないかと思う。

ファイバーの柔らかさは虫の動きまでも演出してくれるし、これほどドライフライの世界を変えたマテリアルも数少ないと思う。始めたころはあまりなかったと記憶しているが、数年後に『フライの雑誌』で「カモの尻の毛」と称して扱われ始め、その後さまざまなパターンに応用されていった。そのころにはCDCというマテリアル名になっていたと思う。

これをダウンウイングに用いてカディスに使うようになったのは、自然な流れだったと思う。柔らかくてランダムなシルエットは魚を飽きさせず、人も飽きさせない。今後も多用され続けると思う。

大型フライは大ものに

……いきなりマテリアルの話が続いてしまったが、ここまでCDCについて説明したのには、カディスパターンにおいてとても重要だからだ。というのも、僕の場合はどのカディスパターンにCDCを使用しているほどなのだ。

エルクヘア・カディスについても、僕の場合はアンダーウイングとしてCDCを挟み込んでいる。エルクヘアの透過性の少なさは、やはりそれなりの効果を感じる。とくに大ものには好まれる気がしている。夏以降にバッタが増えてくると特によいようで、ラバーレッグなどを付けてもよかった。

ヒゲナガ

フック:TMC760SP　#4～6
テイル:カーフテイル
ボディー:マシュマロファイバー
レッグ:パートリッジ・ブラウンバック
ウイング:CDC・ダン、カーフテイル

ボディーにマシュマロファイバーを7～8段順番に巻き留めることで、大きく太いシルエットを作る。同時に投げやすさも兼ね備えた北海道ニジマス用ヒゲナガパターン。北海道では日中でもヒゲナガが水面を走り回るせいか、大型ニジマスはこのパターンによく反応してくれる

ただ、ラバーレッグがちぎれても効果には差があまりないようで、近年はトラブル防止のため付けないようになった。それでも大ヤマメを釣った数は、黒虫フライに次ぐ多さである。今でも夏以降は試してみるローテーションの1つである。サイズは大きいほどよいと思うが、ヤマメのサイズに対して大きすぎるとフッキングがよくない。エルクヘアは素材自体、それなりの硬さがあるせいだろう。自分がねらうアベレージサイズがくわえられる範囲で大きめのものを使うと、その川における大ものねらいにもちょうどよいと思う。実際には#7~11がヤマメには適している。

アピール力を高めるために

そして近年重要視しているのが、北海道用のヒゲナガパターンである。もちろん大きなエルクヘア・カディスでもよいのだが、エルクヘアには長さに限度があるし、色がグレーに変わった根元部分を留めると強度が極端に落ちる。そのような試行錯誤から生まれたのが、このネズミのような形をしたヒゲナガフライである。北海道では春が短く冬から一気に夏に入ってしまう。そのため短い期間にいっせいにハッチしてくるため、本州のように種ごとに順を追ってハッチするイメージはない。そして昼も夜も関係なく虫が出てくるのが、6~8月だ。大きな体の個体ほど高カロリーを求めるのは当然で、羽虫ではヒゲナガカワトビケラが魅力的な補食対象になるのだ。本州以南ではヒゲナガは夜のハッチなりやすく、日中に釣りの対象になりにくいが、北海道では一転して盛期のパイロットフライになる。

最初は#6程度のエルクヘア・カディスだったが、どうもそれでは存在感があまりなく、大ものの反応を得にくいのが分かってきた。その後サイズを#2~4に変えたら、反応もよくなり、大ものがフライに襲い掛かるようになった。しかし、フックサイズを上げすぎるとハリが刺さりにくくなり、バラシが増えてしまう。

僕はライズを待つよりは叩き上がるスタイルが好きなため、一日中振り続けることを考えると竹ザオなら#4ロッドが限界だ。それ以上だと、重くて疲れてしまう。#4タックルでのバランスとしては3Xティペットくらいが限界で、それ以上の太さだとサオの破損にもつながりかねない。それらすべてのバランスを考えるなら、フックサイズは#4~6までとなる。その範囲で、魚へのアピール力を高めるしかないと考えた。

これはパラシュートフライにおけるオーバードレッシングと一緒で、フックの存在感を消すことができる。また#6程度あれば70㎝クラスのニジマスでもしっかりフッキングできるはずだ。ようはフックのシャンク全体にウイングを被せていくイメージである。

このようにドレッシングすることで、フックサイズの倍くらいのボリュームを簡単に作ることができる。またすべてのマテリアルをフラットに付けるため、空気抵抗が少ない。さらに壊れそうなマテリアルをほぼなくした完成形が、現在のパターンである。

使いたいのはTMC760だが、現在廃盤になっている。近年復活する企画もあるそうで、動向を注視したい。現状では専用といえるフックがないが、細めのウエットフライフックのなかから選ぶか、バスバグ用のフックに巻くのがベターだろう。

北海道の大型ドライフックの要望が増えているのは間違いないだろうが、近年はフライフィッシャーが多くないようで、メーカーも新商品をあまり出せないのかもしれない。そんなわけで数が減りつつある愛用品を見つけたら、迷わず大人買いしないと手に入らなくなってしまう可能性もある。話は飛ぶがカーフテイルのホワイトも品薄で、持っている方は大事に扱ったほうがよさそうだ。鳥にせよ獣にせよ、天然素材は輸出入が難しい。我々にとっては、景気のいい話ではないが……。

シマトビケラに注目

話を元に戻そう。これらのカディスとは別に、ライズフィッシングの最重要種になっているのがシマトビケラだ。いわゆるシナモンカディスである。春にはカゲロウ類に混じってダラダラと長い間ハッチして、時おり偏食対象になり得るくらいの大量流下がある。とくにオオクママダラカゲロウ前後からオオマダラカゲロウのころまでがハッチのピークになる。それらカゲロウ類のハッチの狭間が、食われやすい時期になる。

ただ僕のイメージでは、東北でシマトビの重要性は感じたことはない。雪代のない川での重要種だという印象がある。鬼怒川と川辺川では釣りに絡むイメージが強い。残念ながら釣りのパターン解明には至っていないが、シマトビケラは数が多い。天候や時間帯問わずにハッチすることがあり、そのイメージは強く残ってしまう。結果的に、シマトビケラを模したフライがないと釣れない気がしてしまう。

それでも春のハッチは、僕の釣りにとって都合がよい時間帯に集中してくれるため、遠征したくなるほど魅力的だ。朝早くにも出ないし、夕方を過ぎるとあまり見られなくなる。僕は夏でも朝8時から始め、夕方6時前には川から上がるスタイルなので、薄暮時の釣りに興味が沸かない。仕事のように決まった時間内に釣るのが理想で、そのほうが長く続けられるし、体調管理もしやすい。シーズン中はほぼ毎日川に向かうのなら、こういったことは重要だ。僕も歳を重ねるごとに、体調管理の必要性は強く感じ始めている。

……話がそれたが、シマトビケラは水面羽化で、ナチュラルドリフトしながらピューパが流下してくる。そこから抜け出そうとして、虫がモゾモゾと振動した瞬間が、捕食のきっかけになりやすいようだ。水面下のナチュラルドリフトに対してのライズとしては、スプラッシュになりやすい。

午前中にシマトビがちらほら見えてスプラッシュライズが起きたら、僕の場合は迷わずフローティングピューパを結ぶ。ライズポイントに対して少し上流に立てるなら、そこからダウンクロス気味にキャストする。ライズの1mほど上流で、メンディングでフライの向きを上流に変えるとよ

シマトビ・フローティングピューパ

フック:TMC212TR　#11〜13
ボディー:シールズファー・ライトグリーン
リブ:ゴールドワイヤ
レッグ:パートリッジ・ブラウンバック
ソラックス:ヘアズマスク・ブラウン
ウイング:CDC・タン

シマトビケラはオオクマの時期くらいから長くハッチがあり、食べられることの多いカディス。特にピューパはナチュラルに流れるためか、よく捕食されている。メスはグリーンが透けて見えるため、魚からも見やすいのかもしれない。釣りでは少しドラッグを掛けながら、ダウンクロスの釣りをすると効果的。ナチュラルドリフトで出なかった場合は試してみるとよい

シマトビ・スペント

フック:TMC212TR　#13
ボディー:ピーコックハール・ブリーチ
ウイング:CDC・タン
インジケーター:CDC・スポッテッドダン

数多くハッチする種ということは、当然同時に産卵もあるわけで、死んで流下する時期も重なる。それしか見えないのにアダルトもピューパも食わないで静かにライズしている場合は、スペントで出ることが多い。グレースペントでも対応できるが、翅先の感じが開いていたほうが本物に近い

シマトビ・CDCカディス

フック:TMC112Y　#11〜13
ボディー:スーパーファインダブ・ライトオリーブ
ソラックス:ヘアズマスク・ブラウン
レッグ:コック・デ・レオン
ウイング:CDC・タン

ほとんどのカディスはグレーで問題ないが、このシマトビケラだけは数も多く、そればかり捕食するケースもあるので、本物に近いシナモン色のフライを用意したほうがいい。アダルトのみ捕食されることもあり、そういった場面に遭遇したらこのフライを結ぶ。フラッタリングも効果的なことがある。実際にはポンポンと飛び上がるような動作に反応していることが多く、難しい釣りになる

い。フライ先行になるために有利で、わずかな動きがライズを誘発してくれることが多い。そのため一発で決まることもある。

　ただし、基本的には無理にフライを動かすことはない。通常は自然に流すことを優先する。何投もして、しつこく流すのが食わせるコツだ。

　ちなみに、こういった釣りのコツは、その他のフライでも当てはまることが多い。よく釣る人ほど無意識に行なっているようだ。

動かせないなら……

　正確な知識がないのでよく分からないが、シマトビケラはポンポン跳ねながら産卵しているのだろうか？　ハッチなのか産卵なのかは分からないが、水面をポンポン跳ねながら流下してくる個体が少なくない。またこれを偏食しているヤマメもよく見る。アダルトであるのは間違いないので、そのパターンを結んでねらうが、なかなか食ってくれないのが普通だ。長ザオでフライを吊り下げて釣るくらいしか、同じ動きを演出できないので、フライロッドでは無理がある。しかしタイミングを合わせ、確実に捕食レーンを流すことでチャンスもある。スペントパターンを投じてみるのも、目先を変えることになって奏功する。

　現在のところ、フライ自体の動きまでは演出できないのが現実なので、そこを嘆いても仕方がない。それ以外の方法でいかにして魚に口を使わせるかが、釣り人の腕の見せ所である。またフライの創意工夫が尽きないのも、この釣りの面白さだ。

色が捕食スイッチに？

　もう1種、シマトビでも春先に出るコガタシマトビケラもライズの対象になる。そんな場面に、10年ほど前の鬼怒川で遭遇した。これもやはりスプラッシュライズで判断しやすく、ユスリカのハッチの後の水面でガガンボが見えない場合はすぐに疑うべきカディスである。これもほとんどの場合ピューパが食われているため、これに関しては#15~17のフローティングピューパのみ用意している。

　特徴としてはシマトビよりも鮮やかな濃いグリーンのボディーで、小さな濃いグリーンが補食スイッチになっているのかもしれない。シマトビのライトグリーンも、オオマダラの黄色も、エルモンのオリーブグリーンも、ほとんどの目立つ色はメスの証でもある。魚は虫のメスが抱卵したシルエットや色には、敏感なのかもしれない。よりカロリーの高いものを食いたいと思うのは本能的なものだろうが、魚が多いと人と同じように偏屈な個体も現われる。特に放流魚などは、その傾向が強いようだ。シャックなどが食われるのも、放流魚でよく見られる傾向だと思う。個人的にはワイルドな魚に対してシャックパターンは用意していない。

　さて、今号でフライパターンの話には一区切り付けたいと思う。釣りをしながら必要性を感じる特殊なパターンはその都度、季節に合ったもののなかからピックアップして取り上げたい。

　実際には変わった虫の大量流下はよくあり、しかも年によって違う。忘れたころにまた訪れるのだ。マイマイガなどは数年おきに大量発生するが、それも何かの原因があるのだろうか？　気候によって大きな影響を受けるのは生きものなら当然のことなので、柔軟に対応しなければならない。

　毎年出るわけではない虫でも、必要性を感じた時にフライを巻いて用意しておけば、数年後に再び大量流下して大ものとの出会いを作ってくれるかもしれない。いずれにせよ、釣りはなかなか思うようにはいかないもので、チャンスは限られているのが普通。次の日に用意して行っても、手遅れかもしれない。一期一会を大事にするために、気になるパターンは巻いておけば、いつか役立つ（かもしれない）お守りになる。

コガタシマトビ・フローティングピューパ

フック：TMC212TR　#15～17
ボディー：シールズファー・濃緑
リブ：ゴールドワイヤ
ソラックス：ヘアズマスク・ブラウン
ウイング：CDC・ダークタン

春先にガガンボやコカゲロウに混じってハッチする小型のカディス。ピューパは濃い緑が特徴的で、サイズとこの色が重要。過去に小さなカディスが出ていてスプラッシュライズが起きていた時、このフライにしか反応しなかったことがある

解氷直後のダム湖、レイクエッジ（岸寄り）を回遊するマスたちをねらう

レイクエッジ

～北海道・雪解け直後のダム湖巡回旅～

**北海道で最後に春が訪れるのが山間のダム湖。
氷が解け流入する水量が増えると、ニゴリが日増しに強くなり、
釣りが不可能なようにも見える。
しかしその中でもマスたちは活発。
特にレイクエッジ（岸際）では
刺激的な光景が繰り広げられているのだ。**

奥本 昌夫＝文・写真
Text & Photographs by Masao Okumoto

レイクエッジの釣り

張っていた氷が解けた直後で、湖岸はまだひどくぬかるんでいる。もしかすると、昨年秋の連続台風の影響で、それまでよりも泥の堆積が増えてしまったのかもしれない。ヌルヌルと足を取られながら湖岸を歩くが、岸から数メートル先にはドン深のカケアガリがあって、そこに魚が突然現われるのを見逃すわけにはいかない。日に日に変わる湖岸の地形。つまりそのレイクエッジはこの季節のねらいめなのである。

入り組んだ複雑な地形で、小さな岬がいくつも突き出した入り江に差し掛かり、いよいよここは怪しいと念入りにフライを投げることにする。カケアガリを長い時間フライが泳ぐように、立ち位置から斜めにキャスト、岸に沿ってリトリーブ。懲りずに何度も投げる。ここでは沖に向かって遠投してもあまり効果がないのである。魚はまだ中層より上にはおらず、仮にいたとしてもニゴリが強すぎてフライを見つけることが難しいのではと感じる。であれば、岸近くのカケアガリを回遊する魚をねらうほうがより確実だ。

この時期に活発になるのはイワナ属が中心。アメマスや降湖型オショロコマ（ミヤベイワナも）はとりわけ湖底のエサを捜しつつ、カケアガリを回遊したりする。今回の釣行のねらいもそこにあったが、ここではちょっと違う事態になった。

20投もしただろうか。ミスキャストでシンキングリーダーが絡まり、7、8m先にフライが着水。ニゴリで50cmも沈むとフライが見えなくなるのだが、その下で何かがギラリと光った。

「おっ、なんかいるぞ！」

《Profile》
おくもと・まさお
1969年生まれ。北海道豊浦町出身。1996年より北海道と海外を行き来しながら「マス釣り生活」を始める。自然の中でマスたちが見せるシーンの写真と映像撮影にも注力。著書に北海道のマス釣りをテーマにした単行本『北海道の鱒釣り』、DVDには『イトウ戦記』（いずれもつり人社）などがある。

4月後半の道央、空知川のかなやまダム湖。昨年9月の連続台風によって甚大な被害を受けた湖。ニゴリが例年になく強いため釣りは断念

解氷直後の湖は冬から続く渇水のため、夏場は沈む湖底が露出している。昨年は各地で台風後に上流から泥が流出してダム湖に堆積、ぬかるみとなって残っている

石狩川の支流にある忠別ダム湖でニジマスをねらう。ダム湖の湖岸は地形が複雑だが、湖底のカケアガリに沿って行動するマスは多い

春先はニゴリが多いので魚たちの視界も狭い。大きめでよく動くフライ、光りものでアピールの高いものに反応がよい

雪深い道北地方のダム湖周辺は、北海道でも最後に雪解けを迎えるエリア。強い日光を浴び始めた幹の周りは雪解けが早い

引っ張るラインに手ごたえはなく、魚もフライを見失ったのだろうか？すかさず、もう一度同じ場所に投げてみる。サオ2本分の距離。こうした場面では短いロッドが圧倒的に有利。今日はスイッチロッドだったが、ヘッドとランニングが一体型のスイッチロッド用ショートヘッドラインを使っているので、一振りするだけラインは飛んでいく。手返しのよさはシングルには及ばないものの、ダブルハンドに比べると充分にフットワークが軽いのだ。

リトリーブのスピードは悩ましいところ。魚の注意をひくために速めにリトリーブしたいところだが、魚にとって視界の悪いニゴリだから、フライを見逃すケースも考慮しなければならない。パターンの形状で疑われるケースはほとんどないと思うが、結局のところ、動きのよさはここでも重要。遅めのリトリーブをするため、光りものが多く、よく動き、注目を引くパターンが有効になるのだろう。白っぽいニゴリの中なら黒系のストリーマーで釣るところだが、実際には白でも青でもよく動くフライへの反応がよいケースがほとんど。それだけ動く生きもの＝エサに飢えているということだろうか。

フライを投げてすぐに魚が食いついた。しっかりとフッキング。掛かった魚がグーッと沖に逃げていこうとするのですぐにニジマスだと分かった。30㎝ほどの大きさ。ランディング後すぐに逃がして近くを流すと、今度はもう少し小振りのニジマスが来た。小規模な群れなのだろう。これはちょっとしたうれしい誤算。レイクエッジの釣りは、岸近くを好むイワナ属が相手になることが多い。だが湖岸のカケアガリを群れで回遊するニジマスも、特に早期は思いのほか近くまで来るものである。

レイクエッジの釣りで最も特徴的なのは、魚が釣り人に近いということ。だから、魚の姿そのものを目撃することも珍しくはなく、水面にエサを見つけてライズするシーンや小魚を追ってボイルする光景が近場で展開される。私がこの季節に好んでそんな釣りをするようになったのは、魚がたくさん釣れるというよりは、視覚的な楽しさが大きな理由でもあるのだ。

雪解け水の影響を受ける春のダム湖は、通常ニゴリが強いが、日に日に増える湖水によってさらに濁度が強まる。冬の間の減水で露出した湖底や湖岸の斜面が、増水した湖水と岸波によって洗われ、表面の土砂が混じってそれがニゴリの原因となる。岸際の水ほど土が混じった薄茶色をしている。

知らずに来ると、こんな状況で魚なんか釣れるのか？　と思うし、もちろん澄んだきれいな水の時と同じ条件で釣れるというわけにはいかない。しかし実際のところ、そんな中でも魚がいれば、釣りは成立するのである。こんな時の魚は警戒心も緩く、岸近くをうろついている場合がとても多いからだ。

注目すべきは入り組んだ地形で、岸から近いカケアガリ。湖の釣りなら通常は岸から沖に向かって遠投をするが、まだ水温が5℃ほどしかない春先の湖のマスは、湖底近くをウロウロしていて、なかなか浮いては来ない。しかもこのひどいニゴリの中では、遠くからフライを見つけて近寄ってくることも期待できない。つまりカケアガリだからこそ、マスにフライの存在をアピールさせやすいのである。

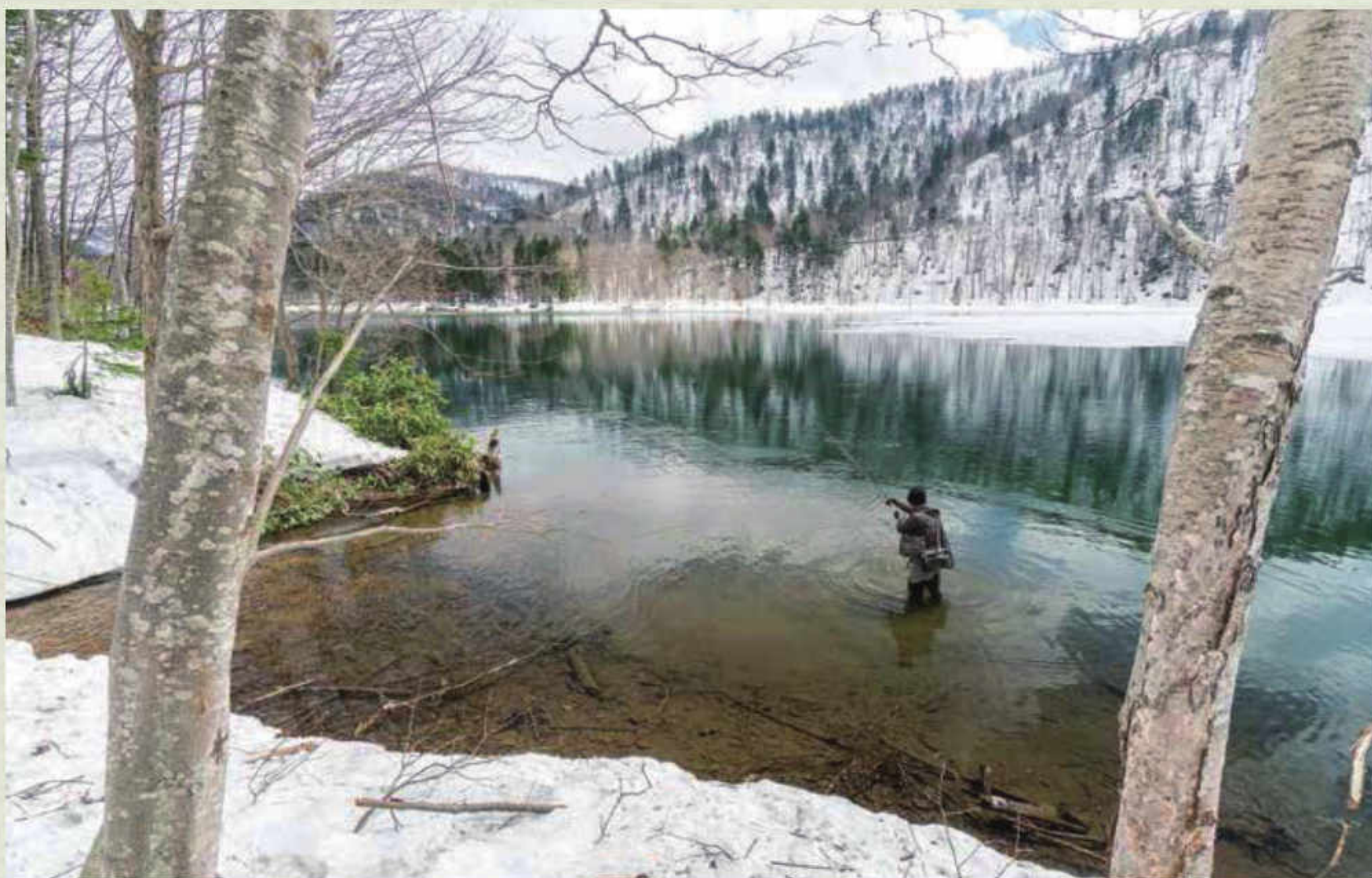
基本的に遠投も必要がない。15ｍも飛ぶラインシステムがあれば充分である。もちろん自然相手の釣りはその場の状況に合わせてするものだから、フライが届かずに釣り逃して

しまうリスクも当然のことながらあるけれども……。ただ止水ではラインシステムで飛距離を変えることもできるから、遠くをねらえるラインも持っておいて損はない。

ライトタックルへの回帰

「レイクエッジの釣り」は、足もと近くのカケアガリを丹念に探る釣りである。この岸際の魚をねらうためには、普通の湖用のタックルとは異なるシステムを使うのが効率的。そう気がついたのは、実は北海道ではなくアラスカの湖の釣りからだった。

野生のレイクトラウトを釣るために訪れた最北の山脈ブルックスレンジ、その裾野にある小型の湖ではカケアガリで、50cm以上もあるレイクトラウトが面白いように入れ食いになった。レイクはイワナ属。アラスカでは成長が遅く、50cmになるのに7〜8年もかかるが、イワナの例にもれず、エサに対しては獰猛でアグレッシブという性質を持つ。ここでは浅場で小さなグレイリングが釣れたものの、表層や沖へフライを投げてもまったく反応はなかったので、最初はレイクトラウトがいないのかと思ったが、シンキングリーダーを重いものに替えて充分に沈めると、途端に釣れ出したのである。

沖のほうへ10mほど投げてラインがゆっくりと沈んでいくのを待ち、フライが岸近くのカケアガリに近づいて、深さ3m付近に差し掛かると、グングンと大きく引ったくるようなアタリ。掛からなくても、フライを追いかけて、表層まで追いかけてくる魚もいた。魚影はかなり多く、5投間隔くらいで数時間釣れ続けた。

4月後半から5月の初旬は山間部にある標高の高いダム湖が解氷するシーズン。水温の上昇によって湖底付近で越冬したマスが、岸寄りのカケアガリに姿を現わす。カケアガリに沿って岸と平行にキャスト

あまり簡単に釣れるので、手持ちのラインシステムとフライであれやこれやと試してみたところ、まずフライは動いていなければ反応しないことが分かった。しばらくカウントダウンしても6〜7mほどしか沈まなかったが、深い場所ほど大きな魚がいるようで、一度80cm以上はあるような巨大なレイクトラウトが岸近くまで追いかけて来たのが見えた時は心の中で、「食ってくれ!」と叫んだ。しかし人影が目に入ったのか空がまぶしかったのか(暗い湖底に棲んでいるらしい)、岸の2mほど手前でUターンをしていってしまったのを見て、心臓が飛び出しそうになるほど興奮したのを覚えている。

その時使っていたタックルが、10フィート7番と9フィート6インチ8番のシングルハンドに、ニンフテーパーのWFライン。ラインの先には10〜18フィートのシンキングリーダー(タイプ2から6相当の重さ各種)を接続するというシステム。

これは事前に情報があったわけでもなかったので、以前パタゴニアでシ

重めのシンキングリーダーを使うこの釣りでは、5m前後のショートヘッドのラインをスイッチロッドでキャスト。バックスペースのない場所でも、短いヘッドとコンパクトなスペイキャストで方向転換が容易になった

ートラウトを釣ったシステムと、90年代後半に北海道の朱鞠内湖でイトウ用に使ったシステムをそのまま持ち込んでいたのだ。今から15年ほど前は、アラスカでは湖でフライフィッシングを好んでする人はほとんどいなかったようで、ちょっと遊ぶにしても川で使うシステムをそのまま流用。私自身川も湖も一緒のシステムだったのだが、これがむしろ奏功したといえるのかもしれない。

その後は湖の釣りではダブルハンドのスペイキャスト一辺倒という状況になってしまったので、足もとの釣り、繊細な釣りから遠ざかることになった。実際のところダブルハンドでのスペイキャスティングは、状況によっては魚に警戒心を与えやすいと思う。太いラインの着水、激しい水切り音は、学習したマスには逃避のスイッチとなってしまうことも少なくないだろう。ただし、キャストの気持ちよさと探れる範囲の広さはまた別問題なので、これは状況に合わせて選択していけばよいと思う。

現在のシステムは、10～11フィート5～6番のスイッチロッドをメインに使用。ショートヘッド形状のスイッチライン、特にヘッドとランニング部につなぎ目のない一体形状を愛用している。これは場合によってはヘッドの先端までリトリーブをするためで、ヘッドとラインニングのつなぎ目の段差があると、なぜかリトリーブ終了の合図のような気がして、止めてしまう（笑）。

先端にはテーパーのついたシンキングリーダーを接続し、フライまできちんとターンオーバーをさせる。ティペットは1～2mほど。重さは深さに合わせてタイプ8相当まで用意している。

岸から水深2～4mまでの範囲がねらいどころなのだが、ラインのヘッド部が浮力のあるフローティングなので極端には沈まず、タイプ4相当がちょうどヒットレンジにマッチすることが多い。早期のニゴリのなか、低活性のマスには根掛かりが頻発するくらいの底付近でなければ、なかなかヒットしないことも多い。

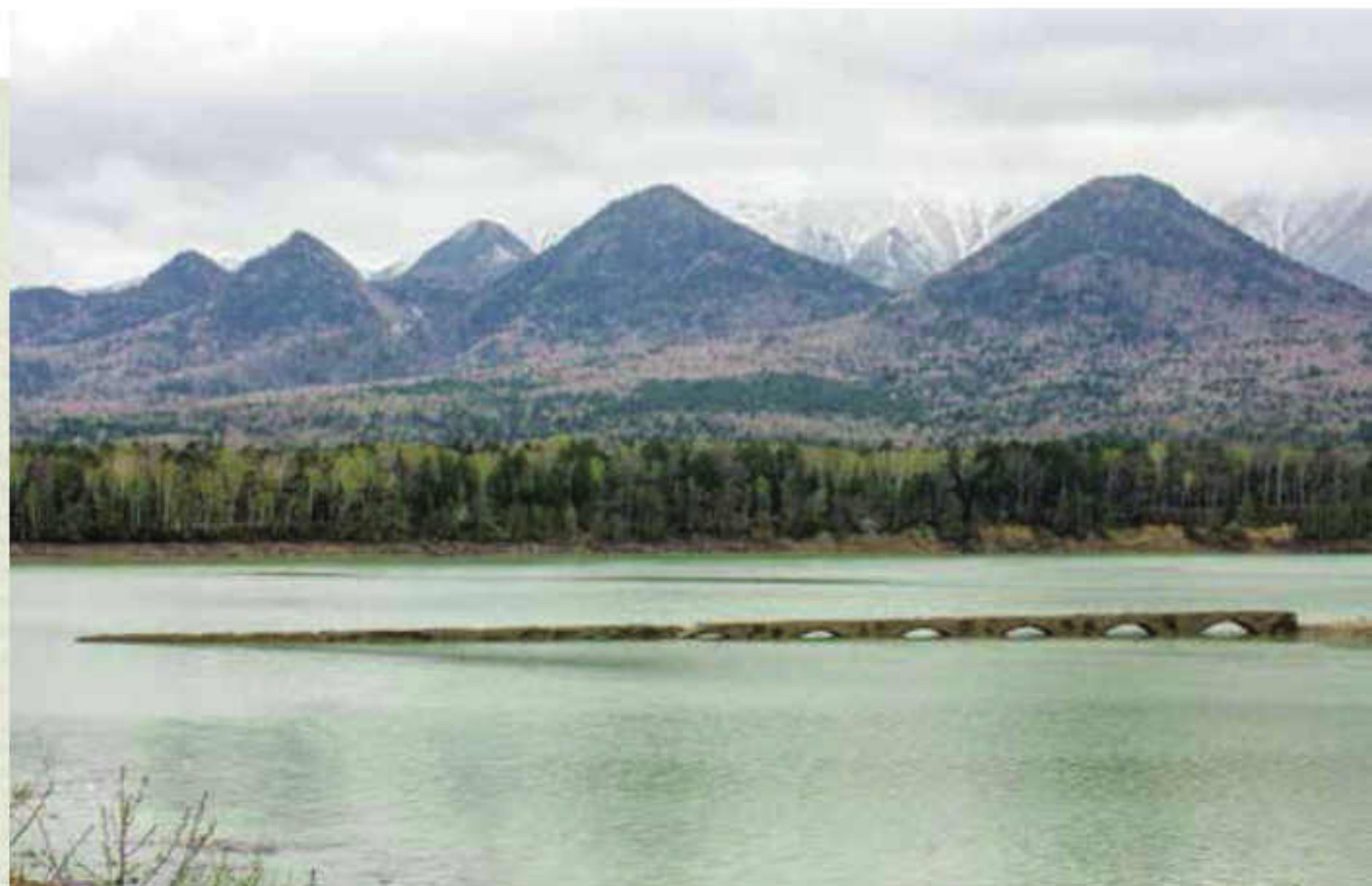
北海道の湖で、特に岸際を意識した釣りができるのは、急深なカケアガリが近くにある湖である。つまりダム湖だけではなく、山間部にある

上／朝晩はまだ氷点下になることも珍しくない季節。レイクエッジの巡回旅は温泉巡りの旅でもある。石狩川から天塩川へのマス釣り巡礼ルートにある、協和温泉はお気に入りのひとつ　下／キャンプ場もまだ閉鎖中で、駐車場の片隅を拝借して新型ストーブで暖を取る。今度のストーブはよく燃える!

天塩川上流部の岩尾内湖も春先のアメマスの釣り場であるが、区画漁業権が設置されていて釣りは5月1日から。今回の巡回旅では惜しくも外れる

5月後半の糠平湖。十勝川支流の音更川にあるダム湖。やはり春先はニゴリが濃くなるが、本流や枝沢の流れ込みの付近を中心に、良型アメマスが岸際をクルーズするシーンに出会う。昨年の台風で上流部はやはり大きな被害を受けた

自然湖はどこにでもそうした地形があるので、試す価値はある。しかし前述のようにダム湖はニゴリがあるのが特徴で、これを逆手に取る釣りでもある。水が澄んだ自然湖では警戒心によって岸に寄らないマスも多く、エサが岸に集中しているわけでもない。実際には岸近くでヒットすることが多いが、その一方沖でヒットしないわけでもないのである。

ちなみに、ダム湖はベイトが貧弱であり、エサを求めて岸寄りに魚が集中しやすい。前述のようにエキサイティングな光景も見られやすい。今回の旅の目的もそんなところがきっかけではある。ただし私の場合は、自他ともに認める「ダムフリーク」というのも大きな動機ではあるのだが……。

北海道ダム湖事情

なぜにダム湖が好きなのか？　という話は長くなるので今回は置いておくが、恒例化している春の巡回のダム旅は、道央から道北の山間部のダム湖がメインになる。今回訪れたのは、空知川のかなやま湖、天塩川の岩尾内湖、ポンテシオ湖など。

最初に訪れたのは石狩川の支流、忠別川上流部にある忠別ダム湖。ほとんどがアメマスやイトウなどのネイティブがいる湖なのだが、ここだけはニジマスの湖。地元の方々がニジマスを放流しており、かつてはなかなかの良型が釣れて、テレビ番組で紹介されたりもしていた。だがいつの間にか良型は減り、訪れる釣り人も減少したようだ。今回も釣れたのは小型魚が多く、ここ10年で4～5回ほど訪れているが、実は魚が釣れたのは数えるほどしかない。

もっとも、都市部に近いこうした湖では資源の増減は、釣り人の質によるところも大きいのだろう。一説では持ち帰る釣り人が殺到するようになったせいだという声も聞こえるから、主体的な資源管理の団体がな

上／十勝水系の陸封アメマス。ダム湖は当たり年であれば、けっこうな良型が連続ヒットすることもあるが好不調の波も激しい。自然湖に比べると釣り人の数は少ないのはそんな理由からなのだろう

右下／6月初旬の日高地方の新冠ダム湖。解氷からすでに1ヵ月以上経つも、山奥深いことから釣り人の数は少なく、アメマスの釣りはレイクエッジのみで成立する

い現状では、魚の減少も避けられないのかもしれない。
　川と違って、比較的多くの釣り人が気楽にサオをだせる止水は、一般市民のレクリエーションとしての釣り、いわば「ガス抜きのような釣り場」として存在してほしいと思う。そのためには継続的な放流など地元の自治体が主体となって進めていくほかはないように思う。

茶褐色の背中に白点。春のレイクエッジの主役は湖沼型のアメマス。人知れず、静かな岸をクルーズするアメマスを見ることができるのも山間の光景。条件がよければ6月まで続く

　十勝川の糠平湖もやはりニゴリの強い湖でもある。かつては放流されたブラウントラウトがけっこうな数生息していたが、今ではネイティブのアメマスがよいサイズになっているようだ。雪解けと釣りシーズンは最も遅い湖のひとつで、インレットと複数ある沢の付近がレイクエッジの釣りの舞台になる。ワカサギも生息しているので、産卵期を迎えるワカサギねらいに寄ってくる良型アメマスが、岸近くで激しくボイルをする光景を見ることもあるだろう。
　季節が進んでも釣り人がさほど集中しないダム湖ならば、6月になってもレイクエッジの釣りでエキサイティングな展開が期待できる。日高地方の山間部には大きな湖がいくつもあるが、例年であれば6月以降に林道が解放される新冠湖もそんな湖である。5、6月は雨が少なく、すでに減水し始めているはずだが、斜面の露出した入り江で産卵するウグイをねらって、大型のアメマスが岸際のカケアガリを行ったり来たりする光景を目にする。夏場でもニゴリが取れない湖なので、沖ではほとんどヒットすることはない。だが岸近くにフライを泳がすと、深みから襲い掛かるアメマスを1日に何度も目にすることがある。もちろんシングルハンドの釣りも面白い場所だ。他にも道内には各地に魅力的なレイクエッジが存在する。
　昨年秋の連続台風による影響は、各地のダム湖に深い爪痕を残した。4月の後半に訪れたかなやま湖などはインレット部に黒々とした泥が溜まっていて、流れ込んでくる川がその泥を溶かして、今なお洪水直後のようなニゴリだった。さすがに私も釣りはできないと思った。忠別湖も影響が残っており、インレット付近にはなぎ倒されて流されてきた木々が幾重にも重なり（それでもかなり回収もされたようだが）、やはり流入した泥がかなり層になって堆積している。
　道内の他のダム湖でもいわれているのが、ダム湖のマスはかなり死滅してしまったのではないかということ。この春から各地の状況が明らかになっていくだろうが、ダム湖の低い資源再生産能力を考えると、悲観的な見方をせざるを得ない。ダム湖はそもそも人為的な理由で存在する非自然湖である。ダム湖の環境は激変している時こそ、人の手が積極的に入るべき時ではないのかという気がしてならない。

上／立ち込み時には欠かせないラインバレット。バスケットよりも可搬性がよいので、魚を捜して岸を歩くレイクエッジの釣りのアイテムのひとつ。これがあるとないとでは数メートルの飛距離が変わる
下／レイクエッジの釣りを快適にしてくれるシステム。ショートヘッドのフローティングラインにシンキングリーダーでレイクエッジの魚を攻略する選択肢。スイッチロッド、シングルハンドの両方で使える。元はアラスカの湖でレイクトラウトの釣りから始めて、川でのサーモン、ドリーバーデン、そして北海道の川のアメマス、湖のミヤベイワナと応用してきた

朝から晴れているのに薄雲が次々と流れてくる天候だった。渓に下りていくと、川沿いの樹木が揺れるたびに、その青葉をグイグイと伸ばしているようなパワーを感じた。流れには数を増した小さな飛来昆虫が次々と舞うように行き交い……いよいよその日が近づいていると思わせた。

FlyFisherのための流下物データバンク

刈田敏三の 水生昆虫記録ノート

ドリフター、つまり魚が捕食し得る流下物の確認は、
私たちに大切な情報をもたらしてくれる。
日々川に立ち、膨大なドリフターのデータを集める刈田敏三さん。
さて、そのノートにはいったい何が記されているのか？
さまざまな虫が流下し、謎解きの醍醐味が増す今の時期、
刈田さんが渡良瀬川のライズを読み解く。

刈田 敏三＝文・写真
Text & Photography by Toshizo Karita

〈Profile〉
かりた・としぞう
1955年生まれ。埼玉県鴻巣市在住。ライズの釣りにこだわって国内外の虫と魚を追いかける。近年はマテリアルの開発、フライを販売するなど精力的に活動。著書に「水生昆虫小宇宙パート1、パート2」（つり人社）、「水生昆虫ファイルI・II・III」（つり人社）、「水生生物ハンドブック」（文一総合出版）、「はじめての釣り図鑑1～6巻」（偕成社）がある。
http://karita.photolib.jp/

幻か？ ドリフビッグウエーブ 編

12時ごろ、ニンフ（幼虫）のようすをチェックしてみると、オオマダラカゲロウのニンフがゾロゾロ見つかった。けれども、まだすぐハッチするような兆候は見えない。ところがモンカゲロウは、ウイングパッドの濃色化が始まっており、ここ数日のうちにもハッチしそうな個体が見つかった。

4月26日 群馬県／みどり市・渡良瀬川

5月下旬からの流下ノート

新緑から緑濃い渓となれば、もう夏の気配。水温の低い流れや、支流などの影響があると、まだ残りのオオマダラカゲロウやモンカゲロウがハッチしてくる。

この後に続く注目マダラカゲロウ類では、ミツトゲ、チェルノバ、コオノなど。たとえ流下量は少なくても、ライズする魚には強い影響力を持っている。その他エラブタマダラにアカマダラは、6月中旬になっても流下するスタンダードドリフター。

分かりにくいのは、やっぱり水中羽化の種類。ヒメヒラタカゲロウにエルヒラタカゲロウ、小さくても数多く流下するフタバコカゲロウはずっと続く切り札だ。シーズン的に一番やっかいなのは、マルツトビケラ。ごく小さなブラックカディスとはいえ、絶対見過ごさないように。

黄色やキナリ色のミドリカワゲラ系は、6月上旬くらいまでで終わり、コグサヒメカワゲラやナミカワゲラ、オナシカワゲラは、時間を問わず突如ポトリと落ちて、派手なスプラッシュライズを誘発する。

6月になって限定的に注目すべきは、ナミフタオ、ヨシノフタオなど、陸上羽化ながらもモンカゲロウに及ぶサイズのメイフライだ。その大きさが魅力的なだけに、ヨシ群生や緩流などの生息ポイントがあれば面白いことがあり得る。その点、このころからハッチが始まるチラカゲロウも同じ。これらは特に、イブニング時に流心レーンへポトリと落ちるスペントに鋭いスプラッシュが上がる。

いわゆる水生昆虫以外では、オドリバエ（体長4～7㎜）ケバエ（体長8～10㎜）などのデプテラ系にも

12:00

このころ流下してきたのは、フタモンコカゲロウ。珍しくも、オスとメスのダン（亜成虫）があいついでネットに入った。並べてみれば、オスメスでのサイズや斑紋の違いがたいへんよく分かる。メス体長6mm、オス体長5mm。

12:20

ミジカオフタバコカゲロウのオス・ダンが流下。それから20分ほどミジカオのハッチが続き、流れを見渡していると次々と水面から飛び出すダンが見えた。このころ、さらにダンが2匹ネットに入った。体長4〜4.5mm。

12:45

サイドコカゲロウ。ミジカオよりやや大きいダンなのに、ボディーが細めなので存在感がやや薄いコカゲロウ。それでもこの日は、17時ごろまでハッチがあって流下が続いた。体長5mm。

12:50

ついに待望の生きているアカマダラカゲロウ・イマージャーが流下してハッチが始まったのを知る。川底からイマージング浮上してきて水面に達し、ソラックス背面がパックリと割れたところで、ネットに入ったのだ。体長7mm。

13:50

エラブタマダラカゲロウのハッチも始まり、メス・ダンが流下した。この後は、15時と17時にもダンが流下。ただハッチ量としては、アカマダラに比べるとかなり少ない。体長7mm。

サイドコカゲロウ・スペント。水中産卵した後に弱って浮上して来たスピナー（成虫）である。この日は13時過ぎに始まった流下が14時から15時ごろにかけてピークとなり、20匹以上のスペントがネットに入った。体長4〜4.5mm。

14:00

シロハラコカゲロウのオス・ダンが流下した。体長7mm。しかし、この日流下したのはこれだけで、スペントの流下もなかった。また、同じタイミングでウスバガガンボ体長7mmも流下した。

14:15

エラブタマダラカゲロウのスペントが流下した。体長7mm。これでドッと流下するのかと思ったのに、18時ごろまでダラダラと少しずつ流下しただけ。集中流下にならなかったのが残念。

注目したい。羽アリは5月下旬ごろからクロヤマアリが出てきて、それから大型種のクロオオアリやムネアカオオアリなども見られる。6月には流下するアント類がグッと増えてくる。

虫は次々流れてくるけど？

例年、4月末から5月初めのいわゆるゴールデンウイークにダブって、スーパーハッチ、スーパードリフターの大きな第一波がやって来る。……と同時に、たくさんの人々が動いて釣り人もドッと出る。人が多くなると、さまざまな問題が発生することがあり、水生昆虫の研究にはこの時期を避けて通るしかない。というわけで、ひとまずゴールデンウイーク直前の4月26日、ハッチ大波の予波があるやらないやら確かめにやってきた。

渓谷に一歩足を踏み入れると、メイフライにデプテラ、カディスっぽいバタバタ飛行のフライが、穏やかな光の下で飛び回っている。すでに春ではなく、初夏の気配が満ちあふれていた。

12時を過ぎたところで、コカゲロウ・ダンあれこれにコカゲロウ・スペントも流下。しかし肝心のヤマメは無関心で、ライズは見えない。刈田式禁断のお試しブラインドキャストに反応してくるヤツもまったくいない。

（そうか）今、ヤマメの活性が異常に低いのは、朝夕に大ものドリフターがあったのかも。なんといっても今はフタモンコカゲロウからサイドコカゲロウ、ミジカオフタバコカゲロウなど、ドリフターのいずれもサイズが小さい。パンチが効かない印象だ。ハッチがあるのに惜しい……と沈みかかった気持ちにガツンと来たのは、アカマダラカゲロウのイマージャー。こんな昼からアカマダラのハッチが始まるとは……。やはり素晴らしいシーズンが始まるのだ。

それからの1時間、どんどんアカマダラ・ダンが流下して、13時50分にはエラブタマダラカゲロウのダンにシロハラコカゲロウのダンまでが流下してきた。さらにエラブタマダラのハッチは増えないのにアカマダラのハッチが続き、エラブタマダラのスペントまでもポツポツながらも続けて流下してきた。

もうこうなれば、絶対にライズするはずだが……まったくライズが見つからない。やむなく、アカマダラ・トラップトをブラインドでキャストしまくってみる。だが、驚ろくほどの無反応。

こうなると、朝から午前中に何か異常事態があったのかと疑わしくなる。このままイブニング系の何かを期待して待ち続けてどうなんだろうか。さあ、どうしよう……困っているうちに、やがて15時に。

チェックしているうちに……

「ややっ」

なんとも短い人生の貴重な時間をずいぶんムダにしてしまったらしい。ちょいと上流へ移動してみると、大きなプールのあちこちで鋭いスプラッシュライズやディンプルライズ。また、ガボッと激しいライズも出た。(あんなライズはシマトビケラっぽい)

パラダイスの発見は、すでに16時になっていた。これから、やがてイブニングタイム。ライズは一層盛り上がるに違いない。ただこれほどのライズプールだが、岸際の水流が弱くて深いのでドリフターをチェックするのが難しい。かといってプール全体に魚が散ってライズしているので、うっかり立ち込めない。

仕方がない、チェックがやっかいでも流れ込み脇のザーザー流れへドリフターネットをセットする。

(……やば)

5分チェックしてもドリフターが来ない。ということは、プールの中後半ではライズがあっても、流れ込んでくるドリフターがないのは、ハッチが終わりつつあるという証拠。今は、かろうじて緩流に残り物が漂っているのにライズしているらしい。だからといって、この状況でドリフターをチェックしないで釣ってしまうわけにはいかない。定置のネットに加えて、右岸際の流れにランディングネットを使って直接ドリフターを捜した。

10分ほど探すと、エラブタマダラのダンとスペント、アカマダラのダン、羽アリ、ウスバガガンボのシャックがらみスティルボーン、ウイングがヨレヨレになっているシマトビケラ・キャプティブが見つかった。

(シメシメ作戦成功……ハッ)

気がつけば、あれほどあったライズがめっきり減って、流心レーンの一部だけになっている。それも単発的で、ややねらいにくい感じ。なんとか急いで釣らねば。

あれこれとかき集めたようなドリフターのなかで、どんなフライを使うべきか。たしかに派手なスプラッシュライズもあって、あれこそシマトビにライズしたような気がする。過去の実績からいっても心情的には、シマトビでガバッと食わせたい。

しかし沈みかかったライズムードのなかで、確実にまず1尾釣っておきたい。エラブタマダラのダンにスペントか、アカマダラ・ダンのどれがベストだろう。結局、やはり早いイブニングタイムということもあり、エラブタのスペントに決定。次のライズを見てから、その流心レーンに、フライをキャスト。

「あれっ」

ライズしている辺りへドリフトしていくはずのフライを見失う……アッ、しまった。グイとラインが持ち上がり引きが来た。

(あ〜まずい)

釣ったというよりも釣れてしまった。グルグルファイトしていたヤマメがフッと消える。

16時50分。フライをアカマダラ・トラップトにしてやっとヤマメが釣れた。そしてあれほどあったライズは、18時を過ぎ、さあイブニングというころにはドリフターとともにサッパリなくなった。

16:00

上流のプールで発見したライズ。しかもライズは流心レーンだけではなく、プールテイル側にまで広範囲に散っており、毎分1回以上もバシバシ発生していた。しかし……。

16:50

釣れたヤマメの捕食物。下流でのドリフターデータそのままという印象で、ポットン系で落ちてくる、オナシやオドリバエがわりと食われていた。センター上から時計回りに……。
オナシカワゲラ 体長5mm 全長7mm／**オドリバエ** 体長4〜mm×6／**アカマダラカゲロウ・ダン** 体長7mm×16／**エラブタマダラカゲロウ・スピナー**(スペント) 体長7mm×2／**エラブタマダラカゲロウ・ダン** 体長7mm×5／**サイドコカゲロウ・イマージャー** 体長5mm／**サイドコカゲロウその他・スピナー**(スペント) 体長4〜5mm×13

5月8日 群馬県／桐生市・渡良瀬川

11:37

まさかこの快晴で……。我が肉眼では見えなかったが、双眼鏡を使ってだだっ広い流れを見回すと、あちこちにディンプルライズを発見。ホントかいなとすぐに立ち込んでみると、こんなスプラッシュライズも見つかった。

GWの翌日

ゴールデンウイークもやっと終わった。来るかハッチの大波……と意気込んで渡良瀬川のC&Rエリアにやってきた。昨日までどれほどフライフィッシャーが賑わってヤマメがナーバスになったのか、想像してゾクゾクする。今日は、パーキングのある上流部に誰もいない。それにしても……。

(ガックリ)

たいへんなドピーカン。まあ、ゆっくりと流れを観察していれば、夕方ごろにはいくらかドリフターが出現するかもしれない。

下流へ向かうと、早瀬からの急流に長いサオのエサ釣りファンが1人。さらに下っていくと、広いプールエンドの護岸の上からキャストしているフライフィッシャーがいる。自分が釣られないように、キャストのタイミングを計ってスルリと通り抜ける。まさにその瞬間。コンクリート護岸にほど近い流れでピシャリと水面が弾けた。

(なんと)

連休中に、ずいぶんと勉強しただろうに、人影のあるすぐ脇でライズするとは。まさかとは思いながら、辺りの広い平瀬を見回す。……特にライズは見えない。

それでもここは、突き出た岩が無数に散在していて、底石も非常に大きい良質な平瀬である。試しに双眼鏡を取り出した。まず中州で左岸側へ分かれる流れの肩に注目する。

(やっややっ)

右岸上からはとうてい見えないだろうが、8倍の双眼鏡ではその左岸方向に落ちる瀬肩にディンプルライズが。その上流へ少し視線を移動すると、流れのヨレを作る沈み岩の向こう側でポワンと水面が動いた。

(これはたいへん)

ライズだらけなのか。急いで少し下って、浅い平瀬を渡り中州にザックを降ろす。

(ひょっとして)

モノホンのハッチいやドリフター

13:25

たしかにライズがあったはずなのに、やっとドリフターを見つけられたのは13時25分。アカマダラカゲロウのスティルボーン。羽化途中かキャプティブかとも思われたが、すでに死んでいることから、羽化途中で力尽き、流下したことが分かった。体長7㎜。

15:00

流下した、ナミトビイロカゲロウのオス・ダン。体長7㎜。その後17時にもダンが流下した。スリムなボディーで、その存在感はやや弱いけれども、しばしばスーパーハッチを見せる。

15:00

流下したエラブタマダラカゲロウのメス・ダン。片方のウイングが縮れたままで伸びていないキャプティブ状態。この後16時まで2匹のダンが流下してきた。

16:00

ハッチしたばかりのウスバガガンボ、体長7㎜。このところ、春からずっと続いていたウスバのハッチもいったん静まった印象。

16:55

16時30分を過ぎてから、時々水面から飛び出す大きなダンを見かけていた。それがやっとネットに入ったのは16時55分。大きなダンは、ハッチしてもすぐに風で左岸下流方向へ吹き飛ばされていた。体長20㎜。

17:10

ダンと混じって流下したモンカゲロウ・スペント。体長18㎜。モンカゲの産卵は、平瀬の水際で陸上から水中へ産卵したり、湖の湖面へ直接着水して産み落としたり。環境によってさまざまな産卵形態を行なう。

18:27

流下したフタバコカゲロウ・メス・ダン。夕暮れに一層強まった北風に、水面のフライでは風に吹き飛ばされるので、水中勝負のできるこのフタバに期待した。しかし、流下はこの個体だけ。

17:00

釣れたヤマメの捕食物。右がモンカゲロウ・メス・ダン体長19㎜。左のニンフ・シャックをよく見ると、ウイングパッド内に黒々とかなりのウイングが伸びずに残っている。羽化失敗状態での流下か羽化できずに死んで流下したスティルボーン個体だと思われる。

17:00

この時間に釣れたヤマメ。フライどころか水面上のラインまでも強風で持っていかれるようでは、C&Rエリアのハードヤマメをだますのは、ほぼ不可能……。帰りたくなった。しかし、それでも釣れる人がいる。すごすごと逃げ帰れないという追い込まれた状況だった。

の大波が来ているのかもしれない。ともあれドリフターネットをセット。水温は16・3℃。もう立ち込んでも冷たさは感じない。ディンプル系ライズならコカゲロウ系のハッチが来ているのだろうか。

3分が待てずに2分でネットをチェックする……エッ？　11時55分、ドリフターはなかった。12時10分……12時30分……13時。ずっとドリフターなし。

（そんなはずはない）

すぐ下流の中州へ行って〝何か〟を捜してみる。少しえぐれた岸際の淀みが、不気味に赤黒く覆われている。なんだ……。大量のモンカゲロウ・スペントがゴッソリとたまっていた。

（あ～そうなのか）

モンカゲロウがスーパーハッチした結果のスーパースペント大波がすでに流下してしまったらしい。

（終わったのか）

結局、このところのライズは何だったのだろう。

13時25分、やっとアカマダラカゲロウのスティルボーンとダンが流下した。午後前半のドリフターはたったこれだけ。それでも流れをよく観察していると、単発的ライズやピョンと飛び出す姿が見えたりして、ヤマメの動きは感じられた。だが、なかなかねらいを絞れるようなライズにはならなかった。……ドリフターがないのだ。まあ、日差しが弱まってくればドリフターも来るだろう。

ひゅ～う……。14時ごろ、突然それまで南から吹いていた風が北風に変わった。夕立が来るような雲も見えないが、何だろうと思っていると、いやな強風が吹き出してきた。それでも15時ごろにはアカマダラのハッチが復活して、エラブタマダラにナミトビイロカゲロウ、サイドコカゲロウもハッチがあって流下してきた。

ヤマメも待ってましたとばかりにライズ。エラブタマダラ・ダンのトラップトをドリフトするとバンバン出てくる。しかし、強風に吹かれたフライやラインのせいでドラッグが掛かり、食い損なってしまいバラシが続く。風に負けないようにと力んだキャストをした挙げ句のびっくりアワセで、パシパシ切られた。……最悪。

16時30分、カメラが乗った三脚が強風で倒れそうになり、必死で飛びついて押さえつける。このころからだろう、時おり大きなダンが風に乗ってピューと飛ばされていくのが見えるようになった。そのハッチし始めた大きなダンが、モンカゲなのか、オオマダラなのか、ネットに入らないのでその見極めができない。

16時50分にネットに入ったのは、モンカゲロウだった。まあそれでも、イブニングのベストタイムになれば必ず風はやむ……とは限らなかった……。

17:45～18:00

この時間内にネットに入ったドリフター。流れ全体を覆うほどのモンカゲ・シャックとダン、スペントが混じって流下していたのだ。期待していたオオマダラのダンやエラブタマダラ、アカマダラのスペントは流下がなかった。

今回のヒットフライ

アカマダラ・トラップト

●フック……TMC206BL #16
●スレッド……ベネッキ　ウルトラファイン・ペールイエロー
●アブドメン……ターキーバイオット・ダークタン
●ソラックス……ヘアズイヤー
●ウイング……ヴェインファイバー・ダークダン
●インジケーター……ヴェインファイバー・パーシモン
●顔料マーカー……オリーブブラウン、セピア（フライ全体の仕上げ染用）

4月26日17時ごろライズにキャストしてヤマメが釣れたフライ。アカマダラのダンが流下している時にまず使うパターン。季節や環境によってドリフターのサイズが小さい時には18番も使う。アカマダラというのは、この日のようにハッチ流下がダラダラと長びくことも珍しくない。だから、ダンのボディーカラーもワンパターンに決めず、メス・ダンのようなライトブラウン系からオス・ダンの赤みがかったボディーカラーまで、多くのバリエーションをタイイングしておくのがおすすめである。だからマーカーがあると、ボディーカラーの変化を付けやすくなる。

モンカゲ・スティルボーン

●フック……TMC206BL #10
●スレッド……ダンビル　フライマスター6／0・ベイジュ
●アブドメン……ターキーバイオット・ブラウン
●ソラックス……ヘアズイヤー
●ウイング……ヴェインファイバー・シナモン×3
●インジケーター……ヴェインファイバー・シナモン×4
●顔料マーカー……オリーブブラウン、セピア、ゴールデンロッド
（フライ全体の仕上げ染用）

5月8日17時ごろにヤマメが釣れたフライ。これはハッチできなかったモンカゲイマージャーが水面直下を流下しているパターンだ。シンプルなフライなので、タイイングではウイングの果たす機能が重要。アブドメンを巻いたら、インジケーターはファイバー4本をV字垂直（ダンウイングのようなスタイル）にセットする。それからソラックスをセット。最後に取り付けるウイングはショートながらも、左右への傾きを防ぐバランサーでもあり喫水ラインを決め、イマージャーのドリフトスタイル、ポジションに影響する重要なパーツ。そのウイングはヴェインファイバー3本をスレッドワークで左右バック方向にセットして、ソラックス長くらいの短かめウイングにカットする。

連載―第24回―

魚顔恋図（ギョガンレンズ）

［ソウギョ］

岡村 享則＝文・写真
Text & Photography by Yukinori Okamura

おかむら・ゆきのり
1971年生まれ。東京都杉並区在住。淡水海水問わずフライで釣れる魚の顔にいつも癒されている。ここ数年は千葉県・盤洲干潟のスズキ釣りに傾倒気味。新聞や女性誌、インテリア誌、建築がメインのフォトグラファーとして活躍中。

「スターウォーズに出ていたよね？　ほらイカみたいな顔した……そうだ！　非人間型宇宙人のアクバー提督だ！」

垂れ下がった目が異常に離れているので、そんな印象さえ持ってしまう。ベジタリアンだといえば聞こえはよいものの、巨大な草食恐竜並みに水草を食べ尽くす大食漢として、場所によっては厄介者扱いされている節もある。それは中国四大家魚のソウギョだ。

たまたま知り合いからこの魚の情報を入手し、9番ロッド片手にその水域を訪ねてみると……いるわいるわ。柳の木の下に推定1mオーバーのソウギョが10尾ほどクルージングしていた。しかも、しきりにライズ(?)している。その水域の水草をあらかた食い尽くしたソウギョはこの日、風で落ちてきた柳の花を好んで食べていた。巨大魚が水面のものをむさぼり食うさまを見て興奮しないフライフィッシャーはいない。しかも相手は1mを優に超えている。

さっそく巻いてきた草っぽいドライフライ（?）を柳の木の下にキャストする。ソウギョがフライにロックオンしたことが分かった。とてもゆっくりと近づいてきて「ジュポッ」とフライを吸い込むと……「アレ～～！」。瞬く間にリールからあれよあれよとラインが引き出される。

そのトルクたるや半端ない。リールのドラッグ機能をフルに発揮させ何とかシャローに引き寄せるも「やっぱ嫌だ～」と反転。そして、またラインが引き出されていく。しかし、そのようすは巨大魚に似合わずなんともお茶目だ。そんなこんなを何度か繰り返してキャッチした暁には、一端の巨大魚ハンターを気取りたくなる。

視力が落ちても、釣りはできる。

老眼(?)小説 7選

加齢と、モノへの愛着。

今号の特集でもある「視力が落ちても、釣りはできる。」に合わせて、書店長を努める鈴木毅さんに〝老眼〟、そして〝老い〟をテーマにした小説をピックアップしてもらった。「老い＝ネガティブ」ではない痛快な海外小説などもとおして、モノと人生の関わり合いを読み解いてみる。

鈴木 毅＝文
Text by Takeshi Suzuki

すずき・たけし
1974年生まれ。栃木県小山市の大型書店、進駸堂（しんしんどう）中久喜本店店長。読書は外国文学、映画は洋画、釣りは洋式毛バリの海外かぶれ。世間が振り向かないものを専門にして生き残りをかけるニッチ至上主義者。

作中の老眼鏡の意味

ある日、担当編集者から電話がかかってきた。普段はメールでやりとりを済ませているので直接電話をしてくるということはなにか大切な用事なのかと胸がざわめく。僕の原稿に釣りの話が少ないとクレームが入ったか、それともついに連載の打ち切りが決まったのか……。電話に出てみると受話器から神妙な口調で担当が語りかけてきた。

「鈴木さんは老眼きてませんか？」

なんと失礼な。僕はまだ42である。近眼ではあるが老眼ではない。新聞の老眼鏡の広告でもあるまいし、唐突に老眼の話を振られるとは思ってもみなかった。まだアイにティペット通せますし、タイイングもまだまだイケます。デキはともかく。

よくよく話を聞いてみれば、老眼についての原稿の依頼であった。そういえばフライフィッシングの本を開くと、たまに偏光グラスと老眼鏡のセットを紹介していたり、フライ自体を視認性のよいものにしたりするといった工夫が載っていたりする。歳を重ねたフライフィッシャーのイメージでは映画『リバー・ランズ・スルー・イット』のラストシーンに登場する老齢の主人公ノーマンの姿が印象的ではあるが、結ぶ手こそ揺れているものの、老眼鏡を使わずに長年結び続けた手慣れたしぐさでフライを結ぶ姿がかっこいい。

さて老眼に関連した本となるとまったく記憶にないので困ったのだが、吉村昭の短編小説で**『老眼鏡』**（角川書店／**『再婚』**に収録）というのがあった。

結婚が決まった大学の後輩の相談を受けることになる話なのだが、それは婚約者とまだベッドを共にしたことがなく、実は

『再婚』（吉村昭 / 角川書店）

女性経験もないのでどうしたらいいか？ というものであった。主人公は自分が学生時代に下宿先の初老のおかみさんに女性を教えてもらったことを思い出し、同じ下宿先に住んでいた後輩にそのおかみさんを紹介する。果たして後輩はおかみさんのおかげで女性を知ることでき、めでたく婚約者と結婚と相成ったのである。

しかしなんと後輩は披露宴におかみさんを招待。おかみさんはスピーチをしている人に目を向けたり、料理を記したカードを老眼鏡で見たりして、後輩とのぎくしゃくとしたやり取りが印象的な、なんともけったいな物語である。

もう一作、**『銀座24の物語』**（文春文庫）という短編アンソロジーには同じく**『老眼鏡』**という村松友視の短編小説が収録されている。

ある老人がブローチのような携帯型の老眼鏡などアンティークな小道具を印象的に使い、由美子という若い女性と懇意になり、"私"である主人公からみた2人の危うい関係が語られる。結末は悲劇的ではあるが、自らも老眼鏡が必要となった主人公が、ふとその老人が使用していたものを思い出すことになるという話である。

物語のなかで高齢者を描く場合、"老眼"（＝"老眼鏡"）が老齢であること表わすひとつの記号となっている。若さを殊更に美化し、歳をとることになぜかネガティブなイメージを持つことが多いこの日本では"老眼鏡"という呼び名でさえネガティブに感じる人がいるようで、そんな背景からか今では「シニアグラス」という呼称も増えている。

『銀座 24 の物語』（文春文庫）

海外小説は"老いの勢い"も凄い

そんな日本とは打って変わって、海外小説に登場するご老人たちはなんと元気なことか。

ラッタウット・ラープチャルーンサップというタイ系アメリカ人の短編**『こんなところで死にたくない』**（早川書房**『観光』**に収録）は、息子夫婦と暮らすために祖国アメリカを離れタイで生活する老人のお話。右半身が麻痺しているため介護が必要であるが、義理の娘、つまり息子の嫁であるタイ人の女性に世話になるたびに悪態をつく。いわゆる頑固ジジイである。そんなだから孫との関係も混血児と呼び嫌いうまくいっていない。

『観光』
（ラッタウット・ラープチャルーンサップ / 早川書房）

異国の地での異文化に馴染めない孤独、思いどおりにならない身体、言葉の通じない家族。そんななかでアメリカにいる友人のこと、亡き妻のことに想いを馳せることで日々自らを慰める主人公。そんなある日、移動遊園地が来たというので家族で遊びに行くと……。悪態ばかりつくのに、故郷や友人、亡き妻が忘れられないツンデレジジイと息子家族とのほんの些細な心の共感が涙を誘う傑作である。僕はこの手の話に弱く、本書を読んで電車の中で号泣してしまった。

老人といえば『老人と海』……ではなく、**『老人と宇宙（そら）』**（ジョン・スコルジー／早川書房）というSF小説がある。75歳になった主人公ジョン・ペリーがコロニー防衛軍に入隊。そこでペリーは、脳みそは75歳のまま若い肉体に生まれ変わり、それまで人類に知らされていなかった宇宙戦争に参加することになる。しかも75歳のペリーはイケメンで女性にモテるようになるのである（老人ではない僕でもうらやましい！）。

『老人と宇宙（そら）』
（ジョン・スコルジー / 早川書房）

軍隊であるから新兵訓練をしなければならない。しかし訓練で教官である曹長の一番嫌いなものは"退役軍人の新兵"（みな75歳以上なので戦争に行ったことがある退役軍人もいるのだが、若い肉体を持った彼らは新しい戦いへの訓練に参加しなければならないのだ）。主人公ペリーは元コピーライターで、過去に15秒で書き上げた"たまには旅に出よう"というキャッチが曹長の人生を変えた一言だったと判明。結果曹長から心より感謝されたペリーは小隊長に任命される……といったユーモアが散りばられた人気SFシリーズである。

そしてお次は**『老人と犬』**（ジ

『老人と犬』
（ジャック・ケッチャム / 扶桑社ミステリ文庫）

ャック・ケッチャム／扶桑社ミステリ文庫）。かわいがっていた犬を悪ガキにふざけ半分で殺された老人が子どもへ復讐をするというお話。グロテスクな物語を得意とするホラー作家、ジャック・ケッチャムの小説であるが、実は少年を法で裁くことの難しさなど、社会派小説として、一連の著作とは一線を画した作品である。

老人は当初、子どもたちが、自らの行ないを反省してほしいと思っていただけであった。そして謝罪の言葉だけで許そうと思っていたのだが、その子どもの両親もまたロクでもない人間で、老人は法に訴えるものの法の力には限界があった。そして老人はついに実力行使に打って出る。物静かな老人が暴走してくクライマックスはさすがケッチャムと唸る小説である。

続いて暴走老人小説としてもう一作紹介しよう。**『もう年はとれない』**（ダニエル・フリードマン／創元推理文庫）は87歳の伝説の元刑事バック・シャッツが活躍するミステリー。ユダヤ人で、ノルマンディー上陸作戦に参加し、高齢者。何重にも尊敬と心配と気を遣われる人物ながら、口が悪く頑固。口を開けば「嘆きの壁の前で神に平和と健康を祈った後、あんたの家に行ってその歯を喉の奥までめり込ませてやる」と強烈な言葉が出てくる。そんな主人公バックが孫と2人で過去に因縁あるナチの生き残りとナチの金塊を捜す。

『もう年はとれない』
（ダニエル・フリードマン／創元推理文庫）

『パイド・パイパー』
（ネヴィル・シュート／創元推理文庫）

物語の途中途中には〝テレビで見た忘れたくないこと〟というバック・シャッツのメモが登場する。アメリカにおける〝男らしさ〟〝タフガイ〟の変化に言及したり、映画に登場する老人の意味は死を象徴したり……。さらには若者へ何かしらの伝達を描くだの、老人は死ぬべき運命を象徴するだの、テレビのコメンテーターが語ったことなどが差し込まれる。これら懐古めいた価値観がバック自身に時代の流れを痛感させるのかと思わせておいて、実は反省する時間なんて残ってないといわんばかりにバックは突き進んでいく、暴走老人の痛快小説である。

〝モノ〟が表現するもの

さて、最後はお待ちかねフライフィッシングが登場する老人小説**『パイド・パイパー』**（ネヴィル・シュート／創元推理文庫）である。著者は人類の終末世界を描いた有名な『渚にて』のネヴィル・シュート。1940年、ドイツ軍の侵攻が足踏みをしているなか、イギリス人のハワードは戦争で息子を亡くし、失意のなか釣りに癒しを求めてフランスに旅立つ。旅立つ前には「ペルメル通りの釣り道具屋、ハーディの店で夢のように幸せな時を過ごした」という根っからのフライフィッシャーなのだ。「フランス製のテグスはおよそ使い物にならない。フランス人は釣りを知らないから、テグスをやたらと太くする」といったイギリス人らしいフランス人への釣りネタの皮肉も飛び出す。

そんなハワードがフランスでのんびりと釣りを楽しんでいると、戦況の雲行きが怪しくなってくる。そしてついにドイツ軍はフランス領内へと侵攻。ハワードは急遽イギリスへ帰国することになるが、フランスの宿にいた国際連盟の職員の子ども兄弟をなりゆきでイギリスへ連れていくことになる。また道中にも子どもを預かり、ドイツ軍の侵攻するフランス領内を一人の老人が子どもたちの手をとりイギリスを目指す。道中、釣り道具が無事でほっとするようすは釣り人として共感すること請け合いである。

歳を重ねた人物が愛する〝モノ〟は、それだけでその人物の人生の物語がにじむ。**『もう年はとれない』**のバックは、愛車は国産であるGMのビュイック、ドイツ車それもヒトラーが立ち上げたフォルクスワーゲンに乗ることを毛嫌いし、50年代の刑事の時から357マグナム（多分コルトパイソン）を愛用し、大戦中に支給されていたラッキーストライクを87歳になった今でも愛煙する。登場する彼の愛用する〝モノ〟すべてに、彼の人生の物語が垣間見えてくるのである。そしてこれは歳を重ねた人物だけが持ちうる物語でもある。モノへの愛着とは自分の人生とともに歩んできたからこそなのである。

そんななかで〝老眼鏡〟という道具は我々の人生に関わる道具としては新参者であるといえる。生まれた時から愛用している老眼鏡なんてあるはずがない。自らとの関わりの浅い道具であるから、歳をとった実感と戸惑いだけが、道具から強く感じられてしまうのかもしれない。

しかしフライフィッシャーという人種は、道具へのこだわりが人一倍ある趣味人である。この先、ツルの部分にフライを留められるクリップが付いたり、フレームからティペットが出てきたりする老眼鏡、いやシニアグラスが登場するかもしれない。そして川でロッドやリールの自慢合戦が行なわれるのと同じように、愛用のシニアグラス談義が繰り広げられるかもしれない。

フライのアイに釣りイトを通すのは難しくても、道具への愛を貫くのが我々釣り人の性なのだから。

Reported by FlyFisher

ライズから目を離すべからず

見なくても結べる ユニノット

視力が落ちても、釣りはできる。

イブニングなどの状況では、アイにティペットを通すだけではなく、結ぶ作業でも苦労する。というわけで習得しておいて損はないのが、手さぐりで結ぶ手順である。ライズを見ながら結ぶことができるなど、老眼ではなくても役に立つ場面は多いのだ。

口を使って結ぶ方法もあり

老眼アングラーにとって、アイにティペットを通す作業は、けっして小さくない壁として立ちはだかる。が、面倒なのはそれだけではない。その後ティペットを結ぶ作業も、イライラするものである。もっともこのあたりは手先の器用さも関係してくる。必要なのは、結局のところ反復練習である。

しかしおそらく何万回、いやそれ以上フライを結び続けているベテランでも、やっぱり視力が低下するとイトを通すべき場所に通していなかったり、締め込みが甘いのに気づかなかったりというミスが生じる。最悪なのは、せっかく結び終えたところなのに、肝心の本線をカットしてしまうこと。そしてこういう悲劇は得てして、目の前でライズが起きているような、気が急いている場面で起こるものなのである。

以前、テンカラ釣りのベテランである吉田孝さんを取材していると、「手もとを見なくても結べるように、練習しました」という話をしてくれた。

結び方はユニノット。コツは端イトと、それを通す輪を常に保持し続けること。手先の器用さは求められるが、自宅でも練習は可能なので、ヒマな時にやっていれば身につくはずだ。最初は太めのイトでやると、手の感覚だけでも端イトの位置などが分かりやすい。最も基本的な結び方のひとつだが、指の運びに注目してほしい。

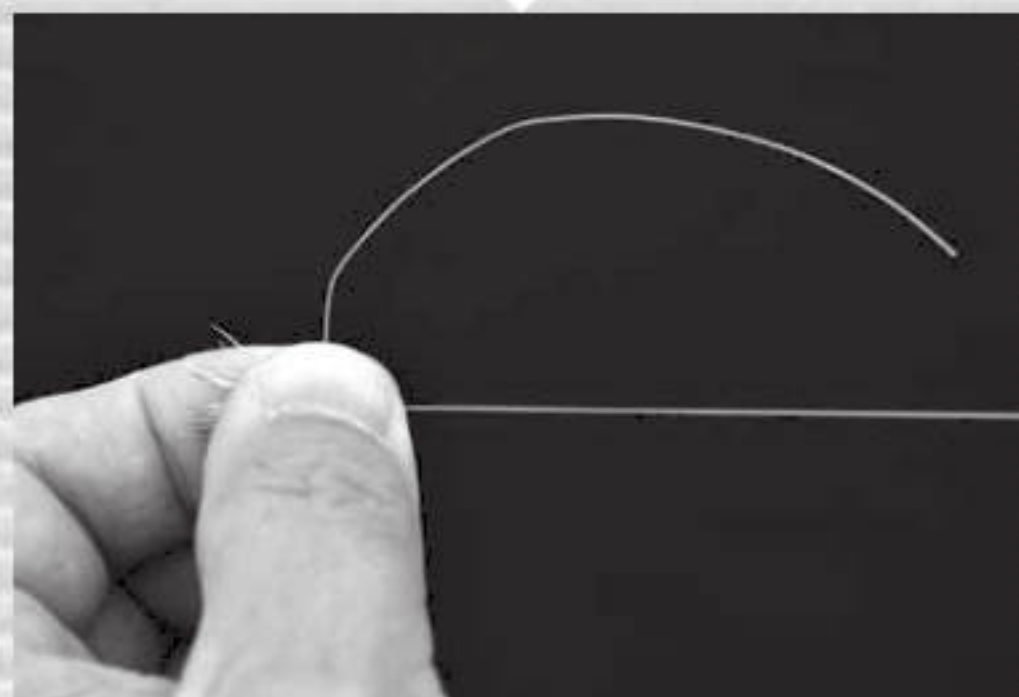
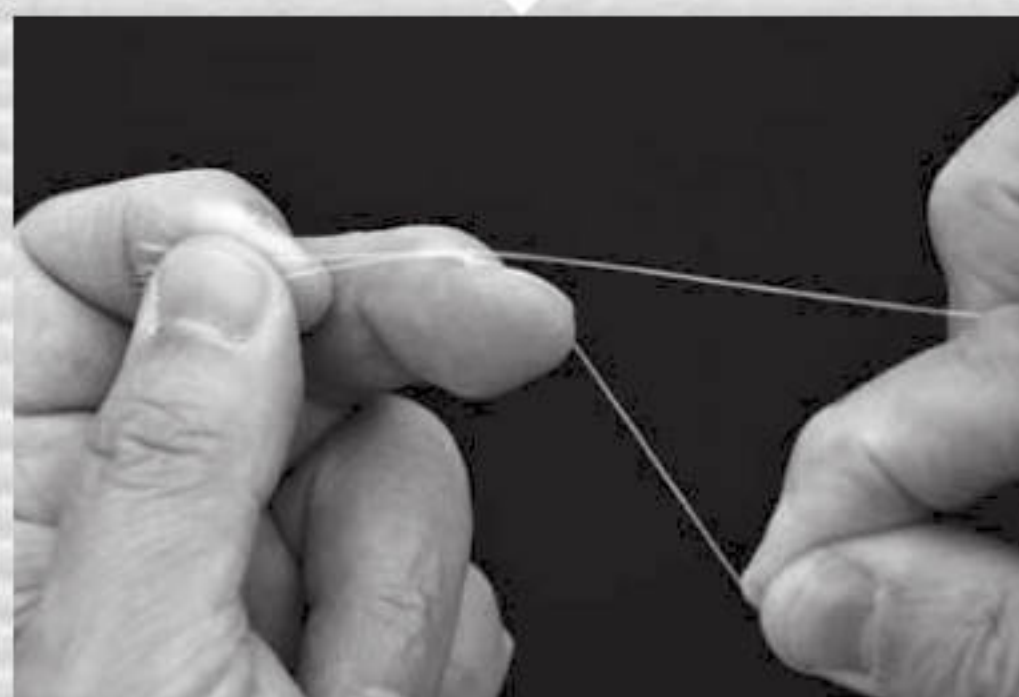
また秋田県のベテラン・フライフィッシャーである谷地田正志さんは、口を使ってユニノットを行なう。なにしろ口の中のことなので、その手順を紹介しにくいのだが……。

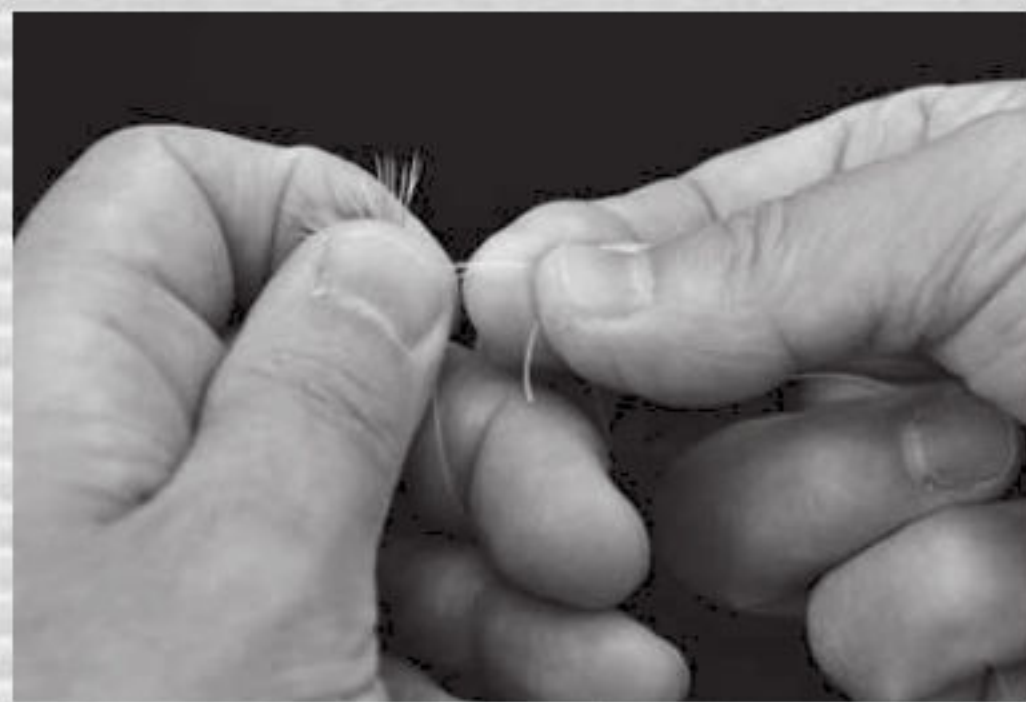
「端イトを輪の奥から手前に通してから（今回紹介する手順の⑥）、口を使って端イトを引っ張るというか……」

細いティペットを使う時でも、舌の感覚は鋭敏なため、端イトの先端をとらえやすい。またこの時に唾液で濡らすことができ、そのまま締め込むことができる。

こういった、しっかり見えなくても結ぶ手順を覚えておけば、別に老眼でなくても役に立つ。イブニングはもちろんだが、たとえばライズから目を離さずに結ぶこともできる。覚えておいて損はないだろう。

見なくても結べるユニノット

❶アイにティペットを通す。まあ、これは避けて通れないところ

❷端イトの長さは重要。というのも、長すぎると先端を指の感覚でとらえ続けるのが難しいからだ。逆に短すぎると、輪に通すのが難しくなる。何度かやってみて、自分に合った長さを覚えるしかない。目安としては7～10cm。決めたらアイを左手の人差し指と親指でしっかり押さえておく

❸左手の中指に、本線イトと端イトを掛ける。この時、イトを掛けた指とアイの距離を調整して、輪のサイズを決める

❹輪を作ったら、アイを押さえていた左手で端イトを保持する

❺右手の親指で輪を少し広げ、さらに右手の人刺し指の腹で端イトの先端を確認

❻右手の人差し指を返すようにして、端イトを輪に入れてゆく。この時、端イトが長すぎると通しにくい。輪の直径と同じか、少し短いくらいだとスムーズに通る。また写真のように、右手人差し指は輪と端イトの接点を押さえたままにしておく。そうしないとイトに張りがある場合、元に戻ってしまう

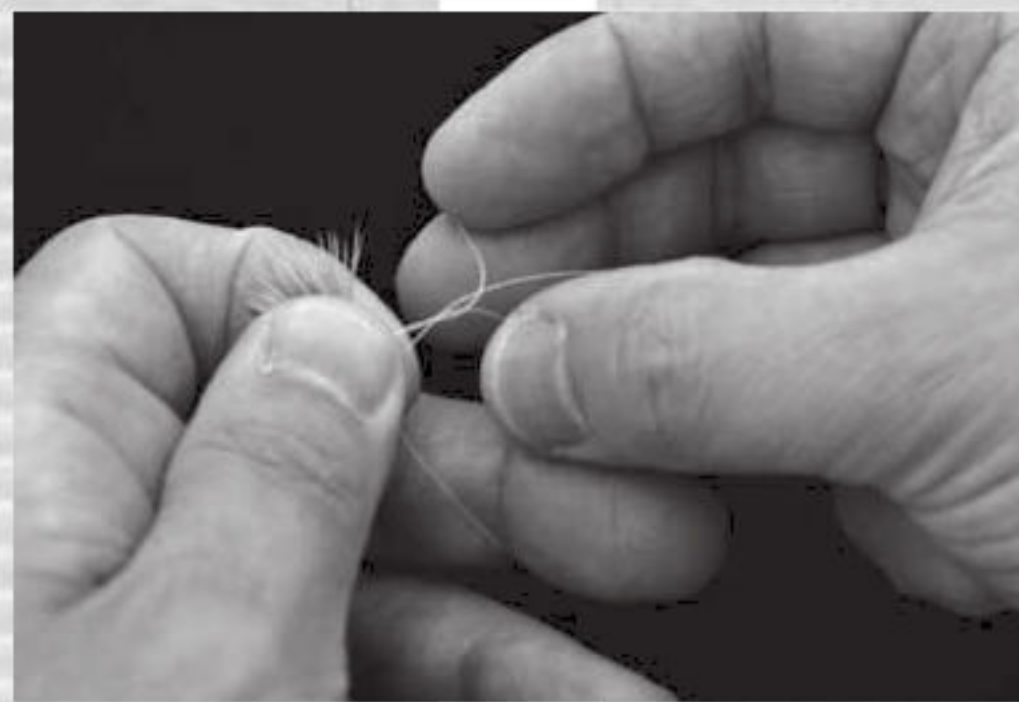
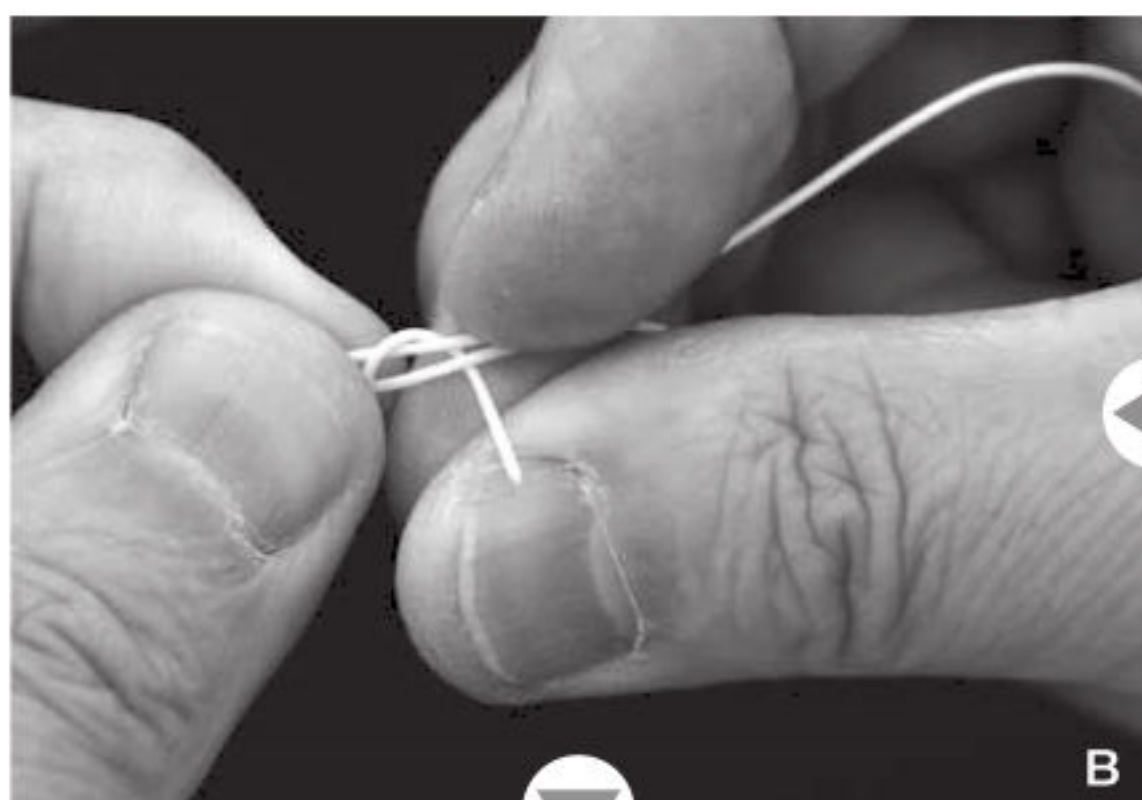
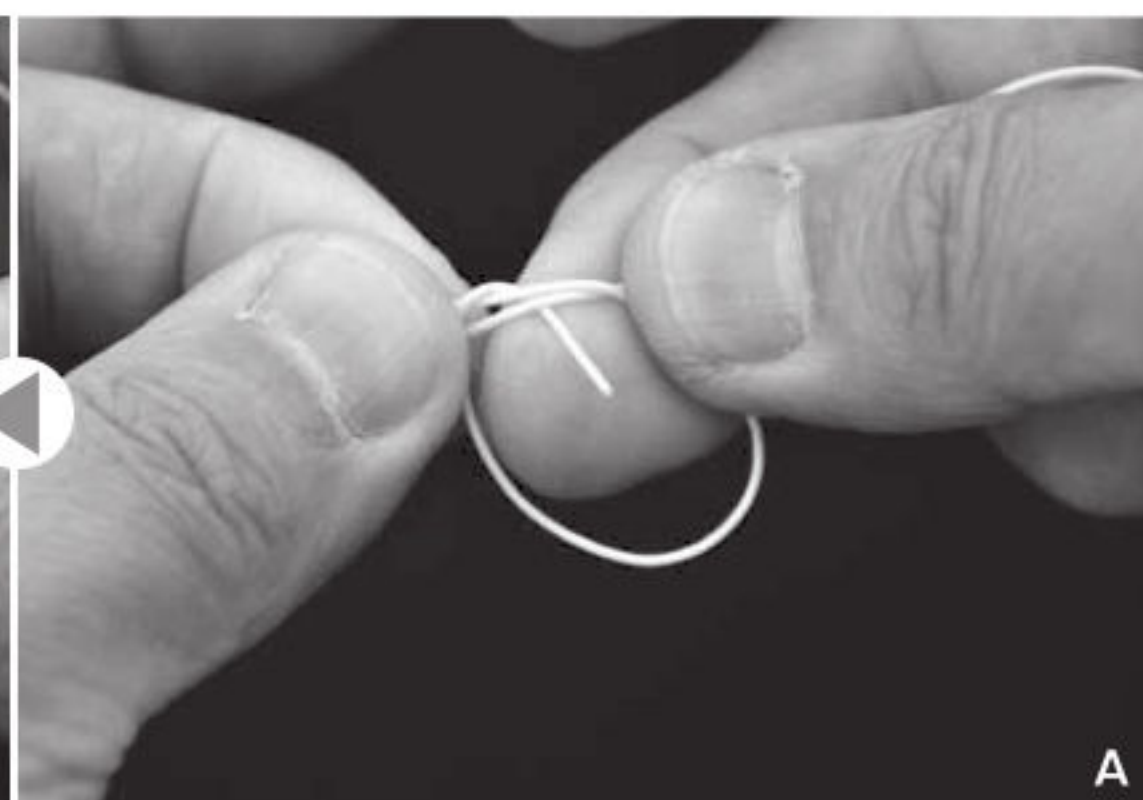
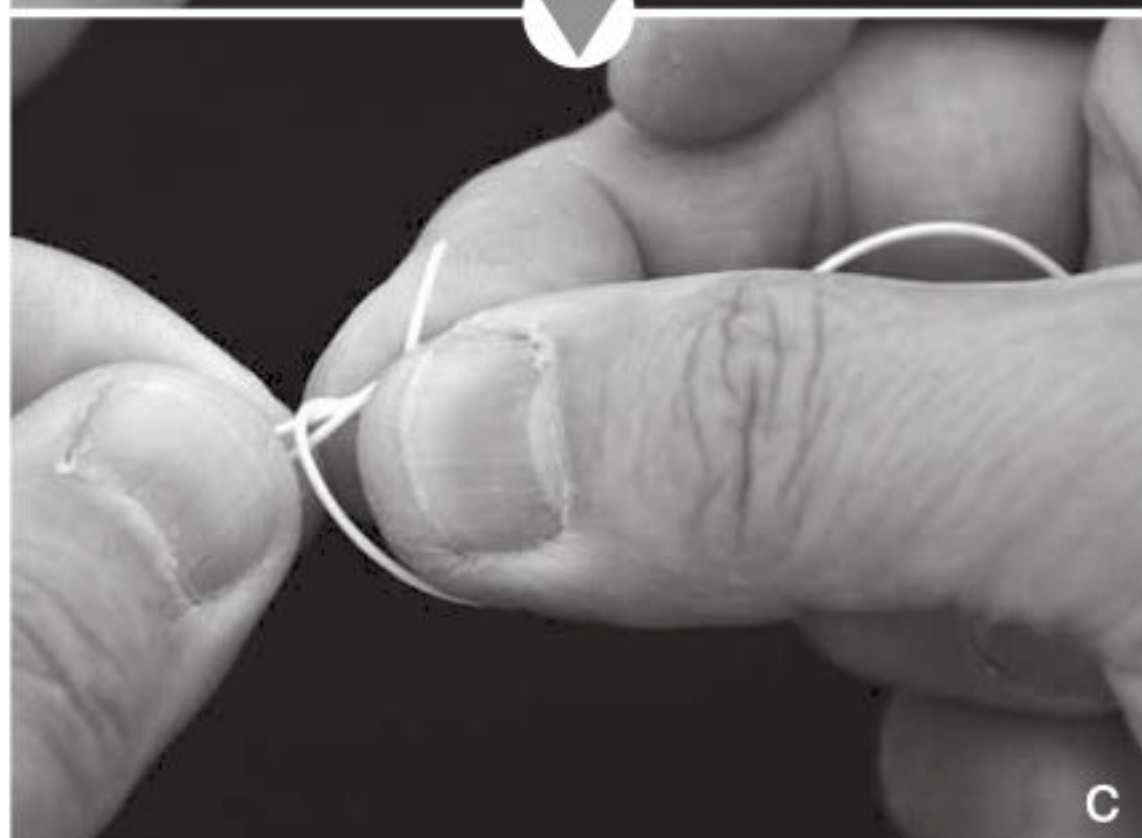
❼そのまま右手の親指の位置をずらし、端イトを押し上げるようにして保持する

❽端イトを保持した状態。これで端イトを輪に1回通したことになる。この後、輪と端イトの交差部分を親指でしっかり押さえたまま、人差し指を放し、中指で押さえ直す。器用な人なら、最初から中指を使ってもよい

見なくても結べるユニノット

❾人差し指と中指で端イトを挟む

❿再び人差し指を使って、端イトを輪に入れる。このようにして輪に通していく

⓫回数を重ねるとイトが戻ろうとする力が増す。そのためイトの交差部分はしっかり保持しなくてはいけない

⓬以上、輪に端イトを通す手順を3〜5回繰り返したら、唾液で濡らしてから端イトを締め込んでいけば完成。余りはカットする

キモはここ!

端イトを通す手順を拡大

A 肝心なところなので、ちょっと太いイトで再度解説しておく。まず右手人差し指で端イトを輪に押し込む(⑥の手順)

B 親指をずらして、端イトを押し上げるようにする。この時、輪と端イトの交差部分を中指か人差し指で押さえておく

C そのまま親指と中指で、輪と端イトの交差部分を保持。こうすると、次に端イトを人差し指で輪に押し込む作業までがスムーズになる

Reported by FlyFisher

備前貢さんのフライに学ぶ
アイを裸にするだけで……？

昨年12月号で掲載された備前貢さんの記事で、思わず膝を打った方は多かったかもしれない。ほんのちょっとした工夫なので、アイにティペットを通しにくいと感じている人は、ぜひ試してみては……。

Photography by Mitsugu Bizen

もくろみとは少し違ったけれど

4月号のフック特集取材で、島崎憲司郎さんのご自宅を訪ねた際、以前TMCフックにラインナップされていた『クイックアイフック』の話を聞いた。需要はありそうだが、今のところ復活していない。デザインをやり直して登場する可能性はあるかもしれないが、なかなか道のりは険しそうだ。

道具などの歴史に精通している大木孝威さんに、『クイックアイフック』が登場したころのカタログを見せてもらったが、今見ても気になるアイテムだ。せめて定番の製品だけでも登場してくれれば、40代以上の釣り人には心強い味方になりそうだが……。

しかし、ない物ねだりをしてもしょうがない。昨年12月号で紹介した備前貢さんの話が、手軽にできるうえに老眼世代には役立つアイデアなので、ここで紹介しておきたい。

備前さんはもともと、アダムズなどのパラシュートパターンが引っくり返って着水するのを防ぐため、ポストをフックシャンクの中央寄り、通常よりも後ろ側に立てていたという。結果、アイ周辺はフックシャンクがむき出しになっていたが、それが年配の方々にすこぶる好評だったという。理由は備前さんのもくろみとはちょっと違い、ティペットをアイに通しやすいから、だった。当時の記事を引用すると……。

（前略）ある日、その方やお仲間の皆さんと釣りにご一緒させていただいた晩の宴席にて、その日の竿頭だったその方がすこぶる上機嫌でおっしゃった。

「いや～、ビゼンくんの巻いてくれたパラシュート使うようになったら、もう余所のフライは使えないね。最高ですわ～」

おおう……とどよめく皆さん。ドッキ～ンとときめくワタシ。この時のウレシハズカシの瞬間の思い出はいまも鮮烈かつ鮮明だ。我がフライに対して、そのようなお褒めのお言葉をいただくなんて……。

「あの、ぼくのパラシュートのどこがよかったのでしょうか？」

おずおずと、ホッペ赤らめながら問うてみると、その方はズバッと一言で言い切ったのだった。

「なんといっても、ティペットをフライに通しやすい！」

内心思わずずっこけちゃうワタシ。

「え、それほんと？　どれ、ビゼンさんのフライ見せてください」

そのお言葉に、なぜだかガッポリ食いついた還暦過ぎのお仲間の皆さん。

「ホレ、ここ、このアイのところがビゼンくんのフライはこうやって裸になってるから、ティペットがアイにスルッと通るんだよな～。もうどれだけ助かることとか」

おおう……とどよめくお仲間の皆さん。

かくして、ありがたくもこの場で皆さまよりたくさんのご注文を承ってホクホク、ではあったんだけど……胸中とっても複雑でした。そんな目的のために細工したのではなく、あくまでもフライのバランス向上を目指していたのに……。（後略）

たしかにアイ周辺にマテリアルがあって、場合によっては飛び出した繊維などが穴に被っていると、ティペットを通しにくい。たったこれだけの工夫で、イブニングのわずらわしさはかなり解消されるのである。

実際、ビーズヘッド・ニンフなどアイがしっかりむき出しになったパターンは、さほど苦労せずにティペットを通せる。というわけで記事を読んだ記者も、パラシュートパターンで試してみると、その効果は実感できた。簡単に実践できることなので、悩んでいる方はやってみるとよい。

『クイックアイフック』が掲載されたティムコのカタログ。アイの一端が開いており、そこにイトを引っ掛けるようにして結ぶことができる

虫の写真募集中！

釣り人のための「水生昆虫データバンク」プロジェクト

「あの時釣った尺上が食っていた虫は何か知りたい」、「いつもこの時期に大量流下するアレは、いったい何なのか？」などの疑問に刈田さんが答えます。編集部にEメールまたは郵送で、ストマックの内容物や流下してきた昆虫の写真を送っていただければ、刈田さんに同定してもらい、誌面で発表します。

写真送付の方法 Eメール、または郵送で、撮影した昆虫の写真をお送りください。「流下していた」、「ストマックの内容物」、「付近を飛んでいたのでつかまえた」など、釣りに役立ちそうな昆虫写真ならなんでもOKです。以下の情報を明記のうえ、下記送付先まで送ってください。①地域（河川名、エリアなど）、②時期（撮影年月日、できれば時間帯も）、③撮影時の状況（ストマックなのか、流下していたのか、どんな流れなのか、など）

●**送付先** Eメール……flyfisher@tsuribito.co.jp（件名に「水生昆虫データバンク」と明記してください）
郵送……〒101-8408　東京都千代田区神田神保町1-30-13
FlyFisher編集部　水生昆虫データバンク係

読者参加型虫鑑定企画 #12

この虫が気になる！

大量流下しているけど種類が分からない……
尺ヤマメのストマックに謎の虫がたくさん……。
そんな水生昆虫の疑問、刈田敏三さんが解決します。

刈田 敏三＝解説
Comments by Toshizo Karita

本誌では現在読者の方が釣った魚のストマック写真を募集中。名前の分からない水生昆虫の鑑定はもちろん、「この魚はどのような行動していたのか」、「なぜこのようなストマック内容になっているのか」……などなど、魚の捕食物から読み取れるすべてを刈田さんが解説。

今回は昨年5月、岐阜の渓流で釣れたヤマメのストマック。テレストリアル・パターンのブラインドで釣れた1尾だが、ストマックを見ると、かなり雑多な内容になっていた。

Q さまざまな虫が入っていますが、どこに注目すべきでしょうか？

昨年の5月に岐阜の秋神川で手にした、26cmほどのヤマメのストマックです。木々が覆い被さった流れの中から出てきました。テレストリアルから大型メイフライ、ニンフまでさまざまなものを食っていたようですが、これも盛期ならではのストマックでしょうか。ちなみに、ライズこそ見られませんでしたが、釣れた時はエルモンヒラタ（エルヒラタ）カゲロウのハッチがありました。

テレストリアルのスペントパターンで釣り上がって反応したヤマメのストマック

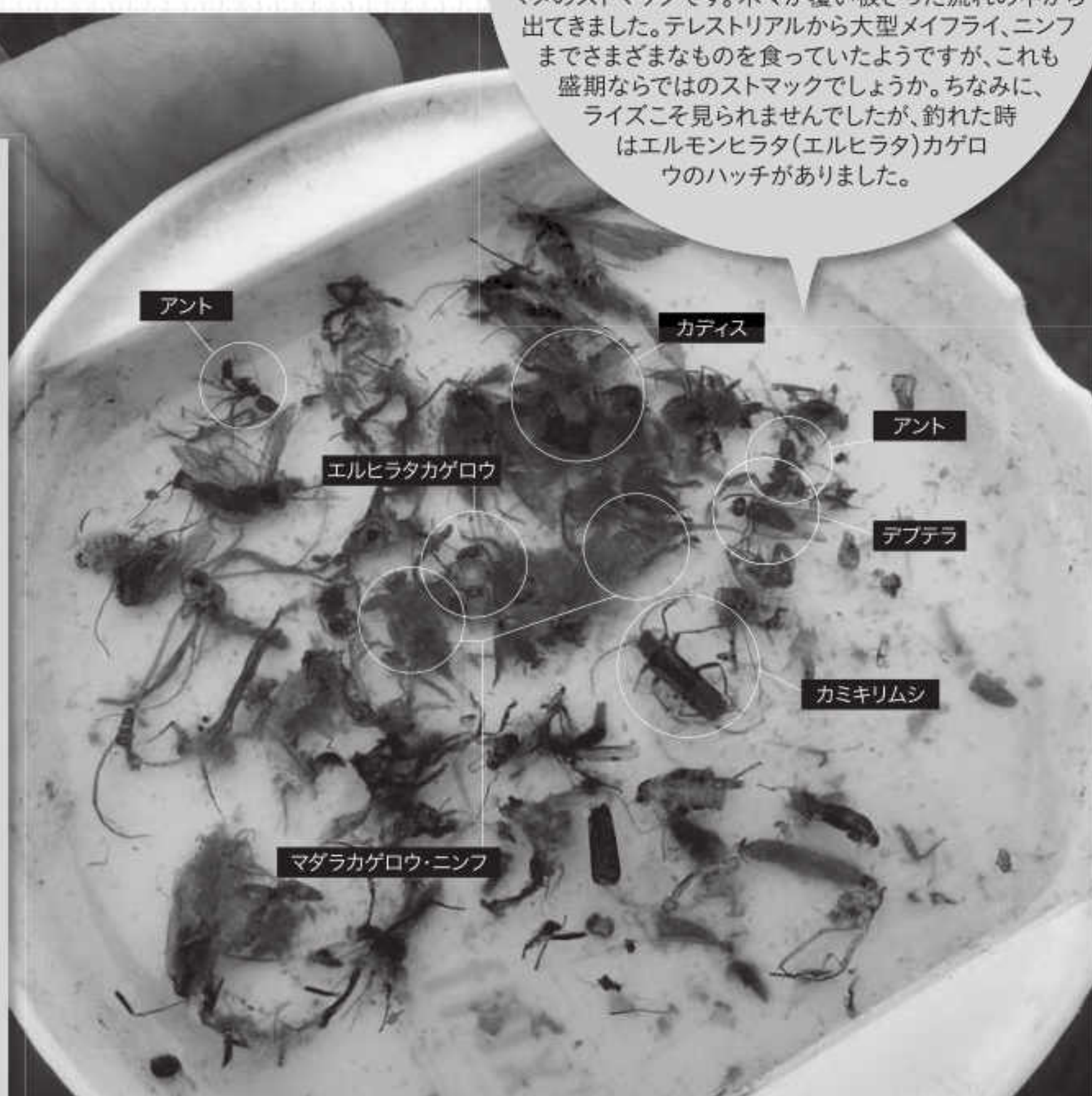
A 夕方にコオノマダラカゲロウがハッチの予感

初夏になると、ドリフターが多種多様になり、刻々と変化して悩ましくも楽しくなります。しかもそれが日中の現象だから面白い。これはつまり、水生昆虫だけでなく、日中に動きが活発になるテレストリアルがポトポト落ちるからでもあります。

この捕食物を見ても、センターの最も目立つカミキリムシは食べたばかりのようす。そのすぐ左や右上にいるデプテラ、ほかにアント2匹も捕食されたばかりです。

内容物全体から気がつくことは、体長8㎜、全長12㎜くらいのチョコレート色系のカディスが8匹以上捕食されていることにかなりドキリとします。状態を見ると、ほとんどが午前中の時間帯を中心に捕食されているようですが、センター上の個体だけは、昼過ぎくらい食われたと思われ、かなりフレッシュな捕食状態です。このカディスにマッチするパターンがあれば、楽しい展開になりそうですね。

ヒラタカゲロウに関しては、センター左に、エルヒラタっぽいソラックスが見えます。ただ捕食後時間が経っていて、こちらも午前中の捕食だと推測できます。

さて一番の注目キャラは、カミキリムシの上とその少し左側で腹側を見せているマダラカゲロウ・ニンフです。その赤っぽい腹面体色から、コオノマダラカゲロウの羽化直前ニンフかイマージャーだと思われ、捕食時間も最新のものです。これはつまり、この日の夕方に、コウノマダラのハッチがある可能性が高いと判断できるでしょう。

DATA

撮影場所：秋神川（岐阜県）
撮影日時：2016年5月10日　午後2時ごろ
投稿者：桃井博之さん（愛知県）

つり人社の
BOOK

お求めはお近くの書店、または釣具店で。
または、つり人社ホームページ（tsuribito.co.jp）からもご購入いただけます。

『「いい川」渓流』シリーズ

●青森／秋田　●山形
●岩手　●新潟
●栃木／群馬　●山梨／静岡
●長野　●岐阜

つり人社書籍編集部　編
A5判並製144P
定価：本体1,400円＋税

穏やかな里の渓、大もの潜む本流、ダイナミックな源流を取り混ぜ、思わず行きたくなる個性あふれる川を詳解！

　各釣り場に精通する釣り人が原稿を執筆。穏やかな里の渓からダイナミックな山岳渓流まで、思わず行きたくなる各県内の「いい川」をピックアップ。主な水系別に分かりやすくまとめました。東北、北関東、甲信越、東海地方の渓流群をカバーするラインナップが揃います。

　各河川は、地図と写真、原稿の３要素で解説。地図は広域アクセスMAPと河川図のほか、場合によってはさらに拡大図も掲載して現地のようすをより分かりやすく見られる工夫をしています。

　インターネットの情報が氾濫する現代だからこそ、信頼のおける釣り人によるていねいな釣り場ガイド＝本書は、はじめての釣り場では頼もしい「案内人」になってくれること間違いなし。もちろん、これまで経験のある釣り場でも新しい発見があることでしょう。

エリアごとの解説に合わせて、広域図と詳細図を組み合わせたマップで、初めての川でも安心の内容

FlyFisher's DVD

お求めはお近くの書店、または釣具店で。
または、つり人社ホームページ(tsuribito.co.jp)からもご購入いただけます。

最初にフライを巻くために必要なテクニックから、
キャスティングの習得方法、
そして実際にフィールドで実践したいテクニックまで、
"上達のための視点"が詰まった映像集。

『イトウ戦記』

「幻の魚」と呼ばれて久しい北海道のイトウ。わが国最大の淡水魚にして、ネイティブトラウトであるこの魚に魅せられたフライフィッシャーたちを追いかけました。ロケ地は猿払川と天塩川。「石狩川イトウの会」の会長を務める大林照夫さんと、名寄市在住のフィッシングガイドの千葉貴彦さんに焦点をあて、この釣りの厳しさ、それゆえの楽しさ、そしてテクニックを紹介します。

出演:千葉孝彦、大林照夫　収録時間:65分
価格:4,600円+税

『ザ・スカジットキャスト』

アメリカ北部、ワシントン州スカジット・リバーで生まれたスカジットキャスト。このスティールヘッドを釣るために生まれたテクニックは、その利便性の高さゆえに瞬く間に広まりました。本作では、このテクニックの考案者であるエド・ワード氏をはじめ現地エキスパートたちと強力なコネクションを持ち、スカジットキャストを熟知している仲野靖さんに出演をお願いし、分かりやすく解説していただきました。

出演:仲野靖　収録時間:75分
価格:3,800円+税

『ベーシック オブ ロングティペット・リーダー』

全長20フィート以上のリーダーを使い、ドライフライがナチュラルドリフトする距離を長く稼ぐことができれば、釣れる可能性が高くなる……そんなテクニックを習得するためのDVDです。長いシステムの扱いの煩わしさなどを解消するためのノウハウを多数紹介しており、これから挑戦してみたいという人はもちろん、再びトライしてみたいという人にもおすすめの内容です。

出演:渋谷直人　収録時間:90分
価格:3,800円+税

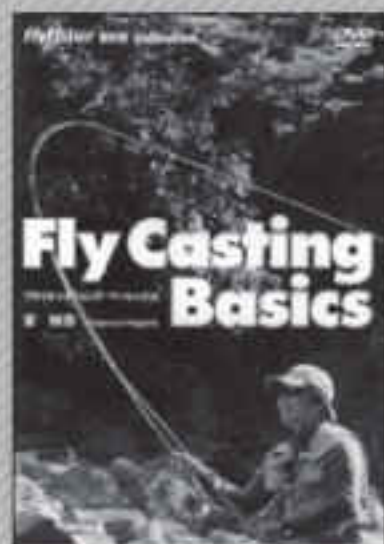
『安田龍司 本流ウエットフライ入門』

渓流や本流で大きな魚をウエットフライで釣ってみたい。タックルからラインシステムまで多くの情報があふれるなかで、これまでにウエットの釣りをやったことがない人が、今から始めるのに必要なベーシックを無駄なく解説しています。シングルハンド・ロッドの釣り、さらにはダブルハンド・ロッドを使った釣りへのステップアップを分かりやすく整理し、「沈める釣り」の基礎力を身につけます。

出演:安田龍司　収録時間:95分
価格:3,400円+税

『One on Stream V ライズハンティング(後編)』

栃木県鬼怒川を舞台とし、「後編」では4～5月の釣りを追いかけます。今回はライズを繰り返す尺ヤマメを前に苦悩する渋谷直人さんに焦点を当てます。アカマダラ、エラブタマダラ、トビイロコカゲロウなどが複合ハッチするなかで、フライを交換しながら対峙するライズ。刈田さんの流下物チェックの解説とともにお送りします。

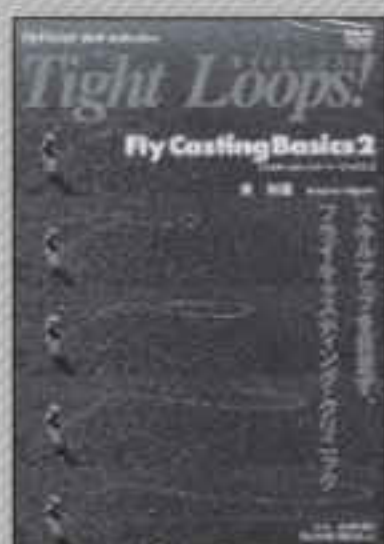
出演:渋谷直人、刈田敏三　収録時間:100分
価格:3,800円+税

『フライキャスティング・ベーシックス』

誰でもフライフィッシングが楽しめる、IFFF公認マスターインストラクターによる、バーチャル・キャスティングスクール。フライフィッシングには、キャスティングの習得が欠かせません。この作品では、インストラクターとして全国で人気の東知憲さんが、これからフライフィッシングを始めたい人に向けて、レクチャー。これを見れば、どなたでもキャスティングが楽しくなるはずです。

出演:東知憲　収録時間:55分
価格:3,400円+税

『One on Stream VI チェイシングレインボー』

ドライフライの名手、渋谷直人さんが使うのは、4番ロッド、ドライフライのみ。得意のロングティペット・リーダーを駆使し、今やプレッシャーの高くなった北海道のフィールドに挑みます。収録中に手にした最大は57cm。魚に負担を掛けず、短時間で取り込むための基本テクニックなども解説し、より確実に大ものを手にするために必要なノウハウを詰め込みました。

出演:渋谷直人　収録時間:90分
価格:3,800円+税

『タイトループス!』

フライフィッシングを楽しむためには、効率のよいキャスティングが欠かせません。そして、効率のよいフライキャスティングとは、ループの幅がタイトで、とても美しいものです。前作「フライキャスティング・ベーシックス」に引き続き、人気インストラクターである東知憲さんの指導で、ダブルホールの原理、腕の動かし方、短期間でマスターするための練習方法までを解説します。

出演:東知憲　収録時間:97分
価格:3,400円+税

『マクロフライタイイング』

日本屈指のフライタイヤー、備前貢さんのタイイングテクニックをクローズアップで撮影しました。フライを美しく、そして丈夫に巻くための、備前さんならではのテクニックを解説します。ソフトハックルを抜けにくくする小技、フェザーウイングを美しく作る応用技、ディーウイングを簡単に留めるための新技など、初心者だけでなく、上級者も納得のテクニックを多数収録しています。

出演:備前貢　収録時間:195分
価格:4,600円+税

『フライタイイングのベーシック Vol.2』

「vol.1 タイイング入門」に引き続き、これからフライタイイングを始めたいという人のために、6本のタイイングを収録。工程はすべてタイヤー目線からのクローズアップ撮影なので、まるで自分が巻いているように映像を楽しむことができます。それぞれのテクニック紹介では、渓流で、管理釣り場ですぐに役立つ、実用的なフライばかりをセレクトしました。

出演:嶋崎了　収録時間:99分
価格:3,200円+税

『見て納得! 初歩からのフライフィッシング』

カタカナ用語が多く分かりにくいと思われる部分もあるフライフィッシングも、最初の1尾を釣るためのプロセスは実はとてもシンプルです。本作では、これまでに多くのビギナーの相談に乗ってきた講師が、タックルの準備をし、魚の居場所を覚え、そしてフライキャスティングを身につけて、水辺で実際に釣りをするまでのプロセスを分かりやすくレクチャーします。

出演:白川元　収録時間:75分
価格:2,500円+税

丸ごと一冊、渓流。

今年の『渓流』春号では、
サオ、イト、毛バリだけで遊べるテンカラ釣りを特集。
毛鉤釣りのさまざまなスタイル、楽しみ方に迫ります。
また源流釣行記事も、たっぷり掲載。
2017シーズン釣行プランの参考にしてください。

別冊つり人 vol.434
渓流　2017 春
A4変形判
定価　本体1800円＋税

お求めは書店、釣具店、または つり人社営業部（☎03・3294・0781）まで。
つり人社ホームページ（www.tsuribito.co.jp）からもご注文いただけます。

6/3-4 SAT-SUN

ベストシーズンの荒雄川、役内川で渋谷直人さんのスクール開催

宮城県鬼首高原のペンション「ON-THE-ROCK」で6月、渋谷直人さんを講師に招いてフライフィッシングスクールを開催する。ベストシーズンを迎える宮城県の荒雄川、秋田県の役内川を舞台に、ライズ攻略法や、トリックキャストを駆使して渓魚をねらうテクニックを解説する。

1泊2日のコースで、夜は渋谷さんのタイイングデモも実施予定。詳しくは、同ペンションのホームページにも掲載中。

開催日　6月3日(土)～4日(日)
参加費　2万6900円(1泊4食、懇親会などすべて含む)
●ON-THE-ROCK
☎0229・86・2030
www.on-the-rock.com/

良型が出る可能性も高い実釣スクール。夜はペンションにてタイイングデモを披露

東京・多摩川でキャスティングの基本を学ぶ

プロショップ「サンスイ」では、これからフライフィッシングを始めたい、またはフライキャスティングがよく理解できないなどという疑問を持つ初級、中級者を対象に、シングルハンドとダブルハンドのキャスティングスクールを実施している。

シングルハンドはオーバーヘッドキャスティングを基本にダブルホールの習得までを目指す。また、ダブルハンドではオーバーヘッドからDループを使用するさまざまなキャストスタイルを参加者の要望に合わせレクチャー。同スクールは基本的に毎月1回開催しており、空き情報など詳しくは同ショップのホームページ(ウエブショップ)に記載されている。

次回開催日時　6月17日(土)　※ダブルハンドについては6月11日(日)にも開催予定
開催場所　東京府中市多摩川(府中市「郷土の森」近く)
参加費用　5400円(税込)
●サンスイ池袋店
☎03・3980・7270
●サンスイ渋谷店
☎03・3400・3698

スクールは7、8月を除く毎月第3土曜日に実施(ツーハンドは不定期で他に1日実施)

釣りビジョン6月のおすすめ番組は「ハイパーエキスパート」

今回の「ハイパーエキスパート」は、杉坂研治さんが、意外にもこれまで一度も訪れたことがないという栃木県の中禅寺湖に挑戦。ホンマス、レイクトラウトなどこの湖特有のターゲットを、どのような思考で探っていくのかをレポート。これまで培ってきたテクニックを持ち込み、初めてのフィールドを攻略する。

放送日　6月23日(金)午後9時～10時
●釣りビジョン
www.fishing-v.jp

これまでの経験を中禅寺湖にぶつける。その結果は?

日釣振からのお知らせ

「親子釣り教室 ルアーフィッシングに挑戦!!」を開催

当日は雨だったが、参加者たちはみな初めてのルアーフィッシングの面白さを満喫

日本釣振興会・東京都支部では、今回初めて東京都練馬区にある「としまえん」内にあるフィッシングエリア（プール）において、「親子釣り教室 ルアーフィッシングに挑戦！！」を実施。16組38名の親子がルアー釣りにチャレンジしました。

この日はあいにくの雨で、しかも最高気温が10℃に満たないという、参加者の方には大変気の毒な条件のなかでの釣りでしたが、皆さん雨にも寒さにも負けず、先生の教えたとおりにルアーを水中で動かし続けた結果……なんと皆さんほぼ初めてのルアー釣りにもかかわらず、ニジマスのほか、なかには40㎝を超えるタイガートラウトなどを釣りあげたご家族もいらっしゃいました。冷たい雨のなか、みなさんに頑張っていただいてよかった、とスタッフ一同ホッとしました。

日釣振では全国にある各支部においてさまざまな釣り教室を計画しており、6月10日（土）には川崎市多摩区稲田堤において「多摩川フィッシングフェスティバル」も開催されます。開催日や場所については、日釣振ホームページでご確認いただくほか、各県にある日釣振支部にお問い合わせください。

●日本釣振興会
☎03・3555・3232
(FAX) 03・5542・2941
www.jsafishing.or.jp
公式 Facebook
www.facebook.com/nichoshin

今シーズンも東北の渓で、名手たちのスクールを実施

磐梯のペンション「おやど風来坊」では、今年も6月から7月にかけて、渓流の名手たちを講師に迎えた実釣スクールを開催。6月は里見栄正さん、岩井渓一郎さん、7月には岡本哲也さんのレクチャーが開かれる予定。南東北の渓流で、最も渓流の釣りが調子よくなるシーズンに開催される。

いずれのスクールも1泊3食付きで、ペンションを拠点に日帰りできる周辺の渓流で実施される。当日は朝7時にペンションに集合し、イブニングまでレッスンを受けることができる。また、翌日の朝食後も半日ほどレッスンを受けることが可能。詳しくは同ペンションのホームページに記載されている。各スクールとも定員は10名程度なので、申し込みはお早めに。

第1回　6月3～4日（講師　里見栄正さん）
第2回　6月17～18日（講師　岩井渓一郎さん）
第3回　7月1～2日（講師　岡本哲也さん）
参加費　2万7000円（1泊3食付き・レッスン費・遊漁料込み）

●おやど風来坊
☎0241・32・3077
www.flybow.jp/

東北の渓を釣り歩いた経験も多いエキスパートから、マンツーマンでレクチャーが受けられる

水産分野における産業管理外来種に関する関係者との意見交換会開催

4月26日、東京都港区新橋にある航空会館で、産業管理外来種に関する意見交換会が開催された。産業管理外来種というのは聞き慣れない名称だろうが、釣り人になじみの深い魚類ではニジマス、ブラウントラウト、レイクトラウトが含まれる。もともと日本にいた在来種ではないが、長年私たちが親しんできたこれらの魚の将来について話し合われた。

「産業管理」という言葉が付くのは「産業又は公益性において重要で、代替性がなく、その利用にあたっては適切な管理が必要」な種だということ。したがって、一方的に排除し、国内から追い出せという方針をとるわけではないようだ。外来種ではあるが、釣りなどで利用できるようにしたいという含みを持たせた内容だが、その解釈は微妙だ。

会場で配布された「水産分野における産業管理外来種の管理の考え方（案）」の遊漁関係の項目では、「原則として、公有水面における産業管理外来種の放流は自粛する」とあった。だがその後に現時点で放流などがされている場合は、他の生物などへの影響を考慮しつつ、放流も認められるという内容の文章がついている。こういった部分も「原則自粛」が優先されるのか、現状のような利用が可能なのかは微妙。つまり今後の動向に注目していないと、どう転ぶのかは不透明だ。

今後はパブリックコメントなどを募集する予定もあるようだが、そういった場で釣り人も意見を出していくべきだろう。

●水産庁ホームページ
http://www.jfa.maff.go.jp

親子をテーマにした写真コンテスト

応募方法や過去の応募作品などは特設ページに掲載中

オリンパスでは、「親子の日」応援企画として〝親子〟をテーマにした写真コンテストを開催中。メインの被写体を「人物」（親子）として撮影したものであれば、どのようなものでもOK。オリンパスのフォトパス会員登録者が応募対象者となる（フォトパス会員は誰でも登録可能／プレミア会員以外は無料）。応募方法は特設ページから行ない、受賞作品は今年9月、オリンパスギャラリー東京に展示される。さらに賞品としてミラーレス一眼レフカメラ、防水コンパクトデジタルカメラなどが用意されている。

応募期間　5月11日（木）～7月24日（月）

●「親子の日写真コンテスト」特設ページ
fotopus.com/photocon/oyako2017/

インストラクターとの釣りツアーが当たる！

オリジナルのツアー＆賞品が当たるキャンペーン

期間中にシマノ商品を1点5000円（税込）以上購入した人を対象に、「IDナンバー入り応募カード」がもらえるフェアを開催中。応募者のなかから抽選で「インストラクターと行く絶景ドリームツアー」（特賞）やシマノオリジナルグッズなどが当たるプレゼントフェアとなっている。オリジナルグッズでは、ロゴ入りのLEDライト（レッドレンザー）や高級出刃包丁などが用意されている。

キャンペーンはインターネットの特設ページから応募することができ、詳しくは同社ホームページに記載されている。

フェア開催期間：2017年5月1日（月）～7月2日（日）

●シマノワンダフルフェア事務局
☎06・6754・4620
fishing.shimano.co.jp

すずき・たけし
1974年生まれ。栃木県小山市の大型書店、進駸堂（しんしんどう）中久喜本店店長。読書は外国文学、映画は洋画、釣りは洋式毛バリの海外かぶれ。世間が振り向かないものを専門にして生き残りをかけるニッチ至上主義者

プロのブックマーク
釣り好き書店長のBOOK&CINEMAレビュー

鈴木 毅＝文
Text by Takeshi Suzuki

「釣り人の甘えが許される春の魚と○○川」というキャッチコピーを、僕は川に立ちながら思いついた。解禁を迎え、まずはひと釣りといつもの川へ。春は魚が寛容で優しく、そして釣り人へのサービス精神に甘えられる大好きなシーズンである。

川にそれぞれ個性があるのは釣り人には周知のことながら、その個性を一言で表わすとなかなか難しい。「魚はいづこや○○川」、「魚は見えるが釣れるかどうかはあなたしだい」、「この川での釣りはまさに修行」とか、僕が考えるとなぜかネガティブなコピーが出てきてしまうのは、やはり釣りの腕が影響してくるのだろうか。

ふと目に留まった『内容見本にみる出版昭和史』なる古書を買って読んでみると、これが面白い。昭和初期、それまで児童向けの書物がまだわずかしか出回っていなかった時代に、北原白秋が『日本児童文庫』という全集の企画を弟の出版社アルスから刊行することになった。ところが新聞広告を出したところ、その広告の下段になんと菊池寛と芥川龍之介責任編集の『小学生全集』（興文社・文藝春秋）なる、ほぼ同じような企画の広告が載っているではないか。いまでこそ似たような企画が別の会社から出版されるのは当たり前のようになっているが、出版黎明期ではこれが出版史に残る大スキャンダルに発展してしまうのである。

白秋は「模倣」、「邪悪であります」と菊池寛を非難すれば、対する菊池は「2年越しの企画」、「非常に気の毒です」といなす。

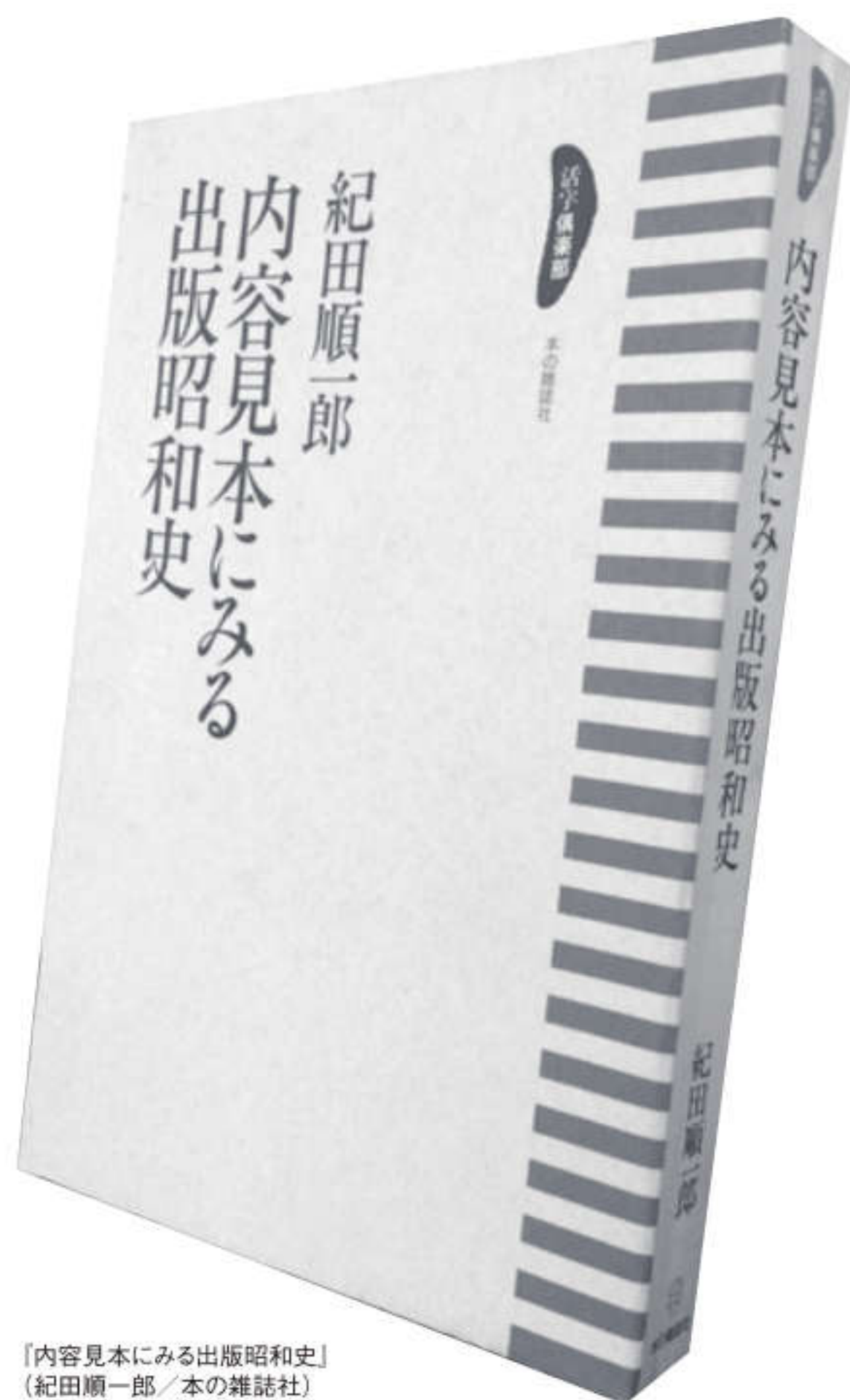
その後の内容見本のキャッチコピー合戦がまた目を見張る。『日本児童文庫』では「日本の子供に春が来た」、「兄弟姉妹が仲よく読める　模範的児童図書館の出現」といったキャッチコピーと後藤新平や学校長の本書への美辞麗句が。対する『小学生全集』も負けじと「君に忠　親に孝　よく勉強しましょう　よくあそびましょう　みんな　揃って　小学全集を申込みましょう」、「編者は日本一の文豪　筆者は最高級の名家　画伯は第一流の巨匠　印刷は世界一の機械製本は未曾有の美装　定価は破天荒の廉価」と今では歯が浮くような言葉がこれでもかと並ぶ。今のように広告が洗練されてない時代のキャッチコピーの、時に正直、時に大言壮語な言葉選びは読んでいて微笑ましくなる。

果たして刊行後に白秋の『日本児童文庫』側が『小学生全集』の興文社・文藝春秋を信用毀損、営業妨害で東京地裁に提訴。のちに示談、不起訴となるものの、結果莫大な広告費をドブに捨てたこととなり、アルスは倒産、白秋と菊池の板挟みとなった芥川龍之介の自殺の遠因と噂れるまでに至るのである。

と、まあ『内容見本にみる出版昭和史』は、このような出版史における全集などの企画の販売戦略を事細かに記した面白い本であった。

さてさて、解禁後のウオーミングアップ釣行も終わり、6月からの好シーズンへ向けて遠征先の川選びをぼちぼち始めることにした。そこで川を選ぶ基準はなんなのかといえば、美しい渓の写真もあるが、やはりその川ごとに振られたキャッチコピーである。

『FlyFisher』2014年3月号「ここに立ちたい70河川」の特集では、川ごとの紹介にコピーが振られ、たとえば「瀬の中に潜む大ものをねらう」なんて、大ものを期待せずにはいられない。「箱庭のような渓で、のびのびラインを伸ばす」はとても気持ちよい釣りができそうな川であるし、「幅広の本流ヤマメが躍る」は挑むような気持ちにさせる。「帰りしなに良型を見かけることも……」にいたっては後ろ髪引かれるくらい満足できそうな川に思えてくる。

今年の川選びは、言葉だけで選ぶのも一興かもしれない。

『内容見本にみる出版昭和史』
（紀田順一郎／本の雑誌社）

ちょっと美ら島まで……

沖縄島・リーフの五目釣り

“遠征” というイメージが強かった南国・沖縄県への釣行。
しかし現在では格安航空会社の参入や観光客の増加で、
かなりお手軽さが増している。
そのなかでも沖縄本島はアクセスも容易で、
週末だけ「ちょっとそこまで」感覚の釣りが可能。
そんな沖縄でガイド業を本格始動させた本間偉人さんと、
南の島ならではの釣りを楽しんだ。

中根 淳一＝文・写真
Text & Photography by Junichi Nakane

身近になった南国の釣り

国内で海の「FF楽園ランキング」があるとすれば、まず上位に入るであろう沖縄。350を超える島々で構成される同県。沖縄島（沖縄本島）を取り巻く「沖縄諸島」、その東に「大東諸島」、南西に延びる宮古列島、そして八重山列島をまとめた「先島諸島」に分けられる。

その島々すべてがウエーディングに適した地形ではないが、魅力的な釣り場は多く存在しており、私も年間で1ヵ月以上はこの地で釣りを楽しんでいる。

十数年前は「遠征感」が強かった沖縄県への釣行も、近年はかなり手軽になった。理由のひとつとしてLCC（格安航空会社）の参入や各空港の拡張整備がある。同時に便数も増えているので、仕事の休みさえ調整できれば「ちょっと南国まで」や「週末だけ南の島へ」の短期間釣行が夢ではなくなったのだ。

実際にLCCを使えば東京～新大阪間の新幹線片道料金ほどで沖縄往復が可能なケースもある。しかも出発地によっては2時間余りで移動できるのだから、眠い目を擦りながら車を長時間運転する必要もなく、仮眠していれば着いてしまう。

その沖縄県のなかで最もお手軽なのが県の中心地であり、離島への起点となる沖縄島。ちなみに文化圏的には沖縄、宮古、八重山と大きく分かれているため、沖縄県内で「沖縄」と呼ぶのは沖縄島のこと。特に離島に住む人たちが「沖縄はさ～」と言ったら本島を指すことが多い（以下沖縄島、沖縄本島は沖縄と表記）。

沖縄FF最初の難関

正直、私は沖縄の釣りには疎い。「1ヵ月以上も滞在しているのに？」と思われるかもしれないが、そのほとんどは八重山などの離島。よって那覇空港はいつも経由地でしかなく、過去には数えるほどしか空港外に出たことがない。県内としては人口の多い沖縄もフライフィッシングを楽しんでいる人は少なく、情報を集めるのが難しい。特にフライに向いている釣り場や潮回りの知識となると、なかなか収集は容易ではない。実は沖縄で釣りをしようと

同じ海岸線でも場所によって表情を変える。その中でも魚が多い地形があるので、ポイントセレクトはガイドに任せるとよい

思って困るのが、島が広すぎるということ。県内2番目に大きい西表島でさえ沖縄の1／4の面積しかないので、離島ならば自力でもどうにかなるのだが……。

「さて、どうしよう」と考えていたところ、今回ガイド依頼した本間偉人さんの存在を思い出す。以前は東京都内のプロショップに長年勤務していた本間さんだが、数年前沖縄に移住し、沖縄市で『スウィンギング』というお店を営んでいる。

最近では釣りのガイドも始めており、SUP（スタンドアップパドル）を使った釣りにも精力的に取り組んでいる。

南国定番のリーフ五目釣り

4月下旬のゴールデンウイーク直前に訪島。3月の中旬ごろから順に海開きする沖縄だが、まだ「本格的な夏」とはいえず、夜はかなり涼しい。さらに天候も不安定なため、雨はともかくとして風が心配。

まず南国といえば定番のリーフの釣り。

「リーフでの五目釣りをしたい」

「面白そうなのでSUPも持ってきてください」

本間さんには事前にいくつかのリクエストしておく。

旧コザ市（現在の沖縄市）の宿でピックアップしてもらい北上していく。旧知の仲とはいえ、興味深い人生を経てきた本間さんとの会話が楽しくて、車移動も苦にならない。

1時間余りも走ると、古きよき沖縄の風景を感じられる「やんばる（山原）」地域に入る。

「やんばる」とは「山々が連なり森の広がる地」を意味しており、国の天然記念物に指定されている「ヤンバルクイナ」などの鳥類のほか両生類、昆虫など多くの固有種が生息している。

通称「やんばる」に明確な区分はないが、名護市を過ぎ

イシミーバイは見てのとおり幅広な尾ビレで踏ん張るので、バイトの一瞬はどんな大ものが掛かったのかと驚くほど

沖縄ではムラサメモンガラ以外にも数種類の小型トリガーフィッシュが釣れる。引きが強いので釣って楽しい魚

ヘビ柄のような体色のワヌケトラギス。トラギスの仲間は国内に広く分布しているが、こちらは南海に多い種

ルアーやフライでも希に釣れるというカレイやヒラメの仲間。私も初めて見たので確証はないが、おそらく「テンジクガレイ」

手前から魚がいるポイントでは無闇にウエーディングせず、まずは水辺から離れて探っていくのが基本

今回は2人ともシンキングラインを使って、手返しよく根周りをフライがトレースするようにリトリーブ

イシミーバイは小さくてもよく引く。気を抜いていると、サンゴや岩の隙間に潜ってしまうので要注意

た大宜味村や東村、北端の国頭村あたりは、実感できるだけの自然が色濃く残っており、2016年9月には前記3村が「やんばる国立公園」に指定された。

沖縄市の人口密集地に比べて海の透明度も高く、太陽が顔を出すと南国らしい青い海が出迎えてくれる。

予想どおり北東風が強い。おのずとポイントも風裏の東シナ海側に限られてくるが、そこはガイドに任せればよい。

まずは幹線道路沿いのおすすめポイントに車を停めて釣り支度を始める。釣れるであろう魚のサイズを考えれば5〜6番タックルがよいのだが、この強風では厳しいと判断して、2人とも8番タックルを手に取った。フライラインは潮位が高く水深があるため、私はインターミディエイト、本間さんはタイプ2のシンキングラインを選択。

「あの岩周りは潮流がよい感じなのですぐ釣れますよ」

高台からポイントの解説をしてくれた本間さんだったが、キャスト&リトリーブしながら時おり首を傾げている。干潮まで3時間あるので潮は動いているが、風向きと潮流が合っていないようだ。サーモンやスティールヘッドなどの釣りを愛好していた本間さんは、海でも潮の流れを使ったスイングの釣りを実践している。しかし南の島ではレギュラー的な存在の「あの魚」も釣れない？　ここで嫌なことを思い出した。

「本間さん。イシミーバイって今時期スポーニングでは？」

「そういえばそろそろ……」

リーフの釣りではよく釣れる、釣り人に優しいイシミーバイ（カンモンハタ）の産卵期は水温が上昇する5月以降の大潮なので、気になる時期ではある。そこで、ねばらず移動することにした。

同じ海岸線を南に下った場所で釣りを再開すると、本間さんに小さいながらイシミーバイが釣れた。

「このサイズは産卵に関係なさそうだなぁ」

さらに私にも釣れたが小さい……それでも掛かった時は根魚特有の「ズン！」というアタリで、一瞬とはいえよいサイズと勘違いさせるだけの手応えがあるので楽しい。

しばらくすると離れて釣りをしている本間さんが何やら叫んでいる。風向きの関係でよく聞こえないが、手もとにはピラピラと平たい何かがは

小岩や砂利が多い河口周辺は根掛かりも少ないので、広く探るのが好釣果につながる

コンディションが整えばSUPでのフライフィッシングも面白そう。次回はぜひ試してみたい

赤土の斜面が特徴的な酸性土壌の沖縄北部。南国というよりは火星のような景色が広がる

よいサイズのイシミーバイは8番ロッドも小気味よく曲げてくれる

ためいているような……近づくと初めて見る魚。

「えっ、ヒラメ？」

目の向きから一瞬ヒラメかと思ったが、沖縄にヒラメは生息していないはず。

希に釣れるらしいが本間さんも正確な名前は忘れたらしい。調べたところ、おそらくガンゾウビラメの仲間「テンジクガレイ」ではないだろうか。

さらにこちらも砂地の多いリーフでよく釣れる小型のトリガーフィッシュ、ムラサメモンガラを追加して再度ポイント移動。

最後に入ったポイントは河口周辺のリーフ。リーフとはいっても河口特有の小岩や砂利が多い地形だ。通常のリーフフィッシングでは、サンゴの間をフライが通るように釣るのが定石だが、このようなポイントであればブラインドキャストで広域に探れる。

谷間を吹き下ろす風が強いが、後ろを向いてフォワードキャストを風上に変更すれば、バックシュートで30m以上の飛距離が稼げるので、あえて歩き回らず、ほぼ1ヵ所で扇状にキャストし続けると面白いように反応がある。

ここでよいサイズのイシミーバイが掛かるが、ファイトを楽しんでいる隙に足もとの岩に入られた。どうにか引きずり出してキャッチ（結局産卵は関係なかったのかな？）。さらにオジサン、ワヌケトラギスを追加して私が4魚種を釣りあげた。本間さんのカレイと合わせて目標の5目達成したところで納竿。この日は那覇まで2時間の道のりを戻るため、早めに切り上げることにした。

沖縄の岸釣りではA級ターゲットのタマン（ハマフエフキ）は、小さくても風格漂う貫禄

リーフで釣れる魚たち

リーフのターゲットは豊富で、今回は出会えなかった魚も多く、アタリがあるごとに何が掛かるか分からないところも楽しい。時には思いがけない大ものがバイトすることだってある。

河口周辺には特に多く回遊するガーラ（オニヒラアジ）

ウイードのある砂地に多いクサムルー（マトフエフキ）

リーフで出会うことが多いクチナジ（イソフエフキ）

こちらもよく出会うスビイナクー（オキフエダイ）

ゴートフィッシュの英名を持つ、ヒゲが特徴的なオジサン

これからが楽しみな沖縄の釣り

当初予定していたSUPフィッシングは風が強いため断念したが、参考のため釣り方などを実演してもらった。

私も以前にSUPに乗ったことはあるが「常に両手を使うフライフィッシングを成立させるのは難しいかな？」というイメージ。しかし潮流を使ったドリフトやシーアンカーの位置調節など、本間さんならではの工夫も多く、SUPの操作に慣れれば面白そう。何よりもオカッパリでは届かないポイントや沖側から岸へのアプローチが可能なので、今までは考えられない釣り方もできるだろう。

本間さんからは「1人じゃポイント開拓が大変です」とうらやましい悲鳴が上がるほど、沖縄には多くの釣り場があるので、毎日のように海に出掛けて開拓中とのこと。彼のガイドが充実してくれば、さらに沖縄の釣りが身近になるだろう。

私もこれからは離島への移動途中に「ちょっと沖縄へ寄って」が増えそうな予感がする。

沖縄本島のFFガイド

広大な沖縄本島を短時間で効率よく楽しむには、ガイドを予約したほうが安心。沖縄市で『スウィンギング』を営む本間偉人さんは長年プロショップに勤めていたので、タックルはもちろんのこと、フライフィッシングの知識も豊富。他の釣りとは異なるフライフィッシングの特性も深く理解しているので、ストレスなく釣りを楽しめるはずだ。また、空港や宿の送迎もしてくれるので、レンタカー＆燃料代を考えると、かなりお得感があるはず。特に出張や家族旅行の合間に抜け出すには、送迎サービスは便利なのでは？

Swinging（本間偉人）
沖縄県沖縄市美里5-24-6
TEL：098・914・4501
HP：swinging.co.jp/wordpress
Email：join@swinging.co.jp

ミッドナイト・フライタイイング・エクスプレス

深夜、フライを巻きながらしみじみ思ったことや、妄想しすぎて思いついた小技などフライタイイング的雑談。

備前 貢＝文・写真
Text & Photographs by Mitsugu Bizen

《Profile》
びぜん・みつぐ
1964年8月生まれ。今月の格言「引っ越しは家庭ゴミと廃棄物との闘いだ！」。明後日、住み慣れた函館から新天地に引っ越しです。本文にも書いたとおり、ワタシの過去幾多の引っ越し経験をもってすれば、引っ越し作業などお茶の子さいさい……だったはずなんですが、足掛け9年住んだ我が家のその歴史を物語るかのように、あとからあとから泉のごとく湧いてくる「もういらないもの、捨てたいもの」たちとの終わりなき闘争。まるで古い地層を掘り返しているかのようだ。引っ越しは荷造りよりも大中小のゴミと廃棄物をどのように処分するか、がいつも大問題。そんなわけで、部屋中に散乱した段ボール箱に埋まりながら、現在この駄文をしたためております。

無駄ごとの集大成

なんじゃこりゃ？

来たるべきこの夏を日がな釣り暮らしたいがために、この冬はどこにも出かけず、誰にも会わず、釣りにも行けず、ず〜っと家にこもって、せっせせっせとフライを巻く仕事に精を出していた。ハイシーズンの釣りのことや、ご注文をくださったお客さんとの心温まる交流、そしてご注文のフライが完成した暁にいただけるありがたい報酬などを目の前にぶら下げたニンジンにして、ヒッヒーンといななきながら疾走している時は最高の気分だ。どっぷり仕事に集中している時は、そりゃあもう充実した時間になる。北海道の酷寒の冬が辛くないどころか、この季節のこうした時間もいいものだなあ、などとしみじみ思えたりもする。

ところが、ずっとそのように家にこもっていれば、必ず淀んで沈澱する魔の時間が忍び寄ってきて、ぼくを困らせる。どうかした拍子にドロドロと鬱屈した気持ちになる。嫌なことばかり考えるようになる。

さあネガティブ・タイムのはじまりです。

これはヤバイ。そんな気分のまま一日中誰とも話さず独りでタイイング机の前に座っていると、どんどん仕事の効率は落ちるばかり。気がついたらどうでもいいようなインターネットのサイトなんか見ていたり。時間はいつも疾風のように去っていく。今日も一日なんと無駄にしてしまったことか。北海道の冬の鉛色の夕暮れとともに激しく自己嫌悪。

そういえば以前、とある同世代のフリーランスの女性漫画家さん（売れっ子）と話していて、仕事へのモチベーションが下がったり、なにより気分がガクーンと落ちてしまった時、いかにして淀んだ気持ちを立て直すか、どうやって自分に鞭打つ

のかという、独りで仕事をするうえでの永遠の課題について切実に語りあったことがある。カタチは違っても、同業相憐れむというところか。

「オレなんかなあ、な〜んもやる気になれへん時、ここだけの話やけど2ちゃんねるの『まとめサイト』とか読みふけってる時があるねんで。どんだけ時間を無駄にしてるんやろかと思って、さらに最悪の気分になるのが分かってるのに、ついつい見てしまうねん。しかもこの歳で」

など赤裸々に告白してみると、彼女がニタッと笑ってボソッとつぶやいたのだった。

「ググれカス……」

「アンタもか！」

「他人の修羅場体験とか読んでる場合じゃないのに、仕事が切羽詰まるとついついクリックしちゃうよね。あの現実逃避って、あとでサイアクだね」

「いや、安心したわ。そんなことしてるのオレ独りじゃなかったんだって分かったから」

「安心したらダメじゃん」

「分かっとりまんがな」

というのはさておき、そのようなグダグダと沈澱した気分がさらに積もり積ってくると、今度はパーンと弾けたくなる。もうなにもかもほったらかして棚上げして後回しにして、スコーンとブッ飛んでしまいたくなる。

といいつつ、やることのスケールはとても小さい。なんていうのかなあ……すっごく無駄なことがしたくなる。今この時にはまったく必要のないフライが無性に巻きたくなる。実際の釣りに使えるかどうかなどもはや一切関係なく、脳内にいつも渦巻いているいろんなイメージと妄想を、時間をかけるだけかけて実際のカタチにしてみたくなる。

それにしても、フライタイイングのお仕事で溜まったストレス?を、お遊びのフライタイイングで発散するって……これいかに? 食い扶持とストレス発散のための行為が同じって……どうよ?

というわけで、このガラスの標本箱に並んでいるフライたちは、そんなストレス発散のための自慰行為の果てに生まれたフライたちなのです。こうしてあらためて見てみると、ストレス発散ばっかりやってるじゃん……とここでも軽く自己嫌悪なキテレツ系フライズの充実ぶり。

と、そんなフライたちは、苦労して作ったわりに完成してしまえばそこで気が済んで、売り物ではないのでぞんざいな扱いでタイイング机周辺に転がされ、冬の間ずっとほったらかしにされている、かわいそうな境遇。でもねえ、そうやって作ったフライたちは、ちゃんと保管するよりも常に目につくところに置いておいたほうが、次のモチベーションを高めるためにもアイディアの源泉としても、なにかと都合よいのです。

そして、近日中に来たる引っ越しに備えて、まずは大事な仕事道具でもあり遊び道具でもあるタイイング道具やマテリアルを整理梱包しはじめたわけです。で、冬の間中、机の上に転がされていたストレス発散系キテレツ・フライズをまとめて標本箱に並べてピンで固定して運びやすくまとめて梱包したのでした。そして、とくになにも考えずにこの冬の無駄事の集大成を眺めてみれば……アラなんだかとってもトキメクじゃないですかアナタ。これを眺めていると、なんだかとっても巻きゴコロが溢れてきてムラムラしてくるじゃありませんか。

それもそのはず、これらのフライ自体はまったく仕事に関係しておらず、むしろ膨大な時間の無駄。ではあるんだけど、これらのキテレツ系フライたちを自分のイメージどおりに巻くために考えた方法やアイディア、そして素材の活用法、さらには新しい素材の発見などなど、ぼくにしか分からない、自分だけの最新タイイング情報が、この標本箱の中にぎっしり詰まっている。それらはあとでかならず自分の糧になって活きてくれる。

ストレス発散のために、途方もない無駄な時間をすごした果ての産物。ではあるけれど、そのじつ長い目で見れば、それは無駄どころか、これらを巻きながら発見したアイディアやスタイルは今後の自分の仕事にとっても重要な役割を果たしてくれる。だけでなく、自分のモチベーションをグイッと高みに押し上げてくれる創作意欲の泉にもなっていた。

人生に、無駄なことなんかなにひとつない。

などと、悟ったようなことをいっているけれど、今日引っ越しの梱包をしながらつくづく思ったことがある。……なんか、思ってたよりも荷物ぜんぜん多すぎるんとちゃうか? こんなことならもっと早くから準備しておくべきだった……。

そういえば、ここ函館に越してくる前も、その前も、そのずっと前も、引っ越し作業に追われながら焦りながら、まったく同じことを思って、次の引っ越しにはこの教訓をぜひ活かそう、などと誓ったはずだった。次こそはと誓ったはずだったのだ。

嗚呼なのに……人というものは、けっこう、かなり学習しません。

オオヤマカワゲラ。ボディーはホワイティング4Bの斑点模様の入ったブラウン・ヘンネック。ウイングケースはヤマドリのバックフェザーを使って巻いた。

リアリスティック・フライ・タイイング

マイノリティこそ創作意欲のキーワード？
忘れ去られたフライタイイング？

普通のカワゲラ。ボディーはコック・デ・レオンのヘンサドル。ウイングケースはイエローダイドのリングネックフェザントのバックフェザーを使って巻いた。

リアリスティック・ニンフフライ・タイイングって知っていますか？

時は70年代、アメリカン・フライタイイング戦国時代。アメリカの西部および東部を中心にして、現在では大御所中の大御所タイヤーたちが、今をときめく新鋭フライタイイヤーとして続々台頭してきた時代であった。で、その当時のタイイング・トレンドのひとつにリアルなニンフを巻く、というのがあった。その人気モデルとなったのがアメリカ西部の大河川にうじゃうじゃいる大型のカワゲラの仲間たちだった。サイズも大型で特徴的なフォルムをしているカワゲラは、ひたすらリアルなフライを巻きたい向きには格好のモデルとなったのだった。

そしてそこからさらに発展して、実際の釣りに使うことよりも、ただひたすら本物そっくりな昆虫を巻いて、皆をアッといわせたいとか、深い自己満足に浸るとか、そのようなジャンルが生まれたのだった。緑色に染めたグースクイルを使ったカマキリだとか和紙を細工して巻いた、というよりも作ったチョウチョなどなど、巻く人のアイディアの集大成のようなフライが続々発表された時代もあった。

そして1900年代後半、世はインターネット時代一色。サカナを釣るんじゃなくて、むしろ人に見せびらかしたいこの分野にとってインターネットはまさに格好の見せびらかしツール。実物サイズの蚊をいかにして本物そっくりに巻くか、イモリのヌルッとした質感をどうやって表現するのか、などなどがリアリスティック・フライ・タイイング専門サイトの掲示板を賑わせた時代もあった。

のだが、そこからさほど時間を置かずして、まるで潮が引いていくかのようにこの分野は影をひそめていったのだった。たしか、インターネットでそうした分野のタイイングで最後に見たのは「コンドームをふくらませて着色してタコを巻くテクニック」だった。

やはり、そのような実際の釣りに使うことがない「お遊び」であるところが、この分野が廃れていった大きな要因だといわれているけれど、そんなのはこの分野がよく知られるようになったころからいわれていることだし、個人的な意見は少し違う。

ちょうどインターネットが普及し始めて、リアリスティック・フライ・タイイングの盛り上がりが最高潮に達したころだった。さまざまなメーカーから「プラスチックでできた本物そっくりの脚だとか、すでに模様が印刷されたウイングケース」などなどのパーツが発売されたりしていた。それらを組み合わせれば、本物そっくりのカワゲラが簡単に巻けますよ、というわけ。またさらに、エポキシ樹脂を使ったサーフキャンディなどなど当時のソルトウオーター・ストリーマーにインスパイアされて、この分野でもコーティング素材を塗布して巻くというより接着剤で固める、という作業も一般的になった。

しかしだ、そうなるともはやフライタイイングではなくて、ノリとしてはもうプラモデル製作となんら変わらないようになってしまった。

（……これ、オレが求めているものとはなんか違うよなあ……）

という白けた雰囲気が、この分野を衰退させて、ついにはもはや忘れ去られた過去の「お遊び」にしてしまったのではない

カワゲラ。ボディーは荷造りヒモを着色後、エポキシでコーティング。ウイングケースはリングネックフェザントのバックフェザーをエポキシでコーティングした。

ヘビトンボ2態。左がエポキシなどでボディーやウイングケースをコーティングしたタイプ。右がコーティングはしないでフェザー類のみで仕上げたスタイル。まずはヘビトンボの特徴でもある、体側にあるムカデの脚のような突起状のエラを表現するためにはいかにして……というところが最も大きな課題となった。60年代アメリカ西部のブラック・ヘルグラマイト(アメリカ産ヘビトンボ)のパターンのように、黒のハックルをパーマ状にハックリングして短く刈り込んだり、70年代のリアリスティック・ニンフフライ・タイイング全盛期にはターキーバイオットやミニオーストリッチの先端のフェザーを1本ずつムカデの脚のように巻き留めていくスタイルが一世を風靡したこともあった。が、この特徴的なパーツをこそ独自の表現方法で巻いてこそのリアリスティック・タイイング。アレはどうだコレならどうだと、しばしヘビトンボのエラで頭の中がいっぱい。で、ようやく思いついてダチョウの仲間であるエミュのフェザーを、ストリーマー・パターンのマツーカのウイングのようにリビングしながら巻き留めてみた。すると、棘条の突起が体側にズラッと整列するように突き出て素晴らしくヘビトンボのエラっぽいではないか。もう気分はルンルン小躍りです。

か?などと書いている本人が、実際にこの分野に果敢にチャレンジしながらも、プラモデル的タイイングとして進化発展すればするほどに、どんどん飽きていってしまったわけだから、この考察は当たらずとも遠からず?

それではなぜ、今ごろになって突然思い出したかのようにリアルな6本脚のカワゲラだのヤゴだのを巻いたり、ヘビトンボのエラの創作に一喜一憂しているのだろうか?

話はちょい脱線して、シーズン中しょっちゅう一緒に釣りに行く札幌在住の田口くんはマッチング・ザ・ハッチのみならず、とにかくライズをねらった釣りが大好きだ。ライズしそうなポイントに目をつけて、水生昆虫の羽化や流下を気にしながら延々ライズ待ち、待ちぼうけも覚悟のうえという苦行修業をいとわない。だけでなく、いつもなにか試行錯誤しているのが好きなタイプなので話も合う。

と、そんな田口くんなのだが、彼がタイイングで最も情熱を燃やし続けているのがバスバグ・タイイング。それを実際に使う使わない関係なく、ヒマさえあればひたすらディアヘアをフレアさせて刈り込みまくっている。なんでも今年のテーマは「トラウト・サイズのバスバグ」なのだそうで、ミニサイズのバスバグに熱くご執心だ。

「なにがキミをそんなにバスバグ・ワールドに駆り立てるんだい?」

という素朴な疑問に彼は明快に即答したのだった。

「やってる人があまりいないからこそ愉しいんです!」

その気持ち、ものすごくよく分かる。かつて用水路大国の静岡東部に住んでいたころ。キテレツなバスバグばかり巻いてナマズをねらっていた時代、その情熱の源泉のひとつが「誰もやっていないだけでなく、だ~れも興味がない世界だから」といういくぶん倒錯した気分だったからだ。

そして今、なぜだか急にリアリスティック・フライ・タイイング熱が再燃しているのも、この分野がバスバグどころかフラ

見つめ合うオニヤンマとサナエトンボのヤゴ。ヘビトンボにしろヤゴにしろ、実際の釣りに密接にリンクする場面はほとんどない。というよりも遭遇したこともない。が、リアリスティック・ニンフ・タイイングにおいては、特徴的なフォルムと大型サイズから格好のモデルになる。ここではオリーブ色に染められたコック・デ・レオンのチカブーやヘンサドルでボディーを巻き、ウイングケースは日本のキジの黒光りしているネックフェザーをチョコンと巻き留めた。ソラックスはパートリッジのバックフェザーを使って、泥をかぶっているようなマダラ模様の質感を演出してみた。

イタイイングの世界の中で最も忘れ去られているからだ。
だいたいやねえ、ワシにいわせればバスバグだってフルドレス・サーモンフライだって、マイノリティとはいえごく一部の熱狂的ファンに支持されて、現在でも確固たる地位を築いているわけで……。そこへいくと「本物そっくりの虫」作りはもはや無意味と無駄事の集大成ではありませんか。
だから萌えるし燃えるんですよ。
とはいえ、あらかじめ作られているリアルな脚やウイングケースを使う気などまったくしない。最もタイヤーの腕の見せ所であるパーツに既製品使ってどうすんのよ?って気分だ。そして各種の接着剤やコーティング剤。かつて、リアリスティック・フライ・タイイングの分野においてこれらを多用しすぎて、これらに頼りすぎて、逆にものすごく冷めてしまった苦い経験をもつワタシ。今回も当初は当然のようにエポキシを練り練りしながら巻いていたのだが、それをカワゲラやヘビトンボの背中やウイングケースに塗り塗りしておると、なんだかスーッと冷めてくるし飽きてくる。できあがった虫さんたちも、リアルではあるけれど可愛らしく思えない、というか感情移入に乏しい。
どうしたものか……逡巡することしばし、ものすごく単純なことに気がついちゃったのだった。コーティングでテカテカさせるんじゃなくて、あくまでも鳥の羽根や獣毛で虫を表現することにこだわればいいんじゃないの。つまり、自分の中でルールと決まりを設けて、あえてそれに縛られながら巻いてみれば……。
これがもうハチャメチャに愉しいじゃありませんか！ 巻けば巻くほどにアイディアは湧いてくるし、発見と感動の連続ではあ〜りませんか。
マニュアルや決まった手順で巻くのではなく、細部においてもいちいち立ち止まってウ〜ンと考えながら工夫しながら失敗しながら巻くことが要求されるリアリスティック・フライ・タイイング。そこで得た知恵と経験とアイディアは、そっくりそのまま実釣のための必殺フライに大いに活かされることになったのでございました。
ヤマアラシのトゲを細工しながらヘビトンボのキバを模倣していて、ハタと晩秋の北海道各河川にて重要種となる年2世代目のエルモンヒラタカゲロウのイマージャーのボディーを思いつくなんて、考えもしなかったど〜〜。おもろいど〜〜。
やはり、人生に無駄はありません。

愛しきニンジン川虫毛鉤

温故知新はフライタイイングの真骨頂……なのか？

前々回の当連載にて取り上げたキャロットニンフ再び。まさにアメリカン・スピリッツなニンフフライのひとつ。1900年代前半、英国フライフィッシング・シーンの影響を受けながらも、アメリカ独自のニンフフライ・フィッシングを模索しはじめた時代の印象派ニンフの代表作でもあったけれど、いまや忘れ去られた存在。だからこそ、へそ曲がり少数派に属したいワタシとしては気になる存在

と、そんなキャロットニンフを乗せた小箱をパカッと開けると……函館在住のおりになにくれとなくお世話になったあの方に、ささやかな心づくしをソッと贈りたい。道南必殺ニンフセットで〜す。

と、そんなキャロットニンフは当連載でもすでにいくつかご紹介させてもらったように、スタンダードパターンにこそあれこれ自分なりの細工を加えて私家版アレンジもしくはバリエーションを巻かずにはいられない自分にとって、格好のおもちゃ。今現在最も気に入っているのがコチラ。テイルにオレンジに染めたコック・デ・レオンのチカブーのファイバー数本を使って、水中でウネウネクネクネ流れになびかせようという目論見は誰もが思い当たる常套手段として、ボディーの細工に当社の十八番でもありますスケスケチラ見えエロ魂が込められております。まずはボディーに金色のティンセルをびっしり巻いておいて、その上にソラックスからテイル方向に向かってオレンジのシルクフロスを巻いていく。この時、フロスはものすごく細〜く薄〜くほぐしてから巻く。これが最大のコツ。で、テイル方向に薄いシルクフロスをなるべく平たく巻いてテイルの付け根までできたら、今度はそのシルクをギリギリねじって糸のようにして、それをソラックス方向に折り返して巻いていく。これが濡れると、糸状にしたフロスがオレンジのシマシマを立体的にクッキリ浮かび上がらせながら、ボディーが橙色がかった金色に底光りする。これをパッと一瞬見るとアラ不思議、このファンシーなフォルムと色調がソラックスの黒とあいまって、たとえば羽化直前の成熟したオオマダラカゲロウなどのマダラカゲロウの類のボディーそのものに見えてしまうのだった。じつは、さっきのリアリスティック・ニンフフライ・タイイング熱が再燃したのも、キャロットニンフのようなアメリカンな初期型ニンフの忘れ去られた古典に興味が湧いたことがキッカケになったのでした。それもこれも、だ〜れも関心を持っていないからこそソチラ方向になびいていくハードコアなへそ曲がり根性が導いてくれた「お楽しみ」の世界なのだワッハッハ。

透けてキラメくダビングボディー細工のご紹介

クラシックスタイルなウエットフライにもファジーなシンプルニンフにも応用し放題な私的最新ダビングボディーを巻いてみる

ミッドナイト・フライタイイング・エクスプレス

キャロットニンフだのリアリスティック・ニンフだのと本筋から大きくそれて寄り道をしながら、その流れの中で思いついて現在多用しまくっている超お気に入りのダビングボディーのタイイングをそっとご紹介させていただきます。

これらのクラシック風ウエットフライのボディーを眺めてみれば、いかにもソレ風ではあるけれど、どこか違和感が……。あれ？　ティンセルのリビングがないではないか。

伝統のスタイルやフォルムこそを重視するウエットフライの世界では、ティンセルのリビングは標準装備。これがないとボディーがビシッとしまらないだけでなく、とんでもなく間が抜けて見える。

なんだけど、ここではボディー材となる各種ダビング材とリビング素材であるティンセルを同時にボディーに巻くことで、まるで羽化直前の水生昆虫がイマージングガスを発生させて、それが陽の光に反射して鋭くきらめいているような、ボディーの内側がギラギラ輝きながら、毛羽立ったダビングボディーの隙間からそのキラメキがチラチラのぞいているような……。独特のフォルムでありながら、たとえばマーチブラウンなどなどクラシックなスタンダードパターンに転用しても素晴らしく調和して映る「ちょっと変わったダビングボディー」を巻いてみる。

といっても、やっていることはものすごく単純かつ通常のボディーを巻くよりも手間がかからないシンプルなダビングテクニックだ。

シンプルすぎてなんなので、ここではスタンダードフォルムなウエットフライを丈夫に巻く小技なども随所に散りばめながら、さっそく巻いてみましょう。

モデルとなっていただくフライは、例のキャロットニンフにインスパイアされたワタクシのお気に入り配色でもある黒と

オレンジのツートーンカラーでボディーを巻いたノーマルまフォルムの私家版ウエットフライ。サイズはノーマルシャンクのウエットフック8番。

ティンセルでタグを巻く

金色のオーバルティンセルをボディー末端にタグとして数回巻く。写真のスレッドの位置にご注目を。ナノシルクスレッドを使って、巻き上げたタグの上にスレッドを数回巻いて補強としている。このスレッドだと巻いた状態でもほとんど目立たないけれど、濡れると完全に見えなくなる。このようにタグを巻いておくと、タグの部分が切れてしまうことがほぼなくなる最強の補強となる。タグは小さなパーツではあるけれど、最も切れやすく、また切れてしまうとどうにもカッコ悪くなってしまう部分。補強はしっかり施したい。

ボディーをダビングする

で、それをそのままボディーに巻いていく。この時写真のようにリビング状に間隔を開けて巻くのではなく、ボディーを巻くように密に巻いていく。すると、ティンセルの間からダビング材が思い切り毛羽立った状態で巻かれることになる。そしてこれをダビングブラシなどで梳きながら余分のダビング材を大胆にバッサバサ取り除きながらフォルムを整えると、このような状態になる。ボッサボサに毛羽立ったダビング材の隙間から、オーバルティンセルの凹凸がチラ見え。このデコボコが陽の光に当たるとキラメキを拡散しながら乱反射する。ここでつかったダビング材はオレンジのシールズファーに黒のシールズファーとヒグマの黒い毛のアンダーファーをブレンドしたもの。シールズファーのような剛毛系の硬くてゴワゴワしたダビング材はこの方法にうってつけの素材。

タグの余りのティンセルはカットしないこと

タグを補強したら、今度はその余りのティンセルをカットしないで、写真のように二重に折り返してタグの先端に巻き留めてループ状にしておく。そして、その部分にテイル材を巻き留める。ここではテイル材としてゴールデンフェザントのクレストフェザーを2本とティベットフェザーのファイバーをほんの数本重ねて巻き留めた。余談なんだけど、これから巻いてみる金色に底光りするファジーなボディーの水中でのキラメキとクレストフェザーの透明感の組み合わせが個人的にたまらない。素晴らしく美しい調和に映る。

ティンセルにダビングワックスを塗布する

あの、もしかしてオキテ破り……ですか？　ループ状にしておいたティンセルにダビングワックスもしくはマルチグルーを塗布。

ブルージェイのスロートハックルをハックリング

ウエットフライのスロートハックルに使うと、ため息が漏れるほどに美しいナチュラルブルーと黒のゼブラ模様なブルージェイのハックル。しかしこれがまた切なくも美しいものにはトゲがある……。ストークもファイバーも硬くて太くて扱いにくく、ウエットフライ・タイヤー泣かせなスロートハックル素材のひとつ。そのためか、現在ではこの素材をスロートハックルに使ったウエットフライもあまりというかほとんど見かけなくなってしまった。全日本ブルージェイハックル愛好会企画部長としては非常に残念なところだ。そ・こ・で・ブルージェイをハックリングしたいけれど、先に挙げたような理由でどうもキレイにハックリングできなくて切ない思いをしているアナタの耳元で、50過ぎのオッチャンがやさしく囁いて・ア・ゲ・ル。まずは下ごしらえとしてブルージェイのハックルを水に濡らして教科書どおりストークを裂いてハックリングの準備をするじゃん。それからハックリングするわけじゃん。その時にはすでにハックルは乾いてしまっているわけですが、クルッと1、2回転ハックリングしたら、今度は濡らした指先でファイバーをベチャベチャに濡らしながらスロートハックルのフォルムを整えてごらんなさい。硬いファイバーがあっちこっち向いちゃって、いうことを聞かない暴れん坊将軍ブルージェイのファイバーが簡単に整列してくれて、麗しい青と黒のゼブラなスロートハックルになります。ついでに、こうやって巻いておくことで、あとでウイングを巻き留める際にもちょうどよい土台になってくれる。

ティンセルでループダビング

ここが今回のダビング方法の最大のミソ。ワックスやマルチグルーを塗布したティンセルにダビング材をチョンチョンとくっつけて、それをそのまま通常のループダビングのようにねじってしまう。

完成

で、あとはお好みのウイング素材を巻き留めてできあがり。ちなみにここではコック・デ・レオンのルースター・クイルを使った。まあとにかくこうして巻いたら水中に沈めて眺めてみてください。しとどに濡れたシールズファーの隙間から内側からギランッと鋭く、時にジワ〜ッと鈍くキラメくボディー。そりゃあもうエロイのなんのってアナタ……と、ここまで見てきたようにワタクシのフライタイイングは「エロ要素」が必要不可欠なキーワードでもあるのでございます。

函館生活丸9年ラスト・クリエイション

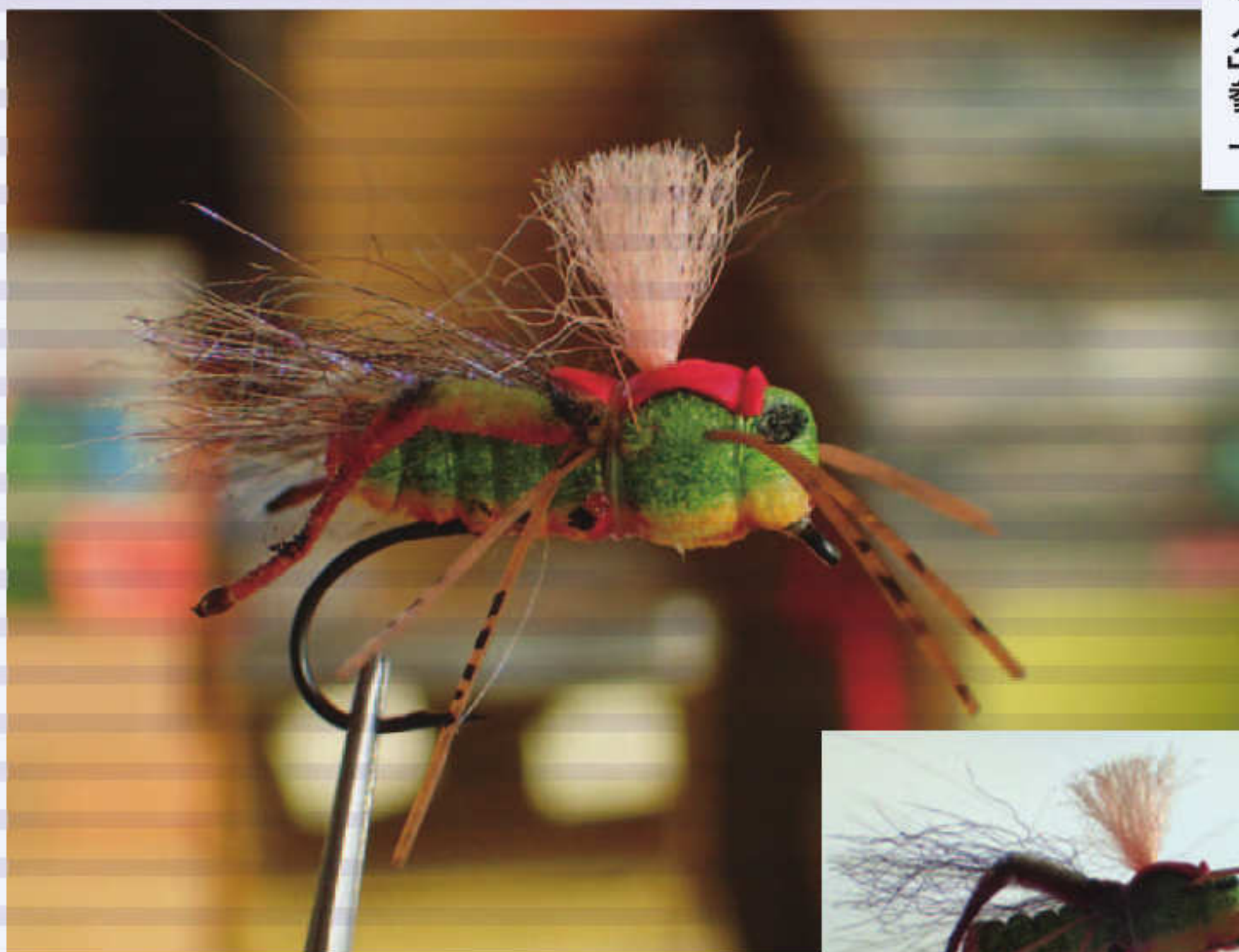
ひと呼んで「オレノバッタ」参上

この一見リアルなんだけど、そのじつものすごくシンプルかつ簡単簡潔に巻けるフォーム製のバッタこそが、ぼくの函館での釣り生活を締めくくる最後の創作フライになりました。偶然の産物といいますか、これまでここで見てきたバッタとはまったく関係のないフライを巻いていて、それらにインスパイアされながらアッこれは……!!と思いついたものです。なので、先に挙げたリアルだニンジンだスケスケだというフライも、このバッタもワタシ個人的には非常に密接にリンクしておるのでございます。いい換えれば、そのような寄り道をしなければ、このバッタを思いつくこともなかったわけで……。フキバッタ大国北海道の夏を釣り暮らしながら、積年の自分の課題であった「簡単に巻けて丈夫で、かつ使い勝手がすこぶるよくて、しかもいかにもバッタらしいフライ」。何度も何度もトライしながらそのたびボツにしてまいりましたが、今回のはフォルム、機能ともにヒジョ〜に満足度特大。おおいに悦に浸っております。思い出多き函館生活の締めくくりをこのバッタで飾ることができて、ほんとうにシアワセだ。あとは、来たる引っ越しを済ませて新居での新生活を整えたら、この夏はこのバッタを巨マスの潜む流れにぶち込みまくる日々なのじゃ。ウオオオ〜〜た〜のしみじゃ〜〜〜と叫び出したい衝動に駆られます。ほんとにシアワセ。

NEW GOODS

繊細ながら、高剛性

ロス フライリール／エボリューションR フライリール

ユニークなデザインは軽量化に寄与しただけではなく、同時に耐久性も向上。幅広いブレーキ調整が可能な密閉式ドラッグは、滑らかな滑り出しを実現し、繊細なティペットを使う釣りにも大きなアドバンテージとなる。また、アンシンメトリーなU字型のスプールデザインはリトリーブ時にフライラインを均一に巻く機能を発揮してくれる。もちろんメイド・イン・USA。
カラー：プラチナム、マットブラック
ラインナップ：#3/4、#4/5、#5/6、#7/8
価格：5万8,000円+税～6万2,000円+税
●ティムコ
☎03・5600・0120　www.tiemco.co.jp

キャンバスフェノールハンドルは軽量かつ濡れた状態でも滑りにくい

いずれも仕舞寸法は40㎝以内

イエローグラス、6ピースモデルが登場

フェンウィック／イエローグラスIII

三代目のモデルとなるイエローグラスは、白っぽい透明のブランクスにイエローの塗装を施し、ナイロンのイエロースレッドでデコレーション。フェルールはスピゴットタイプで白ペグ仕様となっている。リールシートはダブルスライドリングを採用し、グリップエンドバットは、エポキシコーティングでデコレーションされている。今回新たに、持ち運びに便利な6ピースモデルがラインナップ。他のモデルと同様、繊細なティップと張りのあるバットのアクションが持ち味だ。
ラインナップ（6ピースモデル）：6フィート7インチ#3、7フィート1インチ#3、7フィート5インチ#4（全3本）
価格：4万2,000円+税～4万4,400円+税
●ティムコ
☎03・5600・0120　www.tiemco.co.jp

これからの梅雨時期に備えるオールラウンドスーツ

FREE KNOT／BOWSUI3ストレッチレインスーツ

3レイヤー生地ながら、高いストレッチ性を実現。レイヤリングのアウターとしても活躍するオールシーズン対応スーツ。袖は動かしやすさと着心地を高める立体設計。ジャケットの両サイトポケットは、ライフジャケットの干渉を防ぐために、高めの位置に設定されている。さらに前襟部分にはレーザーパンチによるベンチレーション機能を採用し、偏光グラスの曇り防止にも一役買っている。
カラー：ブルー、ブラック
サイズ：S、M、L、LL、3L
価格：4万5,000円+税（S～LL）、4万8,000円+税（3L）
●ハヤブサ
☎0794・73・0212　www.hayabusa.co.jp

表生地は高い防水性と撥水性、透湿性を持った素材を使用

中身が満載のベストの上に着用した際にもフロントファスナーが閉まるよう、身幅に余裕を持たせたBL・BXLサイズもラインナップ。平均重量は300g

サンド　グリーン

ベストの上からさっと羽織れる

フォックスファイヤー／ライトショートレインジャケット

オリジナル透湿防水素材エアロポーラスFWを採用した軽量・コンパクトなウエーディングジャケット。立ち襟仕様のフーデッドデザインで、フードを伝っての浸水を軽減してくれる。フード先端には水滴が目の前に垂れてくるのを防ぐレインガーターが付属。キャスティングの動作を研究して開発された立体裁断パターンは、腕の動きを妨げない。
サイズ：M、L、XL、BL、BXL
カラー：サンド、グリーン
価格：2万円+税
●ティムコ
☎03・5600・0120　www.foxfire.jp/

エーゲブルー　レッドダリア　チャコール

3カラーでラインナップ。豊富なサイズ展開も魅力

動きのある場面こそ高い防水透湿を

シマノ／GORE-TEXベーシックスーツ

防水透湿素材ゴアテックスを採用。快適性と軽量を両立したアクティブモデルで、一体型フードと、アジャストタブ袖口などを装備し、レインジャケットとしての機能も追求。上下セットで、悪天候時のほか、肌寒い時期にもさまざまなフィールドで活用できる。
カラー：チャコール、レッドダリア、エーゲブルー
サイズ：XS、S、M、Ls、L、XLs、XL、2XL、3XL、4XL
価格：3万4,000円+税（2XL、3XL、4XLは3万6,000円+税）
●シマノ
☎0120・861130　fishing.shimano.co.jp/

2wayで日差しから肌を守る

シマノ／SUN PROTECTION ネッククール

日差しから肌を保護するUPF50+素材を採用。首元の日焼け防止に、さらに伸ばして首から口元までを覆うことも可能。吸水速乾で快適な釣行をサポートし、フィッシングシーンにも適した耐摩耗性の高い生地を使用している。
カラー：ブラック、ライトグレー、ブラックウェイブカモ、カーキウェイブカモ
サイズ：フリー
価格：2,200円+税～2,800円+税
●シマノ
☎0120・861130　fishing.shimano.co.jp/

ブラック　ライトグレー

カーキウェイブカモ　ブラックウェイブカモ

吸水速乾で、常に首元を快適に

現場ですばやく使えるノズルのないスプレータイプ

アッシュグレイ　　チャコールグレイ

真夏のフラットの釣りにもおすすめのウエア

PRESENT キャップスから スプレーフロータント剤を 3名様にプレゼント

キャップス／スーパージェットドライ2

ドライフライに一吹きし、フォルスキャストを数回行なえば、持続性のある撥水力を得ることができる。CDCパターンにも効果的で、パウダータイプのフロータント剤と併用するのもおすすめだ。ウール素材や、シンセティック素材のインジケーターなどの浮力アップにも使える。
●キャップス
☎06・6955・2066　www.capsjp.co.jp

PRESENT リトルプレゼンツから 速乾ロングTシャツを2名様にプレゼント

リトルプレゼンツ／ドライロングT

ラッシュガードがいいのは分かっているけれどもピタっとしたのが少々苦手……そんなアングラーの声から生まれたロングTシャツ。もちろん水辺での使用を前提のUVカット&吸汗速乾加工。時にはベースレイヤーに、あるいはミドルレイヤーにと何かと便利な一枚。今回はアッシュグレイ（Lサイズ）、チャコールグレイ（Mサイズ）をそれぞれ1名様にプレゼント。
カラー：アッシュグレイ、チャコールグレイ
サイズ：S、M、L、XL、XXL
●リトルプレゼンツ
☎044・932・3127　lpresents.com

フルックスから フライクリーナーを 2名様にプレゼント PRESENT

フルックス／ドライクリーナークロス

汚れや油分、水分をしっかり除去してくれる性能を持つクロス。メガネ、スマホ、カメラレンズの汚れはもちろん、フライラインのクラックに入った頑固な汚れもしっかりと拭き取ることができる。高い吸水力を持つので、濡れてしまったフライを復活させるのにも役立ってくれる万能クロス。
●フルックス
☎03・5970・6929　www.flux-net.co.jp

クロスが汚れたら、水で洗えば性能は回復

FlyFisher#282 プレゼント応募方法&読者アンケート

Eメール、または郵便ハガキに住所、氏名、年齢、性別、ご職業、電話番号をご記入のうえ、下記質問①〜⑥の番号と回答のアルファベット、および⑦〜⑪の項目を記入して送付してください。
プレゼント応募の締め切りは、2017年6月15日必着とさせていただきます。

Eメールの宛先　flyfisher@tsuribito.co.jp　※「7月号読者プレゼント／アンケート」と件名に明記ください
ハガキの宛先　〒101−8408　東京都千代田区神田神保町1−30−13　（株）つり人社『FlyFisher』編集部　7月号読者プレゼント／アンケート係

[質問内容]

①ご希望のプレゼント名をお書きください
②釣りに関わるもので、よくみるインターネット上のブログ、サイトがあれば教えてください
③もしよろしければ、あなたの年収を教えてください
A.300万円未満　B.300〜400万円未満
C.400〜500万円未満　D.500〜700万円未満
E.700〜1000万円未満　F.1000万円以上
④本誌の価格について
A.高いと思った　B.安いと思った　C.どちらともいえない
⑤本誌をどこで購入しましたか
A. 書店　B. 釣具店　C. インターネット　D. そのほか
⑥FlyFisherの購入状況を教えてください
A.今号が初めて　B.最近買い始めた
C.年に数冊買う　D.ほぼ毎月買っている
⑦あなたのフライフィッシング歴、およその年間釣行日数、ほかの購読紙、今号を買おうと思った一番の動機を教えてください
（フライ暦）＿＿年　（年間釣行日数）＿＿日
（購読紙）＿＿　（今号を買った動機）＿＿
⑧興味深かった記事は何ですか?
また、その理由も教えてください
⑨つまらなかった記事は何ですか?（それぞれ2つ）
また、その理由も教えてください
⑩愛車の車名を教えてください。
⑪Reader' s voiceへの投稿文がありましたらお願いします。
またフライフィッシングに関する写真も募集しております。写真を投稿される場合は、コメントを付けて、Eメールに添付いただくか、プリントした写真を郵送してください。

#281 プレゼント当選者発表
●ダストパッチ（フルックス）＝赤城卓さん、中井義郎さん　●フックソーサー（T-Craft）＝高峰明則さん
●オリジナルＴシャツ（ティムコ）＝佐久間孝さん、黒石智也さん　●フライフック・セット（がまかつ）＝西野俊之さん、松原美樹さん

［次号予告］

特集「テレストリアルっぽさを考える」

夏を迎えると陸生昆虫が活発に活動し始め、魚たちに食べられる機会も増えてくる。そんなこの時期、ベテランたちはどんなフライを準備しているのか？　そして魚から見てアリならアリ、甲虫なら甲虫と、それぞれを特徴づけているのは浮き方なのか、形なのか、それとも質感なのか……？　テレストリアルをテレストリアルたらしめる要素を考える。

※内容は予告なく変更する場合がございますので、あらかじめご了承ください。

2017年8月号の発売日は
2017年6月22日（木）です。

AD INDEX

BACKCAST

◉今年は久々に中禅寺湖を取材しました。やはり生命感ある湖の釣りはかなりスリリング。きれいなホンマスとレイクトラウトが出ましたが、来月はセミが鳴き始める時期にプライベートでも足を運びたいものです。［松郁］

◉あ〜水辺が恋しい。［大川］

◉毎年のことですが、まさに釣りの盛期というタイミングで、編集作業も忙しくなります。筆者陣からは景気のいい話も聞こえてくるのですが、ホウ……とうなずくばかり。取材の合間、わずかな時間だけサオをだすのが貴重な癒しです。［真野］

「取材当日は未明から小雨が降っていたが、強い風もなく中禅寺湖の湖岸にはたくさんのフライフィッシャーが訪れていた。山上湖は平地と比べて季節が遅れるので、冷たい雨でなければ状況はいいはずだ。湖岸に立つと雨具の隙間から生暖かい風が入ってきた。悪くない、と高まる期待感を抑えながらカメラ機材の準備をしていると早くもロッドが曲がった。ギュン、とメリハリのある引きは、周りの釣り人の視線を集める。嶋崎了さんはこのところ中禅寺湖に魅了され通っているひとり。そろそろですよ、と語った直後だった。ランディングすると格好のいい、きれいなホンマスだった。フライフィッシングをやっていてよかったという思いが、レンズを通して伝わってくる」

◉表紙撮影・文=津留崎 健
http://www.kentsurusaki.com/

FlyFisherのフェイスブックもチェック！

月刊『FlyFisher』から溢れた記事や写真、誌面では書けない取材秘話。私たちの公式フェイスブックでは、そんな耳寄り情報を配信中。
新鮮な情報を手軽に得られるのがウェブの利点。釣行前、あるいは釣りに行けずにくすぶっている時に、ちょいちょいのぞいてみてください。ちなみに検索の際は、カタカナではなく英語の「FlyFisher」でお願いします。なお気になる記事はシェアしておくと、好きな時にすぐ読めますよ。フライフィッシャー仲間の集う空間へ、誰でもすぐにアクセスできます！
(https://www.facebook.com/FlyFisherMagazine)

FlyFisher
JULY 2017 No.282
平成29年5月22日発行・発売
（毎月1回22日発行・発売）

定価　1,240円（本体1,148円）

編集人　真野 秋綱
発行人　山根 和明
発行　株式会社 つり人社
〒101-8408
東京都千代田区神田神保町1-30-13
☎03-3294-0781（営業部）
☎03-3294-0789（編集部）
FAX 03-3294-0818（編集部）
印刷　大日本印刷株式会社